

# 東方怪獸録

怪獸好き

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

幻想郷。それは現代から隔離され、外で忘れ去られた物や妖怪がたどり着く土地。そして、たまに異変が起こるが基本的にゆっくりと時間が流れる、地球の静かな楽園である。

さて、これから起こるのはある可能性の物語。外の世界に光の巨人と怪獣が存在したらという可能性の物語。幻想郷の住人はこれから起こる異変とどう戦っていくのだろうか。

この作品は私がカイとしてにじファンで書いていた小説です。小説初心者ですが、皆様に楽しんでいただければ幸いです。

# 目次

灼熱の侵略者	1
灼熱の侵略者2	11
灼熱の侵略者3	22
灼熱の侵略者4	42
親として、怪獣として	56
親として、怪獣として2	71
賽の河原紛争	88
木更津の幻想入り	108
半人前の剣豪	122
幻想のセブン	142
幻想のセブン2	158
人里お茶騒動	169

咲夜の過去・父との再会	182
子の心、親の心	199
子の心、親の心2	213
妖怪標本一号が捕まらない	226
闇夜の侵略者	237
子供の怨念は何を生みだす	256
夢は楽しく見ましよう	269
影の侵略・幻想の翼	286
かつての過ちは子にめぐる	301
信じる事の難しさ・悪魔の裏切り	322
記憶の中の絵	341



## 灼熱の侵略者

ここは現代と幻想の境界にある博麗神社。その見た目はごく普通の神社。少し新しい感じがするのは最近建て直したからか。だが、なぜか屋根に設置されている太陽発電の装置にはとても違和感がある。

ここにはよく人外が集まるためあまり人間の参拝客が来ないが、今日は珍しく二人の人間……もとい魔女と風祝がきていた。

「暑い、暑いぜー！」

そう叫びつつアイスクャンディを啜るのは普通の魔女こと霧雨魔理沙。いつもの暑苦しそうな魔女服ではなく、夏用のラフな服装である。

「うるさいわね、余計に暑くなるじゃない。」

そう言いつつ扇風機で涼んでいるのは楽園の素敵な巫女こと博麗霊夢。

その扇風機に横から手が伸び、首の方向が変わる。

「でも、この暑さは異常です。このところ毎日気温は三十度後半ですよ。」

扇風機の首を自分のほうに向けたのは祀られる風の人間こと東風谷早苗。

もちろんすぐに扇風機の首は霊夢のほうにむけられる。さつきからこの二人は扇風機の取り合いをしているのだが、扇風機を首振りにするという発想はないのだろうか。「たしかに、このところ起きている訳のわからない異変の中でも飛びきりの異変ね。」

彼女の言うとおり、最近の幻想郷ではちよつとした異変が立て続けに起きている。まず、何者かによつて幻想郷内外から結界に強く干渉されるという異変。この干渉はスキマ妖怪こと八雲紫や霊夢が出張る前に終わつたが、一歩間違えれば博麗大結界の崩壊につながりかねず、幻想郷中が肝を冷やした。

次に、幻想郷に迷い込む人間や妖怪が増加した。特に数ヶ月前に何か金属でできた建造物の一部が迷いの竹林の近くに落ちてきたのには幻想郷中の皆が驚いた。それは何か強力な酸で覆われており、内部には何人分もの半分溶けた死体があつた。だが、その中にもまだ息がある者が5人ほどおり、すぐに永遠亭に運ばれて一命を取り留めたらしい。

さらに、神隠しにあつた人間の中に外に出られない人間が出始めるといふ異変も起こつた。だが、そういった人間はなぜか身体能力が高かつたり知識が豊富だつたりするため、人間の里で長屋の一部を借りてそこに住み人里で働く者や、一部妖怪などに懐かれたりスカウトされたりした者などもあらわれ、なんとかなつてゐるらしい。一部には人里に新しい風を吹き込んでくれたと感謝する者もいるが、紫や幻想郷の仕組みを知る

者達はあまり人里には発展しすぎてほしくなく、しつかりと見張られているらしい。

彼女らが涼む扇風機を動かすソーラーエネルギー発電装置も実は外の人間の協力によるもので、間欠泉地下センターで研究される核エネルギーなるものに対抗心を燃やした一部の河童達が、妙に科学技術に詳しいあの謎の建造物の生き残りを秘密裏にスカウトし、共同開発したのだ。

話は少しそれたが、最近の異変で一番うつとおしいのがこの妙な暑さだろう。

「でもよ、いったい何がこの暖冬の原因なんだ？この一週間幻想郷中を飛び回っても分からなかったじゃないか。」

そう、この異変は暖冬、しかも飛び切りの暖冬なのだ。秋が終わり、そろそろ寒くなるなど思っていたらじりじりと気温が上がり、とうとう三十五度を超えてしまった。しかも、夏なら夜になるといくらか涼しくなるが、この暖冬はそんなに親切ではなく、夜も容赦なく気温が上がっていく。それにより人里では冬なのに熱中症で倒れる人が出てきているらしい。

この大迷惑な異変を、暇を持て余していた霊夢達が見過ごすわけがなく、競い合って解決に乗り出したが、どうも原因が分からないのだ。

とりあえず、冬の妖怪であるレティが寝坊しているのだろうと思ひ霧の湖に行ったが、暑さにやられてぐったりとしてはいたがレティはちゃんと来ていた。次に、一緒に

いた雪男を名乗る男を怪しんだが、必死に熱中症にかかった水の妖精を看病する姿から、無害と判断しそこを去った。

次に比那名居天子がまた天候を狂わせたかと天界に殴り込みをかけたがどうも違うらしい。

ならば核エネルギーによるものかと霊鳥路空を締め上げに地霊殿に行くが、地下のほうが涼しく関係がないことが分かった。

その後も知り合いを片っ端から当たるがどうも関係ある者が見つからず、逆に早くこの異変を解決しろと文句を言われることもあった。そして手詰まりとなったため、とりあえず話し合おうではないかと早苗が提案し、二人はしぶしぶだが受け入れ、博麗神社に集まったのだ。

「私としては、温暖化という概念がこちらに流れ込んできたのかなと思います。」

「オンダンカ?」

「はい。外の問題で、簡単にいえば気温がジワジワと上がっていく現象でしてね、外で一時大問題になったんです。」

「ほー。外は大変なんだな。でも、それならこんなに急激に気温は上がらないんじゃないかないか?」

「むう、そう言われてみればそうですね。温暖化なんて何百年単位の問題ですし。」



「なによ、使えないわね。」

そう少女達が話し合っていると、何者かが境内に入ってきて生きた。

「あら、咲夜じゃない。珍しいわね。」

現れたのは紅魔館の完全で瀟洒な従者こと十六夜咲夜だった。どうやらさすがの咲夜もこの暑さにはまいつているようで、涼しい顔をしているものの、うつすらと汗をかいている。

「ええ。異変の解決をお嬢様に言い渡されたのだけど、どうも原因がはつきりしないのよ。だからあなたなら何か知っているかと思って。」

詳しく話を聞いてみると、紅魔館内の気温はパチュリーの魔法である程度でしたが、妖精メイド達がダウンしてしまったらしい。元々役立たずとはいえ廊下にぐったりとされているのは目ざわりなので、なんとかしろと言われてたという。妖精は自然が具現化したようなもの。かつて春が来ない異変が起こった時はそうでもなかったが、今回の異変は人間だけでなく妖精たちにも大きくダメージを与えたらしい。

「残念ね。あたしたちも手詰まりよ。」

霊夢はひらひらと手を振り、伝える情報なんかないと示した。まあ、万一持っていたとしてもただで教えるほどの親切さがこの巫女達にあるかどうかは疑問であるが。

「ん？咲夜。何持ってるんだ。」

ふと、魔理沙は咲夜のメイド服のポツケからのぞく紙を見つけた。

「文文○新聞よ。とりあえず何もヒントが無いよりましと思っただけど…眉唾なものばかりね。」

部屋に上がり、机の上に新聞を広げる。ざっと記事が目に入るが、「恐怖!! 巨大なモツプの妖怪が幻想入り!?!」(独占取材! 緘口令が敷かれた賽の河原での紛争!?)と、どうも眉唾な内容である。

ぱらりぱらりと新聞をめくり続けるが、同じような記事が続く。

「そんなガセ新聞なんか…ちよつと、ストップ。」

霊夢は興味無さそうにそれを見ていたが、新聞のある部分を見たとき、何かをひらめいたようだ。

「なんだ? ただの天気予報の欄じゃないか。」

その欄には幻想郷各地の天気と気温が意外と事細かに記されている。どうやら、射命丸文は天気予報の欄をつけたらどうだという意見を反映したらしい。

すると霊夢は部屋の内に行き、墨と筆を持ってきた。

「わかったのよ。この異変の発生源の場所が!」

そして、新聞の天気予報用に幻想郷の略図が載っている欄に筆を走らせた。

「まさか文文○新聞なんかヒントが載っていたとはね。」

そして皆の方向に自信満々に新聞を突き付けた。

「見なさい。」

「おお。」

「これは…」

「こんなことに気がつかなかつたなんて…」

そう、霊夢は新聞に天気と一緒に乗っていた気温に注目したのだ。霊夢の手には、あの点を中心にほぼ等間隔で半円が描かれた新聞があった。そして、その半円の線上の場所はほぼ同じ気温なのだ。

「この点は…無縁塚ですね」

その半円は無縁塚付近を中心に広がっていた。そして、その点に近づくほど気温も上がっている。つまり、何かしらの異変の元がある可能性が高い。

「そうと判れば、一番乗りはあたしだあ！」

異変の場所が分かればじつとしてはいられない。魔理沙は箒にまたがり、フルスピードで無縁塚の方向へ向かう。

「待ちなさい魔理沙！これは私の仕事よ！」

「いいえ。霊夢さんは今回はお休みになっていてください！この異変は私が！」

その後ろから霊夢と早苗も競って飛び立つ。

咲夜も出遅れたと感じつつも、このままではレミリアに叱られてしまうと急いで無縁塚に向かう。

ここは現と幻想の境界が最も薄く、結界のほころびがある幻想郷の中でも指折りの危険区域である無縁塚。そこに4人は降り立ったが、神社を出た時の勢いはすでに消え、暑さにやられへろへろである。

「そ、想像以上の暑さだ。」

魔理沙は自慢の帽子で扇ぐが、熱い風が来るだけで涼しくもなんともない。

早苗が持つてきた温度計を見ると、四十度を超えいた。

「はやく解決しましょうよ。これじゃあ私たちが先に参ってしまいます。」

早苗も少しぐったりしている。霊夢や咲夜はすでに調べ始めているが、無縁仏と彼岸花が織りなす辛気臭い雰囲気と暑さなど感じていないような幽霊たち以外どうも目立ったものはない。

「…何もないわね。」

霊夢は紫の桜の下にいる幽霊を締め上げているが特に新しい情報は得られないようだ。

「でも、ここが一番気温が高いつてことは、熱気を操る程度の能力を持ったやつとかいて

もよさそうだけどな。」

無縁仏を調べている魔理沙と早苗。やはり幽霊や彼岸花以外に特に目につくものはない。

「ううう、なんだか、さらに暑くなってきていませんか？」

調査している間も気温はじわじわと上がっているようで、もはや息をするのもつらいほどだ。

「みんな、これを見て。」

そんな中、咲夜がなにか見つけたようだ。彼女は行き止まりの空間に指をさす。皆がそこに注目すると、なんだか空間が歪んでいるのが分かった。

「なんだ？ 蜃気楼か？」

「冥界につながろうとしているのかも……」

「あの歪み、だんだん大きくなってるわ。たぶん、あそこから熱気があふれてるんじゃないかしら。」

そうと判れば話は早い。この歪みを正せば少しはましになるだろう。

「結界の綻びなら私に任せて、あんたたちは引っ込んでいなさい。」

そう言うと、霊夢は結界を直し強化するための札を取りに戻ろうとする。だが、そんな悠長に構えている暇はないようだ。一気に歪みが大きくなり、気温も急激に上昇す

る。歪みの拡大を見た四人は各々の武器を構え、異変の元凶を待ち構えようとするが、あまりの熱気に目も開けていられなくなる。そして、元凶がいよいよ出てこようとしたときだった。

「きやー！」

「うわあ。」

「…ッ！」

「キヤアー！」

四人の足元の空間が裂け、四人はどこかに落ちて行き、そして意識を失った。

## 灼熱の侵略者2

気がつくくと、霊夢は暗闇の中を飛んでいた。いや、飛んでいるというより、漂っているのほうがいいかもしれない。自分の意志では動けず、ただ流されていく。その流れに体を任せていると、闇の中、彼女はぼんやりとしたものを見つけた。それは人影のようで、何かを自分に伝えようとしているようだ。

「お……さ………む」「き………れ………」

だが、耳障りなノイズが邪魔をして、それをしっかりと認識できない。

「おき……さい………」 「きを………む」

うるさいわね、邪魔しないですよ。と思いつつ、なんとかしてそのぼんやりしたものに近づこうとする。そして、とても懐かしい姿が見えてきた。そして…

「気をつけて、霊夢。」「おきなさい、霊夢。」

「ふあ?……紫?」

目をあけると、そこにはよく見知った顔があつた。

「ここはあんたの屋敷?」

ここはスキマ妖怪こと八雲紫が住む八雲亭らしい。無縁塚よりだいぶ涼しい…と

いっても気温は三十度はあるが。自分は薄い布団に寝かされており、周りを見ると、魔理沙たちも寝かされている。そして、だんだんと意識がはつきりしてきた。

「つてあんたよくも邪魔してくれたわね！」

そう、霊夢たちは異変の元凶が入ってくる一瞬前に隙間に飲み込まれ、ここに運ばれてきたのだ。霊夢は暗闇の中で見た懐かしい誰かの顔など忘れ、紫に詰め寄る。

「そんなに怒らないの。私はあなた達を助けたのよ。むしろ感謝してほしいわ。」

「感謝あ？」

すると、魔理沙たちも目を覚ました。全員何が起こったかわからないといった顔をしている。

「みんな目を覚ましたわね。」

「紫、どういうことだ？」

霊夢達にとつてはせつかくの異変解決のチャンスをつぶされたのだ。決して愉快な気分ではない。

四人とも非難がましい目線を紫に送る。だが、紫は意にも解していない。

「あら、これを見ても私を非難できるかしら？」

すると紫は隙間を開き、ある光景を見せた。

「これは……」



四人ともその光景に息をのんだ。そこに映っていたのは無縁塚だった。そして……  
ギヤアアアアアアアアアア……

まるで燃える小山に四足をつけたような化け物がそこにいた。その足元では無縁仏は砕け、彼岸花や木々は燃え上がり、地面は赤熱し、幽霊たちは逃げ惑っていた。

「温度は遮断してあるわ。あと数秒無縁塚と幻想郷の間に境界を作るのが遅ければければ幻想郷は火の海になっていたはずよ。」

四人とも声が出なかった。あの場所にいれば、自分達はこんがり焼かれていただろうと思うとぞつとする。

「紫、あれは……何?」

最初に口を開いたのは霊夢だった。この質問は彼女ら3人が抱いた疑問である。隙間に映るあの巨体はいったい何なのだ。幻想郷にはあんな巨体を持つ化け物はいない。いるとすれば伝説の龍くらいだろう。

だが、一人だけその答えを知っていた。あの巨体がどんな存在であるかの答えを。

ふと、魔理沙は早苗が震えている事に気がついた。蒸し風呂のような気温なのに、まるで氷室に薄着で放り込まれたかのように震え、自分の体を抱きしめている。

「おい、早苗。どうした。」

魔理沙が肩をゆすると早苗ははっと顔を上げ、紫のほうを向く。何か言おうとする

が、混乱して口がもつれてなかなか言葉が出ないようだ。

「なんで、なんでですか？なんで…」

そこで言葉をいったん切り、深呼吸をして混乱を静めて叫んだ。

「なんで怪獣がこの幻想郷にいるんですか!!」

そう、外の世界に住む人々の恐怖の対象であり破壊が具現化したような存在。怪獣が幻想郷に侵入してきたのだ。

だが、早苗の言葉にほかの三人はきよとんとしている。

「怪獣…それがあの化け物の名前なの？」

この霊夢の言葉があらわすように、幻想郷に住む人間たちは怪獣を知らない。まあ、外と切り離された世界に住んでいるのだから無理もない。

だが、つい最近まで外の世界にいた早苗は怪獣の恐怖を体験したことがあったのだ。

「はい、怪獣…外の世界の化け物、妖怪たちみたいなものですよ。まあ、妖怪たちの方が何万倍もかわいげ

がありますけどね。それより！なんであれがこの世界にいるんです、紫さん！」

早苗は紫に詰め寄る。だが、当の紫は眠たそうに

「さあ？」

この一言で済ませた。もちろんこんな答えで早苗の気が済むはずがない。さらに紫

に詰め寄る。

「さあつて…そんなわけないでしょう！何か知って…」

だが、これ以上は言えなかった。紫から来る圧力がそれ以上の言葉を許さなかった。「本当に知らないわ。むしろ私もあの怪獣の出現に驚かされたのよ。」

嘘だ。そう言いたかったが声が出ない。早苗は引き下がるしかなかった。

「で、紫。あの怪獣つてのが今回の異変の元凶なのね。」

「ええ。あれがこの暖冬の元凶。とりあえずあなたたちにはあの怪獣を倒してもらわ。」

「おいおい、待てよ紫。あれ…怪獣だっけか。怪獣つてのはなんなんだ？」

「ええ。怪獣が何か分からなければ、対策も何も…」

「大丈夫よ。多分、あの怪獣については矢守神社に記録がある筈よ。」

そう言うと、四人の座っている布団の下に隙間ができる。

「え？」

「じゃあ、いつてらっしゃい。」

四人は再び隙間に飲み込まれ、守矢神社へと落ちて行つた。それを紫は見届け、部屋に紫の式である藍が現れるのと同時に布団に倒れこんだ。

「紫様！そのお怪我は!?!」

「ああ、藍……悪いけれど、薬を持ってきてくれないかしら。」

紫は四人の前では何ともないように振舞っていたが、背を深く切り裂かれていた。隙間で傷は隠していたが、受けたダメージは大きいようだ。頑丈な妖怪とはいえ、さすがにつらいのだろう。脂汗をかき、顔をゆがめている。すぐに藍は薬箱を持ってきて、介抱にあたった。

「藍、何年ぶりかしら。この幻想郷に怪獣が現れたのは。」

藍が紫を介抱する中、紫は口を開いた。

「…あのお方が亡くなって以来ですから、五百年以上は。」

「ええ。この幻想郷に侵入しようとしてきた怪獣や侵略者はたくさんいたけれど、あの人が死んでから侵入されたのはこれが初めて。」

紫の顔は歪んでいた。その表情には悔しき、怒りが滲んでいた。

彼女はその気になれば弱い怪獣や宇宙人程度になら十分勝てるほどの力がある。今回もあの怪獣が境界に侵入する前に倒そうとした。だが、その怪獣は何者かに操られていたようで、その何者かに紫は不意を突かれ、背中を深く切り裂かれたのだ。

「何者か知らないけど、ずいぶんとなめたことをしてくれたわ。」

紫は痛手を負いながらも無縁塚を幻想郷から切り離し、霊夢たちをそこから脱出させた。

だが、その何者かの嘲笑が響く中、怪獣が幻想郷に侵入を果たすのを見送ったのだ。紫にとつてこれほどの屈辱があるだろうか。

「笑いなさいな、藍。こんな無様な姿をさらすあなたの主人を。」

「紫様、そんなことを言うのはやめてください。あなたらしくもない。それに、あの四人なら怪獣の一体程度なら……」

「……ええ。霊夢たちに任せるしかないわね。」

そして、隙間を開き、霊夢らの様子を見ることにした。

「うわ……つと。紫め、ホイホイと隙間を使って飛ばしやがってー!」

その頃霊夢らは守矢神社に転移していた。どうやら、二人の神様は外出中のようだ。

とりあえず、机を囲んでこれからのことを話し合いたいが、あの怪獣とやりにトラウマのあるらしい早苗の様子が少し心配である。

「それより、早苗。あなた大丈夫? ずいぶん青い顔してるけれど……」

「無理しないで、べつに神社に留守番しててもいいのよ。」

「ああ、お前、まだ体が震えてるぜ。怪獣は私たちに任せておとなしく待つてろつて。」

三人とも早苗を心配している。異変時は争いどこか常人離れしているとはいえ、やはり根は優しい

のだろう……多分、恐らくは。

「いえ、大丈夫です。」

そう言う早苗だが、やはり顔は青く、僅かに体が震えている。

彼女は自分の部屋に向かい、一冊の本を持ってきた。

「……その本は何。」

「これは外の世界の怪獣が載っている怪獣図鑑です。あの怪獣、確かこの本に載ってたよな。」

早苗は本を机の上に置き、パラパラめくった。

ちなみに、この図鑑は外の世界でウルトラマンメビウスが地球を去った後、怪獣頻出期とまではいかないまでも怪獣が出現し始めた事に対し、市民も怪獣に対する最低限の知識を持ってもらおうと編集された本である。

「確か最初のほう……あった。こいつです。」

そこに載っていたのは灼熱怪獣ザンボラー。かつて鎌倉で人間の山の開発に怒り暴れまわり、初代ウルトラマンによって倒された怪獣である。

「へえ、面白そうな本だな。」

だが、魔理沙は怪獣そのものよりもその本に興味をひかれたようで、自分のほうへ引き寄せようと手を伸ばす。だが、怪獣図鑑は一瞬で咲夜の手に収まった。

「でも、ちよつとおかしいわね。」

「おい咲夜、何すんだよ。」

魔理沙は引き寄せようとした本を取られ、少し不機嫌になる。

「とりあえず、本に關しては図書館から盗んだ本を返してからものを言いなさい。」

「盗んだんじゃ…」

「はいはい。死ぬまで借りたんでしょ。で、何がおかしいの？」

「ここで言い合いになつても面倒なので、靈夢が話題を元に戻す。」

「ええ、隙間から見た怪獸。こいつよりかなり大きかったような気がするの。」

そう言われてみると、隙間から見た怪獸は、この怪獸より皮膚はいくらか明るい色調でより山に近い姿をしていた。

「…確かに、こいつよりも倍くらい大きかったわね。あれの子供かしら？」

「さあ…でも、当時の防衛チームは一回しか戦っていませんから、もしかしたらあの怪獸はザンボラーの成体かもしれませんね。」

早苗たちの出した答えは少し間違つていた。今回幻想郷に出現した怪獸の名は確かにザンボラーである。だが、このザンボラーは外の世界出身ではない。アメリカにウルトラマンパワーがいたという平行世界に出現した、パワードザンボラーなのだ。身長体重共に日本の二倍だが、体温は200分の1ぐらいである。元は燃え上がる自然の怒

りが具現化したような怪獣で、その世界では衛星レーザーやミサイル、パワードのメガスペシウム光線すらすら意に介さず、最終的にパワードに説得されて引き下がった。

だが、謎の侵略者により洗脳され、侵略兵器として幻想郷に送り込まれたようだ。

「まあ、何にしても、あれを倒さないと、雪合戦もできないぜ。」

「といつても、体温は十万度…熱すぎるわね。」

「ええ、それが過大評価だったとしても、実際に彼岸花なんて自然発火してるし、お札なんて燃え上がりそうだし、ナイフや針も溶けちゃいそうね。」

「そもそも、スペルカードルールなんて通用しませんよ。怪獣なんて、知能のないただの化け物なんですから！」

相手との間で意思疎通ができればスペルカードルールが使用できる。だが、相手は怪獣。意思疎通ができる可能性があるのは古明地さとりくらいだろう。しかも、ルール無視でぶちのめそうにも相手の体温は十万度近く…実際は500度以上なのだが、どちらにせよ、さしもの霊夢でも近づくと事すら困難ではお手上げである。

「レティヤやチルノならどうだ。あいつらなら冷やせるんじゃないか？」

「それは難しいんじゃない？彼女たち、結構ぐったりしていたし。」

確かに彼女らが見たとき、チルノ達は赤い顔をしてひどく汗をかいており、完全に熱中症にかかっていた。あれに動けというのはさすがに酷だろうし、看病していた雪男と



かいていた男が許可しないだろう。

「ああ、めんどくさい！ いっそ、暑さを感じない服でもないかしら。」

この霊夢言葉に、早苗の脳にある考えがひらめいた。

「そうだ、河童たちなら……」

「なによ、早苗。」

「はい、山の麓にある間欠泉センターなんですが、外壁は核融合の熱に耐えられる材質です。あれを作った河童たちなら、耐熱防火服を作れるんじゃないかと。」

なるほどと四人は思った。技術バカの河童達なら比較的友好的だし、断られても少し弾幕ごっこという名の話し合いで勝利すれば何か用意してくれるだろう。それに魔理沙と河童の水槽の技師こと河城にとりは知らない仲ではない。頼めば力を貸してくれる可能性が高い。

「じゃあ、河童の隠れ家に行かなくてはね。ところで、だれか道は知ってるの？」

この問いに霊夢と早苗は顔を見合わせた。そう言えば、自分らにはにとりの家の場所を知らない。だが、魔理沙は自信ありげな笑みを浮かべている。

「よおし、私が案内してやる。」

## 灼熱の侵略者3

とりあえず、四人は河童たちに協力を仰ぐと山を下り、にとりがよく集まる滝に来了。途中、天狗などと戦闘になるかと思っていたが、天狗とはほとんど出会わず、たまに見かける妖怪たちの弾幕にも力が入っていなかった。どうやら頑丈な天狗達すらこの暑さにはまいてっているようだ。まあ、平均気温四十度ともなれば当然かもしれない。

「よし、到着だ。おーい！にとり、いるかあ？」

魔理沙が川に呼び掛けると、しばらく間があき、水面に妖怪弾頭こと河城にとりが顔を出した。その姿はいつもの青い服の上から白衣を羽織っている。イメチェンだろうか。

「おう、魔理沙じゃないか。どうしたんだい？」

「ああ、ちよつと頼みたいことがあつてな。」

「ふうん。まあ、外は暑いでしょ。後ろの三人も我らの秘密基地に招待しよう。ちよつと待っててね。」

にとりはそう言うと、川の真ん中に進み水中に潜った。しばらくすると、何か機械音が聞こえてくるのに咲夜は気がついた。

「なに？この音。」

音は滝の方向から響いてくるようだ。そして、わずかに地面も揺れている。彼女らが滝のほうを向くと、信じられないことが起こっていた。

「滝が、割れた？」

滝が滝壺近くで割れて入り口ができていた。どうやら、河童は滝裏を改造していたらしい。滝が割れるところなど初めて見た四人が啞然とする中、にとりは滝にできた入口から四人を呼ぶ。

「おーい、そんなとこにいないで、早く飛んできてよー！」

たしかに、口をあけていても仕方がないと、四人は入口へ飛んでいく。そして全員が入った後、にとりは急いで入口を閉めた。そして、しばらく薄暗い通路を進むと、金属製の扉があった。にとりは、首にかけた札をそばにあった箱に挿しこむ。すると、なぜか自動で扉が開いた。そして、にとりは自信満々に魔理沙らのほうを向く。

「さて、我ら河童の誇る秘密基地にようこそ！」

扉の向こうは全くの別世界だった。壁は金属製、天井には謎の光源が部屋を照らしていた。白衣を着た河童らしき妖怪が歩き、いろいろ話し合っている。なにより気温が全く違う。外より格段に涼しいのだ。

「すごく涼しいわ。外とは大違い。」

「ああ。まるで生き返るようだぜ。」

「どうやら、何かのからくり……外でクーラーと呼ばれる機械で空気を冷やしてるらしい。」

「へえ、河童はクーラーまで開発していたんですか。」

早苗も久々に感じるクーラーの涼しさに顔がゆるむ。

「うん。早苗の家にあったクーラーとか、あの謎の建造物を参考に大型空調システムを開発したんだ。」

「そういえば、あの残骸は河童が引き取ったんでしたよね。でも。進歩しすぎな気が……」  
「この早苗のこの言葉もつともである。確かにこの内装なら外の世界の研究所と言われても疑問を感じないだろう。」

「ふふん。我ら河童の技術に不可能はない……といっても、この基地はまだ奥のほうが建造途中だし、なにより木更津主任さんたちの協力あってこそだけだね。」

「キサラツ？」

「ああ。あの建造物の中の生き残りの一人だよ。いやーあの人達はほんとにすごくてね、彼らが来てくれたおかげで河童の技術は50年は進んだよ。」

そう話すにとりの目は木更津という人に対する尊敬の念で輝いていた。その時、ふと霊夢は自分たちを外の世界に返せと言ってきたあの建築物の生き残りたちを思い出し

た。

あの建造物の生き残りもまた、なぜか外に出られなかった人間たちだ。彼らのうち比較的若い四人が博麗神社に来たが、その時の彼らは自分たちは何が何でも外に帰らなければならぬと、ほかの出られなかった者たちよりも食い下がり、一時は一触即発の雰囲気となった。しかし霊夢自身、彼らが出られない理由が分からないためどうすることもできず、彼らは気落ちして帰って行った。

次にやってきたのは中背で鍛えられた体と知的な光がある目を持つ中年男性が来た。彼は若者の非礼を詫びに来たようで、菓子折りとソーラーパネルを持ってきた。確か彼の名が木更津だった気がする。

そうしゃべっているうちに、にとりの部屋と名札がかかった部屋についた。そして部屋の中に入ると、にとりはよく冷えた麦茶ときゅうりの砂糖漬けを出した。

「さて、魔理沙。今日はそんな大所帯でどうしたの？」  
冷えた茶でのどを潤した後、にとりは切り出した。

「ああ、実はな……」

魔理沙は今の状況……この暖冬の原因が怪獣ザンボラーによるものだということ、ザンボラーは小山のような巨体と山火事を起こすほどの体温を持つこと。そして、こちら側に有効な攻撃手段がないことを説明した。

「なるほど、そのザンボラーっていう巨大生物がこの暖冬の原因か……」

「ああ、そいつがまた馬鹿みたいに熱くて近づけないんだ。だからさ、耐熱防火服つてのがあつたらしくれないか。」

「うーん……確かにあるけど。こつちだよ」

すると、試作室と札の掛かった部屋に向かった。

「たしか、ここに耐熱服があつたはずだ。探してくるから、入つてこないでね。」

そう言うと、札……カードキーというらしい物を使い、部屋に入る。もちろん、そんな忠告など聞かない魔理沙は部屋に侵入しようとするが、一瞬で扉が閉まる。そこら辺のセキユリティはしつかりしているらしい。

「まったく、何やってんのよ魔理沙。」

「そんなこと言つたつて、こんなお宝の山を目の前にして、何もしないんじゃ私の名がすたるぜ。」

そんなこんなで再び扉が開いた。

「おまたせ。」

しばらくして、二着の銀色の服……らしきものを運んできた。目の部分は褐色のガラスでできており、頭の先から手の指、つま先まで全てを覆う銀色のメタリックな物質でできている。正直、とても動きづらそうだし、かつこ悪い。

「これは私と木更津主任さんが共同開発した特製耐熱防護服。一応、山火事の中で作業するために開発したんだ。だから、断熱性、耐火性ともに天下一品だよ。」

「へえ、でも、山火事の中でなんてやることがあるの?」

「さあ。主任さんが言うには、レスキューっていう活動に必要なかもだつて。とにかく、理論上は山火事の中でも3600秒は大丈夫。」

「へえ、じゃあもらつてくぜ。」

そう言い、魔理沙は受け取ろうとするが、にとりは待ったをかけた。

「待った。これの性能はあくまで理論上だし、まだ実験前だから絶対に安全だなんて言えないよ。それでもいいの?」

そう、にとりが言ったのはあくまでこの耐熱服の理論上の性能。実験はまだ行っていないらしい。実際に森を燃やすわけにはいかないから当然である。それに、いくら理論上の性能は良くても、実際に現場で役立つかは疑問が残る。にとりにしてみれば魔理沙とは友人だし、安全と言いきれないものを渡すのには抵抗がある。だが、魔理沙はそんなことは意にも介さず、

「じゃあ、これが第一回実験だ。それでいいだろ。」

という。断つても弾幕ごっこことなりそうな雰囲気である。河童の技術の結晶がいつばいある部屋の前でドンパチは危険だ。仕方なしに、にとりはある条件を出した。

「仕方ないなあ。じゃあ、これを持っていくのなら、私たち研究チームも連れて行つてよ。」

自分達が行けば、万一の事態が起きても対策ができるし、リアルタイムでデータが取れるだろうと考え、にとりは自分と数人の河童と実験機材を神社に持つていくことを条件とした。だが、その前ににとりは確認することがあった。

「ところでこの服、誰が着るの?」

これをだれが着るかである。着るときにスリーサイズなどがわからなければ、服がぶかぶかになったり、腕が短くなったりして、安全性がぐつと下がってしまう。

その言葉に、少女四人は顔を合わせた。

「私は無理ね。ナイフじゃあの巨体と皮膚に有効なダメージは与えられそうもないもの。」

「私も無理よ。お札なんで全部燃えちやいそうだし。」

これを着るの咲夜と霊夢は辞退した。有効な攻撃方法がないのだから仕方がないが、実際のところはこんなかつこ悪くて暑苦しそうな服は着たくないというのもあるだろう。

「じゃあ、私と早苗が着ることになるな。」

「はい。絶対に倒してみせます!」



それに対しもう二人は乗り気だ。片方は新しい物好きの好奇心を満たすためで、片方はまるで外の世界での恨みを晴らさんという意気込みからのようだ。

「分かった。じゃあ二人とも、体のサイズを測るからこっちに来て。」

そして河童による身体測定は終わった。そのあと、機材の持ち込みと耐熱服のサイズ直しのために明日までかかると言われたため、とりあえず明日、この時間に矢守神社に集合とし解散した。

「諏訪子様、加奈子様ただいま戻りました。」

早苗は解散した後すぐ神社に戻っていた。しかし、河童との話し合いは思いのほか長く続いたようで、すでに二人：いや、二柱の神は帰ってきているようだ。

「お帰り、早苗。」

「お帰りー」

二つの目のようなものがついた帽子が特徴的な少女のような見た目のミシヤクジ様である洩矢諏訪子と、グラマスな姿に威圧感満載の元風の神様な山の神様、八坂神奈子。二人はかつて諏訪大戦で戦った敵同士だが、今は机を囲み夕食を待っている。そう思えば中々シユールな光景だろう。

二人とも、伊達に早苗と家族のように住んではいけないようで、早苗の異常にすぐに気

づいた。

「どうしたの、遅かったじゃないか早苗。」

「なんだか顔も青いし…もしかしたら、あの巫女になんかされたのか?」

「いえ…実は……」

早苗は事情を説明した。すると、二柱の雰囲気が一変する。

「怪獣…だと。」

神奈子は威圧感の中にも温和な感じがしていたのが消え、すさまじい殺気をまとい、

「へえ、ここにまで来たのかい。」

諏訪子は幼い感じが消え、黒いオーラをまとう。

「いいだろう、あの時の借り、返してもらおうか!」

「外じゃ辛酸をなめさせられたけど、ここなら……」

二神とも何か怪獣に恨みがあるようだ。立ちあがり、無縁塚へ向かおうとする。

だが、それを早苗は止める。

「待っててください。これは、私にやらせてください。」

それに、二神は驚いた顔をする。

「…早苗、何を言うんだい?ここは私たちに任せな。」

「そうだよ、確かに早苗が気持もわかるけどさ、さすがに危険だ。妖怪とはわけが違うん

だよ。」

今度は二神が必死で早苗を止める。早苗はこの神社の大切な風祝であり、家族だ。死んでもらっては困る。

「いえ、やらせてください！私は……私は、父と母の仇が打ちたいんです！」

「早苗……」

なぜ早苗が怪獣に恐怖していたのかというと、かつて外にいたときに起こった悲劇が原因なのだ。

かつて早苗たちは外の世界にいた。そして、もちろんのことだが早苗には父も母もいた。二人とも神は見えずとも自らが祭る神々に対する信仰は厚く、神が見えると言う早苗を気味悪く思わずに大切に育ててくれた。早苗にとっても、二柱の神にとっても誇れる人間だった。

だが、二人の人生の終わりはあつけないものだった。

外の世界での怪獣による被害は、防衛チームによる活躍で確かに少なくなってきた。だが、それでも怪獣の出現は突然であり、その猛威は凄まじい勢いで人の命を消す。

早苗の住んでいた所に出現したのは百足怪獣ムカデンダー。その強靱な生命力でタロウやメビウスを苦しめた怪獣であるが、まだ別個体がいたようで、次々と家を踏みつぶし、炎で焼き払った。その足元で早苗たちは逃げ遅れてしまったのだ。早苗らは何と

か逃げようとするが、早苗の両親は家の下敷きになってしまった。早苗の目の前で……その姿を早苗は忘れられない。忘れられるような記憶ではない。それから、早苗は怪獣に対する憎しみと恐怖を心に宿していた。

もちろん、二神はその早苗の心を知っている。それでも、だからこそ止めようとする。「ダメだ。早苗、おまえが戦おうとする理由は憎しみだろう。」

「……それが……いけませんか!？」

「いけないね。憎しみに戦う人間は簡単に命を落とす。そんな心構えのやつを戦場にだなんて……」

「あなたたちに……神奈子様たちに私の憎しみはわからない!」

ダン……と机をたたき、自分の部屋に向かう早苗。

「ま、待ちなよ早苗!」

諏訪子の言葉も今の早苗には届かない。早苗はわずかに振り替わり、河童達との話し合いで決まったことを伝える。

「明日、河童達が機材を持ってきます。あと、霊夢さん達4人も来るので、その間はどっかに行っていてください。では。」

そういうと、部屋に入って行った。すぐに諏訪子が扉を開けようとするが、内側から強力な封印がされているようでびくともしない。

「早苗……」

「諏訪子、今はそつとしておいてやろう。」

二神は不安げな表情でそのドアを見つめる。

次の日の昼、まず矢守神社に着いたのは機材を持った河童たちだった。だが、水生の河童にとつてはこの暑さは拷問のようなもの。すでにフラフラで今にも死にそうだ。それを出迎えたのは神奈子。どうやら、昨晚から早苗は部屋を出ていないようだ。とりあえず水を与え、落ち着かせる。

「どう……も。滝……裏の……河童……です。早苗……さん……は……いますか……。」

「ああ。いるが……お前達大丈夫か？早苗！河童たちだぞお。」

そう神奈子いうと、前日から開けられなかった扉が開き、早苗が顔を出す。

「あ、河童さん達お疲れ様です。こちらにどうぞ。」

早苗は河童たちを居間に通す。そこには、すでに無縁塚への隙間があいていた。その周りに河童たちは機材を置いていく。

「ふわあ……居間では少し狭かったですかね。」

「ま……まあ、足り……なければ……外まで……ケーブルを……延ばすまでです。」

河童達はつらそうにフラフラしているが手際は良く、ソーラーパネルや何やら無縁塚

の地図が映った液晶機械。他にも、何に使うのかわからない機器がズラリと並べた。

「あれ、ニトリさんはどこに？」

「ああ…サイズ…合わせや、木更津……さんとの…話し合いを…していました。でも、すぐ…」

来るはず…ですよ。」

そう話してる間に、石段を数人上ってきた。

「あら、ニトリさんと…あの人は？」

「あ…あの人が…木更津さんです。」

階段を上ってきたのは薄汚れた作業着を着た男たちと、暑さでげんなりしたニトリだった。

ニトリの隣には、男たちの中で小柄ながら一番の存在感を放つ男がいた。

「おうい、早苗。来たよー。」

「お待ちしました。ええっと、隣の人が…」

「初めまして。木更津三四郎と申します。気軽に木更津と呼んでください。」

どうやら、この人が河童の技術革新の中心人物のようだ。なんだか優しそうな人のような雰囲気がある。だが、こう言つては何だがなぜ来たのだろうか。

そして、木更津は男たちに声をかける。温和な表情は引き締まり、目には炎が宿る。

「おう!!お前ら!ボーつとしてねえで河童のみんなを手伝わねえかあ!!」

その一声の下、男たちは作業中の河童達のほうへ向かうい、木更津自身も作業に入る。だがその大声に思わず早苗は耳をふさいでしまった。

「やっぱり驚いた?早苗。」

「え…ええ。」

「私も、今でも普段のあの優しい木更津さんと鬼の木更津さんのギャップに驚かされるよ。」

だが、いったい木更津は外で何をしていたのだろうか。早苗の胸にそういう疑問が浮かんだ。

早苗は気づかなかつたが、木更津はぼそりとつぶやいていた。

「しかし…:…:怪獣か。まさかここでもやつらと戦うことになるとは…:…:人生はわからないな。」

その作業着の胸には、三つのアルファベットが刺繍されていた。

しばらくニトリと話をしてしていると、空から三つの影が降りてきた。どうやら、三人が来たようだ。

「あれ、皆さん早いですね。」

「ま、神社にいても暑いだけだしね。暇つぶしに来たのよ。」

「お嬢様にせかさされてしまつて…」

「早くあのスーツを着たかつたんだよ。」

三者三様の答えが返つてきた。まあ、三人らしいと言えばらしい答えである。

「じゃあ、早苗に魔理沙。実際に着てみようか。」

ニトリの言葉にうなづき、二人は早苗の部屋に向かう。…はずだったが、魔理沙は廊下や外までのみ出す機器に興味があるようだ。河童にあれこれ聞いている。

「ま…魔理沙さん…」

早苗はその様子を見て少し飽きている。本当に戦つて勝つ気があるのだろうかとも思うが、いつも道理の振る舞いで少し安心でもある。

早苗は駄々をこねる魔理沙を引きずり部屋に入る。そして、何もすることがなく、河童達が並べる機械を見ている二人に木更津が近づく。手には、1つの突起物の付いた何か四角い箱のようなものを持つている。

「お久しぶりです。霊夢さん。」

「あら、たしか木更津さんだつたっけ？」

「はい。ええと、お隣の方は…」

「初めまして、十六夜咲夜と申します。」

「ああ、咲夜さんですか。実は、お二人にも手伝つていただこうと思ひまして。」



「手伝う？言っておくけど、私たちは機械はからきしよ。」  
「いえ、実はこれを。」

そう言うのと、手に持っている箱の突起物を動かす。すると、彼の後ろからキュルキュルと音を立て、なにかが近づいてきた。

大きさは膝ぐらいまでの高さで三尺くらいの全長のある小型の車だった。どうやら、木更津の持つ箱に付いた棒によって動いているようだが、どういう理屈かは見当もつかない。

「これは私たちが開発した小型偵察車マツカー。このレンズのところで見えた画像を送るだけでなく、温度、湿度などをリアルタイムに発信してくれる。それだけじゃない。気休め程度だけどレーザーも搭載しているから牽制もできる。」

「へえ、（はいてく）とかいうやつですね。」

「本当なら我らが動かしたいのですが、私たちは機器につきつきりでないといけないので、お二人に動かしていただけたらなと。」

「どうやら、二人にこのサポートメカの操縦を頼みたいらしい。」

「ふうん……面白そうね。あいつらの姿を眺めてるだけよりかはいいか。」

「まあ、何もやらず帰ったら怒られそうですしね。」

二人も乗り気のように、木更津から手渡された（こんとろーら）とか言うのをいじ

くる。

「うおお！ マッカーが襲ってきたあ！」

「機材は死守しろ！ 一つ一つが河童の技術の粋だぞ！」

「し、試運転なら向こうでやってくれえ！」

向こうのほうで、河童達がワーワー言っているが気にせずいじくる。

そうしていると、早苗の部屋ら二人が出てきた…出てきたのだが、

「プ…く…く…なに、その格好。」

二人はまるで箱人間のようになっていた。頭、胴は完全に銀色の箱で背についでいる箱がかなり重そうである。そして腕と脚はなんだかぶかな筒になっており、手と足が一番まともだが、かなり分厚い。

見ためは恐ろしく暑苦しく不格好である。

「い、息苦しくて暑苦しくて重い…何とかしてくれ。」

「おう、悪いね。ちよつと待ってね。」

そう言うと、ニトリは手に持ったリモコンをいじる。すると…

「おお、涼しい。」

「その背中の伊達に重くて大きいんじゃないよ。それにはクーラーや換気浄化機能がある。そのかわり、空は飛びにくいから、スピードは生かせない。地上から目や背びれ

みたいなところ、

腹など柔らかかそうな所を狙うんだ。」

「げ、飛べないのかよ。」

「うん。第一、木が自然発火しているのに筈なんて…燃え上がるよ。」

「むむ…やつぱり断ったほうがよかつたかな？」

「もう遅いですよ、さ、行く準備は整いました。行きましょう。」

「待った待った。まだ微調整をしないと。霊夢と咲夜は先にマツカーを使ってよ。」

「分かつたわ。」

そして、最初にマツカーが出発した。そのマツカーから送られる映像や温度のデータを調べ、怪獣の

大体の位置を把握するのだ。

マツカーが送ってくる映像は、地獄と化した無縁塚だった。もはや彼岸花はすべて燃え尽き、地面はからからに乾き、空は雲で覆われ、点々と生えていた木はほとんど立った炭の柱となっている。

その光景を見て、これが本当に現の光景かとみな言葉を失った。

そして、気温データも送信されてきた。どうやら、紫のはった結界を何とか破つて幻想郷に侵入しようとしているらしく、巨大な熱源が無縁塚に張られた円状の結界に沿つ

て移動している。

「ううむ…平均気温330℃最も高い点で700℃。文献よりははるかに低い、かなりの脅威ですね。」

気温を見ていた河童が報告する。

「ううう…魔理沙、大丈夫？死なないでね？」

ニトリは急に不安になってきた。魔理沙は確かに人間としてはかなり強いほうだろうし、旧地獄にまで行ったこともある意味超人だ。だが、今回の異変は今までとは違い、行動がかなり制限される。しかも、弾幕ごつこと違い、下手をすれば死ぬかもしれない。

「大丈夫さ。この魔理沙様を信じろつての。」

しかし、魔理沙は自信ありげに言う。実は、幻想郷有数の火力を誇る八卦炉が使えなければさすがにまずいと、香林堂で耐熱性に改造してもらったのだ。最大火力は山を消し飛ばすほどの威力。さすがにその出力のマスターズパークを放てば自分もただでは済まないかもしれないが、最大出力で打たなければいいだけのこと…と魔理沙は考えている。

「じゃあ、早苗は大丈夫？」

「ええ。当たり前です。」

早苗もまた、戦闘準備は万端のようだ。

いよいよ出発の準備が整い、スキマから無縁塚へ向かおうとしたとき、そこに神奈子と諏訪子かがやってきた。

「早苗…聞け。」

「……………」

「お前がそこまでいうなら戦うのは認めよう。」

「……………」

「ただ、これだけは心にとどめておいてよ。憎しみは戦う力にはなる。でも、冷静さを殺す両刃の剣だつてことをね。」

「……………わかっていきます。」

「ならいいんだが……」

二神は不安そうだが引きさがる。

そして、二人は無縁塚へはいつて行った。

## 灼熱の侵略者 4

「うわ、実際に見るとすごい光景だ…」

画面に映る映像と実際に眼球で見える景色は迫力が違う。日は分厚い雲で隠れ薄暗く、空気は加熱され、フィルター越しでもかすかに熱気を感じるほどだ。すこしあたりを見渡していると、通信音声が来た。

〔魔理沙、早苗。聞こえる?〕

「ああ、聞こえるぜ。」

「聞こえます。」

「いい、こつちで時間はカウントしているけど、出口はここしかないから、迷わないようにね。」

「おう!」

「はい。」

「あと、怪獣へはマッカーが先導しているから、マッカーを見失わないで。じゃあ、検討を祈るよ。」

そして、霊夢と咲夜が操縦するマッカーを先導に、魔理沙は駆け出し、早苗は飛んで

いく。すると、すぐに離れた場所に小山のような巨体が見えてきた。

「で…でかい…。」

「……。」

（それ以上近づくと服が限界に達する。そこから攻撃して。）

「わかつたぜ。」

「わかりました。」

二人は、互いの弾幕をパスワードザンボラーの体に集中砲火した。しかし、かなり遠めの攻撃だからか、パスワードザンボラーは全く意に介した様子がなく、相変わらず境界沿いに歩いている。

「くっそ！効いていないのかよ！。」

「魔理沙さん！目です。目を集中的に撃ってみましょう。」

「わかつた！」

二人は放つ弾幕をパスワードザンボラーの顔に集中し注いだ。そして顔の中でもかなり柔らかい部位である目に攻撃があたると悲鳴を上げ、魔理沙たちの方向を向いた。

「効いたようだな。」

「魔理沙さん。ここは二手に分かれて両目を潰しましょう。」

「おう！」

魔理沙と早苗は二手に分かれ、マッカードもそれを追うように移動する。そして、パウードザンボラーの顔を挟み撃ちにしようとする。が、パウードザンボラーもやられてばかりではない。

「くそ、これを着ても暑いぜ…」

目を攻撃された怒りからか、角を光らせ、魔理沙たちの周囲の温度を急激に上昇させたのだ。そして、空を飛んでいる人間より倒しやすいと判断したからか、魔理沙の居る方向へ突進し始めた。そのスピードはそこまで速くないが、動く巨大な熱源である。一歩一歩歩くたびに火柱と爆風が上がる。しかも、魔理沙は防護服の重さから素早く移動することができない。

「早苗！ 怪獣は魔理沙に向ってる。魔理沙から奴の注意をひきつけるんだ。」  
「やってます！ でも、効果がありませんよ！」

早苗もぐんぐん上がる気温の中、スペルカードなどを駆使して気を引きつけようとするが、防護服の効果ぎりぎりの距離からの攻撃なので、中々弱点らしき部位に当てることができないでいた。

「魔理沙さん！ 急いで逃げてください！」

「わかつてる！ 蒸し焼きはご免だぜ！」

魔理沙は尽力で怪獣の突進から逃れようと走ったが、ここで思わぬ事態がおきた。な



れない防護服を着て全力疾走したため、前のめりに転んでしまったのだ。

「うわっ！」

〔魔理沙！何やってんのよ。急いで起き上が……魔理沙!!〕

「へ…………？」

魔理沙に起こった悲劇はこれだけではなかった。炭化した木が魔理沙に向って倒れてきたのだ。

「あああああああああああああああああああああああああああああああああ！」

倒れてきた木は魔理沙の下半身を下敷きにし、背中の空調設備を狂わせた。魔理沙に殺人的な気温の外気が伝わってくる。防護服のおかげで完全につぶれてはいないが、両足とも折れたのだろう。その激痛も伝わる。まさに生き地獄である。

「熱い、熱い！あついいいいいいいいいいいいいいいいいい！！」

〔魔理沙あー！〕

「そ、そんな…………」

早苗は呆然となった。目の前で知り合いが親と同じように潰されたのだ。そのショックはイヤホンから聞こえる声をしばらくシャットアウトした。

〔早苗！急いで木をどかせ！〕

「…………あ、ああ、あ…………」

〔早苗！〕

「…っは、はい！」

早苗はシヨックから抜け出し、急いで魔理沙の所へ向かい、木をどかそうとする。だが、炭化した木自身も恐ろしく熱く、手では直接どかすことができない。

「…っつ。魔理沙さん、魔理沙さん！」

その呼びかけにこたえる声はない。どうやら気絶しているようだ。

〔どきなさい早苗、マツカーの光線で木を吹き飛ばすわ。〕

〔そ、そんな乱暴な！〕

〔でも、他に方法が…〕

そんなとき、不思議な事が起こった。結界内を移すレーダーに巨大な影が映り、気温が急激に下がっていったのだ。

〔待ってください、結界内に、侵入するものがあります。〕

〔何だと…新しい怪物だというのか！〕

〔はい。ですがこれは…〕

〔木更津さん！結界内の温度、急激に低下します。〕

〔これは…一体？〕

結界内に何か低温の生命体が侵入してきたのだ。その何かは猿のような顔と全身を

包む白い毛が特徴的な怪獣、そう、かつて初代ウルトラマンと戦った伝説怪獣ウーであつた。

ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

「……………っ！来るわよ！」

「は……………はい！」

そのいきなりの出現により、前は伝説怪獣、後ろは灼熱怪獣と絶体絶命のピンチに陥つた。

だが、予想外のことが起こつた。ウーが魔理沙たちを無視してパスワードザンボラーにつかみかかつたのだ。その瞬間、まるで熱した鉄板の上に水をかけたかのような音が聞こえた。そして、パスワードザンボラーの巨大な体を横倒しにしたのだ。

「へ？」

パスワードザンボラーの体系からして、横倒しされると非常に起き上がりにくいと言える。ウーはじたばたともがくパスワードザンボラーを後目に早苗たちのほうへと向かう。そして、魔理沙を押しつぶしていた木をどけてやる。

「怪獣が私たちを助けた？」

「そんなことより、魔理沙だよ！早苗、魔理沙はどう？」

「……そうでした。魔理沙さん、魔理沙さん！」

〔紫〕「見てるんでしよう！魔理沙をこっちに送りなさい！」

早苗たちが魔理沙を救出しようとしているのを確認し、ウーは横倒れになってパワードザンボラーののしかかった。その瞬間にウーの体から冷気が発生し、パワードザンボラーを冷やした。無論、パワードザンボラーの体は超高温。ウーの体はシュウシュウと焼け、溶けて消えそうになっている。だが、ウーはパワードザンボラーから離れない。まるで、ウーの体が溶け、消えてしまうのが先か、パワードザンボラー凍死するのが先かの我慢比べである

熱と冷気の戦いが繰り広げられる中、魔理沙が目を覚ました。

「あ……うううう……さなえ。」

「魔理沙さん、しっかりして！死なないで！」

「バカ……かつてに……ころすなよ……」

激痛をこらえながらも口を開く魔理沙。

「気が付いたんですね！よかったです……」

「さなえ……かいじゅう……は？」

「はい、あつちでもう一体の怪獣と戦ってます。」

「もう、いったい？」

「はい、あののしかかっているほうが魔理沙さんを助けてくれたんですよ」  
早苗達は怪獣たちのほうに目をやる。

「ほう……そうかい。」

怪獣の我慢比べは五分のようで、ウーはすでに半透明になってしまい、パワーダザンボラーの動きは弱まって緩慢になっている。そんなとき、ウーが魔理沙たちのほうを向いた。そして、何か思念的なものを二人は感じた。

討て！俺ごと怪獣に止めをさせ！

「………魔理沙さん。今のは……」

「ああ、ぼっちし……聞こえたぜ！」

そういうと、魔理沙は八卦炉を構えた。どうやら、マスタースパークを撃つつもりらしい。だが、魔理沙は腹這い状態から起き上がるのも難しい状況だ。

「魔理沙さん！無茶ですよ。」

「ああ、お前や……あたし一人じゃ……無茶化かもな……」

「え？」

「手伝ってくれ、早苗。あたしの体を……支えてくれ。一緒に……怪獣を倒そう。」

「魔理沙さん………わかりました。倒しましょう。一緒に。」

魔理沙の八卦炉を構える手を早苗は支えてやる。

そして、八卦炉に二人分の魔力が流れ込む。

「いくぜ、これが私の魔法と早苗の奇跡の力だ！食らいやがれザンボラー!!」

「〔恋符 マスタースパーク〕奇跡を込めて！フルパワーだ!!!」

その瞬間、八卦炉から最大火力のマスタースパークが放たれた。

その威力は普段の弾幕ごっこの比ではなく、大地を削りながらパワーザンボラーへと向かい、命中する直前にウーはパワーザンボラーから離れ、ザンボラーはそれを顔面で受けた。ここからは二人と一体の我慢比べである。方やミサイルやメガスペシウム光線に耐えるほどの皮膚をもつパワーザンボラー、方や山を吹き飛ばす威力の光線にさらに奇跡の力が加わったもの。傍から見れば、ぼろぼろの早苗たちが圧倒的不利だが、実はウーの冷気によって極度の低体温にされたザンボラーは意識もうろうとしている。その点に、かすかな勝機があるといえる。

マスタースパークが放たれてから数分の間、神社にいる者たちは一言も交わせないような緊張感に包まれていた。だが、皆がこのマスタースパークで怪獣が息絶えることを願っていた。そして、7〜8分たっただろうか、戦いに変化が起きた。

「まずいわね。マスタースパークが弱まってきている。」

「ええ、だんだん細くなってるわね。」

そう、魔理沙たちに先に限界が来たのだ。八卦炉を持つ手は焼け、がくがくと震えている。そして、マスタースパークの反動に耐える体も限界のようだ。

「くううううううううううううううう……」

「はああああああああああああああ……」

そして、マスタースパークの光もどんどん細くなってゆき、最終的に十数分ほど放たれたマスタースパークは消え、少女二人もぼったりと倒れてしまった。

「魔理沙！早苗！」

「限界が来てしまったのね……」

「まずいなこれは……おい、結界内の気温はどうなってるんだ」

「は、はい、気温42度。もう一体の怪獣の冷氣によるものかと」

「行けなくはないな。救出の準備だ。」

「了解。」

木更津達男集は防護服に身を固め、結界内に入ろうとする。だが、  
「待っててください、怪獣が、怪獣が起き上がりました！」

「なっ……！！」

それは最悪の知らせだった。怪獣はマスタースパークに耐えきったのか？そう皆が絶望した。

だが、パワードザンボラーは一步、二歩ふらりと歩くと、白目をむいて倒れた。そう、ウーの力で極度の低体温となってしまうた所に山をも砕くレーザーが顔面を直撃したのだ。奇跡のようだが、魔理沙たちは怪獣に勝利したのである。

「やったわ!。」

「急いで救助に向かうぞ。」

「応!。」

男集は担架を持ち、スキマから無縁塚へと突入し、霊夢たちもそれに続く。そして、倒れこんだ早苗達を見つけ出した。

「魔理沙! 早苗! 大丈夫なの?。」

「ああ、どうやら、気絶しているらしい。すぐに永琳先生のところに運ぶぞ!。」

そう言うと、男達は魔理沙と早苗を担架に乗せる。すると、目の前に永遠亭への隙間が開いた。紫はちゃんと観戦していたようだ。それと同時に、無縁塚を包む結界も崩れていく。気温が急激に低下しているので、もう大丈夫であろうと紫は判断したのでらう。

そして、ザンボラーは隙間へと消えていく。白目をむいて倒れたとはいえ、まだ気絶しただけの可能性もあるのだ。恐らく、そのままウルトラゾーンの怪獣墓場あたりへと放りだされるのだろう。



そして、もう一体の怪獣、ウーはその姿をいつの間にか消していた。

それから一週間がたった。外では冬まつ盛りに雪が降り、ウサギたちが遊んでいる。その病室の一つに魔理沙は入院していた。全身大やけどで肺は焼け焦げ両足は粉砕骨折。生きているのが不思議なくらいの大げさも八意永琳の手にかかれれば何とか命を上げることができた。全治3カ月だが、すでにベッドから起き上がることができるようになっている。

「いやーあのときは死んだと思ったね。正直なところ。」

「ま、生きてたからいいじゃない。心配して損したけど。」

魔理沙がいるベッドの横では、霊夢がリングゴをむいていた。

「お、心配してくれたのか。お前に心配してもらえとは感謝感激だな。」

「まあ、死んだら死んだで盛大な葬式をしてあげたわよ。」

そして、むいたリングゴを丁寧に六分割して、自分の口に運ぶ巫女。

「一瞬でも感謝したあたしがバカだったぜ。」

魔理沙も負けじとリングゴを奪い、口に運ぶ。

「で、結局あの怪獣は何だったんだ。」

「さあ？ 紫は何も言わないし、分かんないわ。まあ、過ぎたことはいいから、あなたはゆつくりと傷をいやしなさいな。」

「ああ、分かっているぜ。」

ちなみに、早苗の怪我はそこまでひどくはなく、すでに退院していた。そして、父と母の墓前で勝利を報告していた。

「父さん、お母さん。あたしね、勝ったよ。怪獣に。だから、もう大丈夫だから、ゆっくり眠ってね。」

場所は変わってここは紅魔館。永遠に赤い幼い月、レミアス・カーレットら一派の住む館である。

「で、その怪獣つてのは早苗と魔理沙の活躍で倒れた……というわけか?」

「はい、お嬢様。」

そこでは、咲夜が自分の主に今回の結果を報告していた。

「ふむ、まあ、この結果は当然ね。でも……」

「どうされました?」

「いや、何でもない。下がっていいわよ。」

「はい。」

そして、自分の従者の気配が消えると、軽く息を吐き、自分の見た夢のことを思い出していた。

彼女の能力は運命を操る程度のもので、何かの運命を夢として見ることがあ

る。そして、最近、ある夢を見たのだ。

燃え盛る妖怪の山、何か巨大なものに蹂躪される人里、干上がった湖、焼け落ちる紅魔館。全て、咲夜の言った怪物という存在が侵入していれば全て起こりえたことだ。

そして、また違った夢も見た。自分のそばから、何か大切なものが無くなってしまう夢、その大切なものが何かはわからない。だが、何かが無くなってしまうような夢を見た。これが、現実となったら……

「ふ、まさかね。」

だが、レミリアはその考えを一笑に付した。自分が何かを失うことなどあり得ない。そんな自信あふれる笑いだ。

こうして怪物と幻想郷の住民のファーストコンタクトは終わった。しかし、これで外部からの侵略が終わったわけではない。これから幻想郷がどうなるかは、レミリア・スカーレットの能力ですら見ることはできない……………

## 親として、怪獣として

これは冬の物語。伝説と妖怪と妖精の物語。親の魂は、妖精に何を見る。

ここは外の世界の教会。そこではある結婚式が執り行われていた。

式場に集まった若い人々は口々に新郎新婦を祝福する。

「おめでとう!!お二人さん。」「おめでとー」「おめでとー」「おめでとさん。」「

「ありがとう。必ず幸せになるよ。なあ、小雪。」「

「ええ。もちろんよ。」「

新郎が新婦の肩を抱き、新婦は柔らかに笑う。

彼女は幼少のころ飯田峠という場所で父を亡くし、祖父に身を引きとられた。

渡る世間に鬼はなしとはよく言ったもので、彼女は優しい祖父祖母と友人に支えら

れ、立派な女性として結婚式を迎えるまでになった。

実は、この結婚式を見ているのは新郎新婦の親戚や友人だけではない。結婚式に浮か

れ、

だれ一人気が付いていないが、空に極極薄く映る巨大な存在があつた。

その顔は一見恐ろしく、体中が白く太い毛でおおわれている。そう、かつて飯田峠に

出現した伝説怪獣ウーである。その表情は柔らかく、結婚式を優しく見守っている。  
(小雪。立派になったな。)

この怪獣ウーの正体は、この結婚式の新婦である小雪の父である良平であり、かつて飯田峠で氷超獣アイスロンに殺された彼が娘を守るため変化したものだ。

そして、アイスロンがエースに倒された後、彼は小雪の守護霊ならぬ守護怪獣として見守ってきたのだ。

(あの男は誠実でいい青年だ。きつと前を幸せにするだろう。)

良平は守護霊ならぬ守護怪獣として、新郎の身辺調査をしたが、資産と人格に問題はなく、

この男ならおそらく幸せな家庭を作るであろうと思い、安心して娘を託した。だが、その姿はどんどん薄まりつつある。

ウーは雪山の怪獣。しかも、飯田峠に眠る親達の力を借りてこの世に存在しているにすぎない。だから、飯田峠から離れ、しかも一年中存在して娘を見守っていたため、体を保つためのエネルギーが尽きかけているのだ。

娘を思う一心でこの世にとどまっていたが、それも限界のようだ。

(もう…お父さん、限界みたいだ。でも、お父さんは…いつまでも…お前…を…)

そして、完全に空から消滅した。

その時、小雪の目からなぜか涙が流れた。

「…どうした？小雪。」

「いえ…何でもない。ただ…お父さんの声が聞こえた気がして…」

「良平さんか…そうだな。きつと、この空から見守っているさ。」

「…ええ、きつと。」

こうして、現実世界からウーは姿を消した。

だが、実はウーは消滅したのではない。この後、幻想郷に姿を見せることとなる。

ここは幻想郷の霧の湖。そこを氷の妖精であるチルノが飛んでいた。

その日の湖は特に霧が深く、ほとんど前が見えなかった。

「まったく、霧が深いと羽や服に霜がついちやう。」

文句を言いつつ霧の湖をパトロールしているつもりで飛んでいる。ここは彼女のテリトリーなのだ。

そんな中、彼女の目の前が急に暗くなった。

「あれ、こんな所に紅魔館ってあったっけ？」

どうやら、何か巨大な物の影のようだ。チルノは紅魔館かと思ったが、

見上げると巨大な人型である。

「う…うおー…！」

チルノはひどく驚いた。ここまで巨大な人間がこの幻想郷にいたのだろうか。

「もしかして、今度こそ本物のダイダラボッチかも！」

チルノは目を輝かせ巨体のほうへ向かう。だが、その影はすうつと消えてしまった。

「ま、まてえー！」

チルノとしては、少し前に森の人形遣いが作った巨大な人形とダイダラボッチを見間違えてしまったので、今度こそ捕まえて倒してやりたいのだ。

この少し後、森の中に倒れた一人の男がいた。まるで雪山にいたかのような厚い服装で、

猟銃がそのそばに転がっている。

「う……う……は？」

男は目を覚まし、周りを見回す。が、見渡す限り木、木、木と木ばかりで、なぜか森の中にいる。

しかも、なぜか自分の猟銃が転がっている。

「……は、あの世なのか？俺はどうなったんだ？」

男はとりあえず立ち上がった。そして、自分の体を見渡す。

「服も怪獣になった時そのままだ……どうなっている？」

ふと、耳をすませると遠くから少女の声が聞こえてきた。

「ダイダラボッチめ、まて〜〜!」

その少女：チルノは、良平になど目もくれず飛んでいった。

「何だ今の飛んでいった少女は…ん、飛んで?」

そう、少女は低空飛行だったが、確かに宙を飛んでいたのだ。何か、透き通った羽が生えていたかのようにも見えた。

「馬鹿な、女の子が宙を飛ぶハズはない。見間違いだろう。」

良平の常識の範疇では考えられない姿をした少女。良平は、見間違いということで処理した。

「しかし、じっとしていても始まらんな。」

そういうと、良平はチルノが飛んでいった方とは逆に歩き始めた。しばらく歩くと広大な湖が広がっている場所に着いた。

「おお、これは素晴らしい湖だ。」

とりあえず、水場は確保した。つぎは誰か人のいる場所にと考えたが、そこである問題に気がついた。

「そうだ。俺は……もう人間ではなかったな。」

そう、自分は今は人の姿をしているとはいえ、すでに死んで怪獣となった身。なので



人里からは離れたところに暮らしたほうがいいだろう。そう考えた良平はふたたび考えにふけた。

その結果、山へ行こうという結果にたどり着いた。山になら山小屋があるかもしれないし、食糧にも困らない。というより、食事する必要は死人的に考てないだろうと考えた良平は、山へと向かい歩みを進めた。

森はすっかり紅葉し、秋の雰囲気漂う道を歩く良平。川に沿って山へと向かう同中、妖精や妖怪からの攻撃は奇跡的に受けなかった。そして、何事もなく妖怪の山を登り始めた。

「ふう。ここらで一服するか。」

そして、中腹にある湖で一休みし、ふたたび山を登る。すると、周りに何者かの気配を感じ取った。

「誰だ!」

銃を構え、見えぬ相手を威嚇する。すると、犬耳をはやして剣と盾を構える白狼天狗たちが姿を現した。

「貴様こそ何者だ。ここは我ら妖怪の山。人間ごときが侵入して良い場所ではない。」

「な、何だ君達は!」

良平は白狼天狗に驚いた。もちろん初めて見る武装した白狼天狗である。驚くのも

無理はない。とにかく、荒事はご免である。

「俺は良平というただの……人間だ。君たちこそ、そんな剣や盾で武装しているなんて、非常識じゃないか。」

「何を言うか。侵入者め、さては外来人だな。」

「ガイライジン？」

「悪いが、我らは河童のように甘くはない。が、外来人となると話は別だ。今回だけ、今すぐ山から出て行くのなら見なかったことにしてやろう。」

「待ってくれ、何が何だか分からない。ガイライジンとは、白狼天狗とは何なんだ。」

「答える義理はない。とつとと出ていけ。」

取り付く島もなく、良平は山から追い出されてしまった。仕方なしに川を下り広大な湖にもどる。

「はあ、これからどうするかな。……うん？」

野宿を覚悟した良平の眼に一人の少女が見えた。親がコスプレ趣味なのか、背中に透き通った羽が見える。仕方なしに、こちら辺の地理に詳しいであろう少女に一晩過ごせるあばら家の場所でも聞こうと近づく。

「ねえ、お嬢ちゃん」

「はあ、ダイダラボッチ、けつきよく見つからなかった……なによ。」

「ここらへんにさ、一晩過ごせるようなあばら家でもないかな。」  
「あばら家？あんた死にたいの？」

少女ことチルノの言うとおり、ここは幻想郷。人里離れたあばら家に一晩泊れば、妖怪のおやつとなるのが関の山である。だが、そんなことを良平が知るはずがない。「なんだって、そんなに物騒な場所なのか？こんなにのどかなのに。」

「あんたも猟銃なんか持って十分物騒じゃない。」

チルノは良平の猟銃を指さし言う。

「あーさては私を狙いに来た刺客ね。」

「え？」

「さては三月精に頼まれたのでしよう。あいつらもバカね。こんな弱っちそうな人間を刺客に送ってくるなんて。」

「待って待って。」

「人間だけど手加減なんかしないよ。さあこい、（氷符 アイシクルフォール）。」

チルノは聞く耳を持たずスペルカードを使用し、良平に向かって氷弾を飛ばす。

「わ、わあ。」

良平はそれをすれすれでよけるのがやっとで、何とか木の陰に隠れる。

「ここらー！隠れてないであんたもスペルカード宣言しなさいよ。」

「何だいそのスペルカード宣言って!」

良平が隠れた木もがりがりと削れていく。何とか少女を止めなければ良平はハチの巣になるだろう。と言つても、あつちは興奮しているようで、何とか鎮めないといけない。冷静に考えをまとめようとする良平。

(スペルカード……たぶん、こうやって撃ち合いをすることだろうか。こつちから打ち返せるものと言つたら……)

良平は猟銃を見るが、すぐに首を振る。あんな年端もいかなそうな少女を撃つなんて、元人間として絶対できない。

(そうだ、私には怪獣ウーとしての力がある。それが利用できないか……)

「ふふん、どうだ、降参か!」

そう自信満々に良平の隠れる木へと近づくチルノ。そこに…

「えい!」

「きゃ!」

ウーの力で作りだした雪で作った雪玉を投げつける良平。大人げない気がするが、ハチの巣よりましである。

「びつくりしたあ…つて、雪?」

「ああ、俺はね、雪を自由に作り出すことができるんだ」

この良平の自分の能力に対する認識は大体あっている。ウーと融合した良平は、幻想郷風にいえば吹雪を吹かせる程度の能力を持っているのだ。

「へえ、すごいすごい！でも、あんた、人間じゃなかったんだね。」

「ああ。そうだよ。」

「じゃあ妖怪だったんだね。」

「よ……妖怪？」

良平は、改めて自分について考えてみた。思えば、自分こと伝説怪獣ウーは、破壊の限りを尽くす怪獣というより、見た目は昔話とかに出てくる妖怪の雪男に近くはないだろうか。

「妖怪……うん、そうか俺は妖怪だったのか。」

「あんた、そんなことも気づかなかったの。バカねー。」

バカ呼ばわりは少し恥ずかしいが、思えば、自分はこの場所のことを何も知らないのだ。ちようどいいから目の前の少女にいろいろ質問することにした。

「ああ、俺は妖怪になって日が浅いんだ。いろいろ教えてくれないか。その……妖怪とか、スペルカードとか、この場所のこととか。」

「ふん！仕方ないわね、この幻想郷最強であるチルノ様があんたにいろんなことを教えてあげるわよ。ところであんた何て名前？」

「俺かい？俺は……」

良平と言おうとしたが、それはかつての人間としての名前である。だが、怪獣……いや、妖怪である今の自分は……

「ウー。雪男のウーだよ。」

チルノの話は無駄が多く、非常に分かりにくいものだったが、そこから様々なことを知ることができた。ここが幻想郷と呼ばれる場所であること、ここには、人間や様々な妖怪、妖精が住まうこと。そしてそれらの強さの差を埋めるための決闘ルールである弾幕ごっことスペルカードルールについて。

「……………つてことよ。分かった？」

「ああ、よくわかったよ。チルノちゃん。さて……」

チルノの説明では、弾幕ごっこはここ幻想郷では挨拶のようなものらしい。だが、良平は全くそんなものはいえない。

「ふうむ……チルノちゃん。」

「なにさ。」

「俺にその弾幕ごっこを教えてください。」

「ほえ？」

「弾幕ごっこはここでは挨拶のようなものだろう？でも、俺は外から来たばかりでやり方がわからないんだ。」

その提案にチルノは驚いた。まさか、自分に教えを請うとは……

「……………あんた、分かっているじゃない。この幻想郷最強のあたいに教えを請うなんて」「それじゃあ。」

「いいよ。このチルノ様が弾幕ごっこについて教えてあげる。だから、あたいのことは師匠と呼びなさい。」

「はい、師匠。」

こうして、見た目おっさんが見た目少女を師匠と呼ぶ奇妙な関係が始まった。

良平がチルノと話し込んでいるうちに、周りはすっかり夜になり、月の光が幻想郷を照らしていた。

「じゃあ、特訓は明日からでいいかな、師匠。」

「うん、いいよ。ところで、あんたが住むところだけどさ……」

「ああ、それなら心配しないで。野宿でもするからさ。」

「こんなところで寝てたらあたい以外の妖精にいたずらされるわよ。いいから来なさい。」

良平はチルノに連れられ、しばらく歩く。すると、秋の風景に合わないかまくらが見

えてきた。

「かまくら…かい？」

「うん、あたいの家だよ。さあ、入った入った。」

そう背を押されかまくらに入る良平。大人の良平にとって、妖精サイズのかまくらはかなり狭く感じた。

「あんたでつかいから狭いけど、外よりは安全だよ。」

「ああ、そうかもしれないね。でも、泊っていいのかい？」

「うん、別にいいよ。」

そう言うと、チルノは小さな布団に入る。

「じゃあ、あんたは床でいいわね」

「ああ、いいよ。」

「そう、じゃあ、明日から弾幕ごっこについてみっちり教えてあげるわ。じゃ、お休みー」

「はい、お休み。」

しばらくして、チルノが夢の世界に入って行ったのを確認すると、良平はかまくらの外に出た。

(さて、今日はいろんなことがあったな……)

良平は、今の自分の置かれている状況を整理しようと思った。まずは、自分の能力に



ついてだ。さつきチルノにあてるために雪を作りだったが、自分はどれだけの力を持っているのだろうか。

(まずは……ウーになれるか試してみよう。)

だが、どうやればウーになれるのだろうか。とりあえず、チルノの家から離れ、全身に力を入れてみた。

「ハアアアアアアアアアアアアアアアアア……」

そして、体を大きくする感じで体内の力を動かす。すると、良平の周りに冷気が集まりだした。そして……

「おおおおおおおおおおお!!」

体はどんだんの大きくなり、顔にしわがより、体中から白い毛が生えてきた。

「うおおおおおおお!!」

そして数秒のうちに身長40メートルの巨体の伝説怪獣ウーとなった。

(おお……これはすごい。)

だが、その姿を保てたのはほんの一瞬だけだった。

(う……ぐぐ……あああああああ!)

すぐにウーの体は崩れだした。そして、疲れ切った良平と大量の雪が残った。

「うう……これはつらいな……」

とりあえず、今の良平ではウーの体を保つ何かが足りないようだ。

(これは……しばらくはウーに変身しないほうがいいだろうな。)

そして、次にこの体でどれだけの力があるかを調べたかったが、ウーへの変身が思った以上に体に負担となったため、明日にしようと思い、チルノの眠るかまくらへと戻って行った。

## 親として、怪獣として2

次の日、チルノと良平は霧の湖に来ていた。

「それじゃあ、このあたいが、弾幕<sup>ぶ</sup>ごつことはなんたるかを教えてあげるわ。」

そう言うのと、チルノはカードのようなものを取り出した

「まずはあんたにどれだけこおりパワーがあるかがあるか試させてもらおうわ。」

チルノはそう言うのと、湖の近くに生えていた太い木のところに連れてきた。

「さあ、この木を凍らせてみなさいな。」

「木を凍らすのかい？」

「そうよ。見本を見せるね。」

すると、チルノは木へ向かって両手を出し、冷気を当てる。すると、バキバキと木が

こおって行った。

「さあ、あんたもやってみなさい！」

「わかったよ、師匠。」

(といったものの、どうやったら凍らせるんだ?)

良平はとりあえず両腕を前に出し、フンと力を入れてみる。すると、両腕に冷気が集

まっつて行くのを感じた。そして前に放出するかのように力を入れてみた。

「ハアー！」

すると、両手から冷たい風が木へと吹き、木は見る見るうちに凍っていった。それにチルノも良平も驚いた。

「おお、あんた初めてにしてはやるじゃない。」

「ああ、俺にこんな力があるなんてな」

正直、良平もここまであつさり凍らせられるとは思わなかったようで、啞然と自分の両手を見つめている。

「こおりパワーは十分ね、じゃあ、次はこれを弾幕にしてみるわよ。」

すると、チルノは空気中の水分を凍らせ、凍った木へ飛ばし、木を僅かに砕いた。

「さあ、これはできるかしら?」

「ああ、やってみるよ」

良平はさっきの要領で冷気を集中し、空気中の水分を凍らせた。だが、できたのは大きな氷の塊ではなく、昨日のような雪玉だった。

「あれ?」

それから何度も良平は氷を大きくしようとするが、どうしても氷が雪の結晶の域を出ない。

「おかしいなあ……」

「アハハ、いいんじゃない？玉になるには変わりないんだし。」

「よし、じゃあ撃つてみるね。」

そして、できた雪玉を木へとぶつける。すると、その雪玉は大砲のような音を立てて飛んでいき、木を砕いた。

「……………す、すごいじゃない。さすがは私の弟子ね。」

「……………あ、ああ。すごいな。うん。」

チルノも良平もそれに唾然とした。

「と、とにかく、玉も出せるみたいね。じゃあ、次は本格的に弾幕ごっこするわよ。っと、ルールを言うのを忘れてたわ。」

「ルール？」

「うん、弾幕ごっこにはちゃんとルールがあるの。」

チルノ曰く、そのルールとは弾幕ごっこではお札を使ったスペルカード宣言が必要であり、不意打ちはいけないということ、弾幕は美しさが大切であること。無意味な攻撃はいけないということ、弾幕を攻略された側は余力があっても負けを認め、スペルカード以外での報復はいけないということ等など。ルールを説明された。

「へえ、じゃあ、俺にもスペルカードが必要だな。」

「そうね、お札はあたいが余分に持つてるから、それを使っていよいよ。」

「ありがとう、師匠。」

そして、準備は整った。いよいよ模擬弾幕ごっこ開始である。

「じゃあ行くよ。」

そう言うと、チルノは周囲の水分から氷の弾を作り、良平に向けて発射した。といっても、普段妖精同士でやる弾幕ごっこの時よりも弾幕の量はごく少なく、ほんの十数発だが。

「わ、わあー！」

そうはいつでも実際の弾幕ごっこなど初めての良平。あつという間に被弾する。

「もう、そんなんじゃそこらへんの雑魚妖精にも負けちゃうわよーほらほら、いくよー！」

「わ、っこのおー！」

今度はいきなりの被弾とはならなかった。といっても被弾するまでの時間が数秒延びただけだった。

「ぐわあー！」

「あらら……ちよつと弾幕ごっこは早かったかしら？」

「い……いや、大丈夫。さあ、次いってくれ。」

「ふふ、それでこそあたいの弟子ね。じゃあ、避けきってよー！」

三回目ともなると少しは弾幕の軌道が見えた。どうやら、チルノも気をきかせたよう  
で弾と弾の間の隙間がよく見え、そこにうまく入ることができ、見事避けきることがで  
きた。

「よし、避けきつたよ、師匠。」

「ふん、まあまあね。じゃあ、次はあんたの弾幕をあたいに当ててみなさい。」

「え、いいのかい？」

「あたりまえじゃない。つていうか、当てなきゃ負けちゃうわよ。まあ、当てられるわけ  
ないけどね。」

「さあ、こいー！」

チルノが言うので、仕方なく雪玉を作り、チルノに向かって投げける。だが、それを  
チルノは空へ飛んであっさり回避した。

「へ？」

「そんなんじや当たらないわよ。それに、一発じゃ弾幕なんて言えないわ。もつとたく  
さん撃たないと！さあ、次つきー！」

その言葉に挑発され、良平は目の前に冷気を漂わせ、数発分の雪玉を作り、チルノに  
向かって撃ち出した。だが、いつもケンカなどで弾幕ごっこをしているチルノにとつて  
はそんなものなんでもなく、スルスルと避ける。

「ううん、難しいなあ。」

「キャハハ。そんなのじゃ当たらないわよくだ。」

（ふうむ……一発も当てられないのは悔しい。もつとトリツキーじゃないと当てられなさそうだな………そうだ!）

空中で笑うチルノめがけて良平はもう一度、今度はやや大きめの雪玉を発射した。だが、それは簡単に避けられてしまう。

「だからそんなんじゃないって……て、え?」

すると、良平は猟銃をむけクレー射撃の要領で雪玉を砕き始めた。すると、雪玉は花火のようにはじけ、チルノに襲いかかる。

「きゃー……このく、考えたわね!」

結局、チルノは避けた弾幕に氣を向けていなかったのが仇になり、雪玉の破片に当たってしまった。

「ちえ、当たっちゃった。あんた、呑み込みが早いわね。師匠として鼻が高いわ。」

そして、しばらくの間互いの弾幕を飛ばし合い遊んでいると、すっかり日が暮れてしまった。

「じゃあ、今日はこれまでね。帰りましょ。」

「ああ、そうだね。」



こうしてチルノとの特訓日々は過ぎて行った。

良平は毎日のようにチルノと弾幕ごっここの練習に励んだ。そして、ウーの力によるものか、はたまた良平自身に素質があつたのか、良平はめきめきと腕をあげ、秋が終わるころにはチルノと同じくらい弾幕を撃てるようになっていた。

「いくぞ、師匠。(雪符 スノーショット)」

「いくぞー！ (電符 ヘイルストーム)！」

ある日の光景、二人の弾幕が飛び交い、湖やその周りの木々、そしてたまに飛んで来る不運な妖精が次々と凍っていく。

良平の使う弾幕は、雪玉を吹雪に乗せて相手に当てたり、飛ばした雪玉を猟銃で打ち抜いて砕き弾幕にするもの。まだまだ弾幕というには荒いが、様になってきている。といつても、まだチルノに当てられるのは十回に一回という程度だ。

「とどめだ！ (雪符 ダイアモンドブリザード)！」

「ぐわあ！……つとまた負けたなあ。」

「ふふん。あたいに勝とうなんて百万年早いわよ。でも、こんな短い間でここまでできるなんて大した奴ね。よし、もう一発でもあたいに当てられたら免許皆伝してあげる。」

「ようし、次は当ててやるからな、師匠。」

そういうと、再び弾幕を飛ばし合う二人。

そんな二人に近づくと影があった。

「あらあら、あなたはいつもは元気いっぱいね。チルノ。」

「え、その声は……ウー、ストップ！」

「え、ああ。」

チルノは弾幕ごっこをやめると、その声の主に向かって飛んで行った。

「レテイ、レテイじゃない！お帰りなさい！」

そういうと、冬の妖怪ごとレテイ・ホワイトロックに抱きついた。

「はいはいいただきます。チルノ」

そう言うと、ポンポンとチルノの頭をなで、良平のほうを向いた。

「あら、あなたは誰？」

「ああ、あいつはウーっていう雪男で、あたいの弟子だよ。」

「ウーです。よろしく。」

「へえ、雪男ねえ……」

そう言うと、レテイは良平に顔を近づけた。

「……ふうん、中々の妖力ね。」

「あの……あなたは？」

「え、ああ、私の名はレティ。雪女よ。よろしくね、雪男さん。」

「ああ、よろしく。」

そして、二人は握手をした。と同時に、お互いの冷気が手を伝って伝わり、混じり合う。

「……っ！」

その不思議な感覚に思わず良平は手を離してしまう。

「ふふふ、冷気もいい感じのを持っているわね。でも、制御がへたっぴだわ。」

「あ、ああ。」

「仕方がないよ。ウーってば妖怪になったばかりだもの。」

「へえ、そうなの。」

「そうだ！レティも一緒に弾幕ごっこの練習しようよ。」

いいことを思いついたかのようにきらめく笑顔でそう提案するチルノ。それに対し、レティは少し困ったような表情をした。

「そうねえ………いいわよ。やってあげる。」

「やったあ！」

だが、チルノの笑顔にレティは折れて、レティも一緒に弾幕ごっこを行うこととなった。

「じゃあ、ご指導よろしくお願いしますね、レティさん。」

「ええ、分かったわ。手加減しないわよ、雪男さん。」

それから泉のほとりでは、弾幕ごっこをする三人の姿がよく目撃されるようになった。

「行くぞ、(吹雪 スノーサイクロン)」

「じゃあ私は、(寒符 リンガリングゴールド)」

「がんばれーレティ！負けるなウー！」

そして日が落ち、弾幕ごっこが終わると、三人は一緒の帰路につき、共に夕食をとる。そんな毎日が続いた。遠くから見れば、まるで親子のような三人。こういった日が積み重なり、三人は絆を深めあつていく。そんな暮らしの中で、良平とレティはお互いを呼び捨てで呼び合う仲になっていった。そして、季節は冬に近づいていく。

季節は冬、普通なら雪が降り、子供たちや犬は雪野原を駆け回り、猫はこたつで丸くなる季節である。だが、今年の冬はいつもとは全然違うものになっていた。気温はどんどん上がり、まるで真夏のような異常気象が幻想郷を襲っていた。

「何だ、この暑さは……」

いつも分厚い服を着ている良平は上着を脱ぎ、比較的軽装にしている。何とか自分の周りでは自分の力で温度をやや下げることができているが、それでもまるで真夏のような

気温は和らぐことなく、良平達三人を襲っている。

「おかしい、おかしいわ。」

「何がおかしいんだい、レテイ。」

暑さで顔が赤くなっているレテイは、どうやらこの異変に疑問を持っているようだ。

「私は冬をつかさどる妖怪……ってことは知ってるでしょう。」

「ああ。」

「私がここ幻想郷に来ているということは、即ちもう冬になっていないとおかしいの。なのにこんなに暑いなんて……」

「確かにおかしいな。そう言えば、チルノはどうしたんだ。」

「そう言えばそうね、もう来てもいいぐらいなんだけど。」

すると、緑髪の妖精、よく周りから大妖精と呼ばれる妖精が何やら焦ってやってきた。

「ウーさん、レテイさん。大変です。チルノちゃんが……チルノちゃんが倒れちゃいました!」

「何だと!」

それを聞いて慌てて森へと向かう良平とレテイ。しばらく走ると、そこには倒れひどく汗をかき息も浅いチルノがいた。

「チルノちゃん!」

「ひどい熱……きつと熱中症だわ。」

熱中症、それは人間でも下手をすれば命にかかわる病気だ。しかもチルノは水の妖精。危険度は人間の比ではないだろう。

「とにかく冷やして水分を摂らせないと。」

「ああ。」

良平は大妖精に水を持ってくるよう指示し、レティと共にチルノの手を握り冷気を送り込んだ。しばらくそうしていると、チルノは目を開けた。

「チルノちゃん、俺が分かるか？」

「うん……ウーに……レティね。」

「すぐに大妖精ちゃんが水を持ってくるからな。」

「うん……」

チルノは弱弱しくも少しだけ嬉しそうに言った。

「なんだか、レティとウーってお父さんとお母さんみたいだね。」

「おとう……さん？」

「うん。私達妖精には親はいないけれど、でも、親がいたらこんな風なのかなって思ったの。」

「チルノ……」

レティは優しくチルノの頭をなでる。

「今日はあなたの親になってあげる。だから安心して。」

「うん、レティ。」

「親……か。」

「あら、どうしたの。ウー」

「いや、何でも無い。とにかく、チルノを冷やしてやらないと。」

こうして仮の父と母は仮の娘に冷気を送り続け、三日経った。その間に巫女や魔法使いにコスプレした少女が訪ねてきたりした。だが、チルノはまだ苦しそうである。

「ウー……暑い、暑いよ。」

「チルノちゃん……ごめんな。」

レティと良平は手を抜いていない。だが、それ以上に気温が高すぎるのだ。良平は考える。どうすればこの暖冬を終わらせられるのか。答えは一つしかない。自分が、ウーになる事。ウーの力をフルに使えば解決できるかもしれない。だが、ウーになれるのは今のままではせいぜい数秒。どうすれば……そう考えていると、チルノの言葉を思い出す。

『私達妖精には親はいないけれど、でも、親がいたらこんな風なのかなって思ったの。』

そうだ、親だ。親の力を借りれば長い時間変身できるかもしれない。

「レテイ。」

「何?」

「チルノの事、頼む。」

良平は決心した目をしていた。そして、チルノの家を飛び出した。

「ま、待って。」

レテイが止めるが、良平は振り向かない。そして、森の開けた場所に出ると。両腕を高く上げ、叫ぶ。

「幻想郷の親の魂よ、頼む！俺を父と呼んでくれた少女が命の危機に瀕しているんだ！おれは父親としてそれを見捨てられない！だから頼む！俺に、力をくれ！」

全身に力を入れ、ウーに変身しようとする。するとどうだろう。良平の体の周りに光が集まってくるのではないか。そして、良平の体は伝説怪獣ウーとなった。

「あなた……ウーなの?」

ウーは頷く。そして、レテイとチルノに冷気を分ける。すると、レテイとチルノの顔色がよくなり、力がみなぎってくる。ウーはレテイに話しかける。

『レテイ。俺は行くよ。』

『行くってどこへ!』

『この熱さの元凶を倒してくる。』



ウーとなった良平は本能で気がついていた。この世界に、自分以外の異物が紛れ込んでいると、そして、それがこの熱さの原因であると。

『さようなら、レティ。チルノを大切にやってくれ。』

ウーは、最も暑さの強い方向へと走って行く。レティはそれを追いたかったが、ウーの最後の言葉を守るため、チルノの家へと向かった。

ウーは走った。そして、その周辺に貼られている結界の内部に足を踏み入れる。すさまじい反発があつたが、今のウーは幻想郷中の親の魂と一体化している。無理やり入りこんだ。そして、暑さの元凶と対峙する。

ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

ウーは咆哮し、暑さの元凶、パワードザンボラーへと向かい、体当たりをかます。すさまじい熱さに気が遠くなったが、こんなもの、チルノ達が味わった苦しさに比べたら何ともない。そしてパワードザンボラーをつかむと、全力で横倒しにした。

このまま殴ろうかと思つたその時、自分を構成する親の魂の内の一体が話しかけてくる。

『私の娘を助けて！』

ウーは周りを見る。すると焼けた木に足をつぶされた人間がいた。ウーは急いでその木をどけてやる。そして、再びパワードザンボラーに向かい、のしかかる。そして全

ての力を使い冷気を浴びせる。

ウーの体は。パワードザンボラーの熱でジウジウと音を立て溶けていく。だが、それでもウーは離さない。高熱と冷気の我慢比べである。この戦い、五分に見えるが実際はウーのほうが不利であった。ウーは親の魂の力で何とか体を保っているようなものだ。その力がどんどん弱まってくる。このままでは何もできずに消えてしまう。それだけはだめだ。ウーは、目の前の少女達に思いを託す。

『討てー俺と怪獣に止めをさせー！』

その叫びは少女達に届く。少女の持つ何かから、極太のレーザーが放たれた。それが直撃する寸前でパワードザンボラーから離れる。そして、ザンボラーにそのレーザーが直撃し数分。レーザーが消え、ザンボラーは数歩歩くと、倒れた。少女達の勝利である。ウーの体はもう霧のように薄くなっていた。もう自分の体が限界なのを悟る。ならばと残りの力をすべて使い、幻想郷に雪を降らす。そして、良平としての意識が完全に消える寸前、自分の名前を叫ぶ少女の声が聞こえた気がした。

『チルノちゃん。さようなら。』

無縁塚に無数にある名もなき墓の中、ほとんど誰にも知られずその内の一つにこう記されていた。

幻想郷を救った妖怪、ウー。ここに眠る。

その墓には、氷でできた花が数本供えられていた。

ここに眠る英雄を知るのは、冬の大妖怪と氷の妖精だけである。

## 賽の河原紛争

これは迷い人の物語。幻想郷という異空間に飛ばされた彼らはその目で何を見、何を為すのか。

時はパワードガンボラーが幻想郷に出現する前の事だった。幻想郷と彼岸の間にある三途の川の河岸。そこに隕石でも落ちてきたかの如き音と地響きと共に巨大な何か落ちてきた。それは赤と銀色をした、塩と十字を組み合わせた形をしていた。

その内部、様々な機器が並ぶ部屋で一人の男が目を覚ました

「う、うううう……なんだ、俺は、どうなったんだ。」

青と赤の奇妙な服を着た男……佐野は目を覚ました。しばらく頭の痛みに苦しんでいると、一人の男が入ってきた。

「隊長！ご無事でしたか！」

「む、東原隊員……ああ。無事だ。」

佐野は痛みを振りきり、部屋で倒れている者たちを起こす。全員が何が起こったかわかっていない状態である。いや、一つだけ分かっている事があった。それは、自分達は死んだはずだと言う事である。

自分達はZATステーションN01ごとベムスターに捕食されたはずだ。

だが、自分達は生きている。ステーション内部を調査してみると、半分はつぶれ、かなり破損していたが、多少の武装は無事だった。

「どうなっているんだ……」

佐野達かをひねっていると、隊員のうち一人が慌てて走ってきた。

「た、隊長！」

「どうした。」

「外を、外を見てください。」

そう言われ外を見ると、我が目を疑った。何と、大地があり、川が流れているではないか。

「どういう事だ。我々は宇宙で死んだのではないのか。」

「とにかく、無線で本部に通信してみましよう。」

「ああ、そうだな。」

通信してみるが、返信が無い。これもおかしな話だ。ZATの技術はTACの時代よりも格段に上がっているはず。なのになぜ……隊員達の疑問は尽きない。

「隊長。どうやら、外には有害な物質は無く、酸素濃度も地球とほぼ一致します。」

「うむ、このまま首をかしげていても始まらない。この際、外に出てみよう。」

佐野は4人の部下を引き連れ、外に出てみる。佐野にとっては何年ぶりかの自然の空気が、自然の重力である。中々に気分がいい……はずだったが、外の光景に佐野は言葉を失った。

子供たちが、石を積んでいる。

何十という子供が石を積んでいるのだ。その光景に他四人の隊員も言葉が出ない。

「何なのだ、こゝは……」

「隊長。」

「なんだ。」

「聞いた事があります。三途の川、賽の河原では親より先に死んだ子供が石を積んでいると。」

「三途の川、賽の河原だと。」

何を馬鹿なと思う佐野であったが、目の前の光景は確かにこの世のものではない。とにかく先に行ってみようとする。その時であった、もう少しで石が積み上がる子供の所に、頭に角の生えた人間が現れ、それを崩したのだ。

「何をするんだ！」

隊員の一人が叫ぶと、頭に角の生えた人間……まるで鬼のような存在が睨みつけてきた。

「なんだ、霊はちゃんと渡し場所並ばなければ……」

途中で言葉を切り、臭いをかいでくる鬼。

「何だ、生きてる人間じゃないか。此処は生きている人間が来る場所じゃない。とつとと失せろ。」

「そんなのはどうでもいいだろう！なぜその子が積んだ石を崩す！」

「仕方がないだろう。それが仕事だ。」

「何を……」

「待て、笹野。賽の河原ではこれがルールなんだ。」

「何？」

「賽の河原で子供達が石を積むのは親の供養のため、だがそれは鬼に邪魔をされる。彼らを救えるのは地藏菩薩だけだ。」

「そんな……そんな事って……」

「笹野、落ち着くんだ。」

「隊長。」

笹野は佐野を見る。佐野は表面上平静を保っていた。だが、彼の手が震えていた。握りしめられ、震えていたのだ。

「私の部下が失礼した。」

「解ればいい。此処は生きている者が来ていい場所じゃない。とつとと消えな。」

「解った。行くぞ。」

「了解。」

「つく！」

笹野一人は納得していなかったが、彼らはZATステーションに戻る。

ステーション内部では隊員達が復旧に全力を尽くしていた。佐野は彼らに作業をやめさせ、現在の状況を説明した。此処が三途の川、賽の河原であるという事を。

当然隊員達は混乱し、信じられないという。だが、これは事実である。

「みんなが混乱するのも無理はない。だが、ここが三途の川であることは事実なのだ。解ってほしい。」

佐野の言葉で、混乱は少し収まる。そして佐野は口を開く。

「さて、我々はベムスターに捕食され、なぜか死後の世界に来てしまった。だが、我らは生きている。我らの行うべき行動は一つ、元の世界に帰る事だ。この世界に來れたのだ、帰れないはずがない。我らの当面の目的はここから出る方法を探す事。……だが、みんな自分では気がついていないと思うが、かなり疲労しているはずだ。あんな事があつたんだ。無理はない。だから今日はみんな一日休憩をとれ。ただし、外には出な。これは隊長命令だ。」



了解という言葉と共に、隊員が解散する。それを確認して佐野がステーションを出ようとする、呼び止められる。

「隊長。」

「む、東原隊員。どうした。」

「隊長だけ作業するのはだめですよ。隊長も休憩してください。」

「ふ、ばれたか。」

佐野は皆の代わりに調査をしようとしていたのだ。だが、東原に止められたので、素直に従う事にした。

だが佐野は忘れられなかった。賽の河原で石の塔を崩された子供の絶望した顔を。子供がいる身としては、子供にあんな真似をさせる神を初めて呪った。

だが、自分達にはどうしようもない。そう自分に言い聞かせ、奇跡的に無事だった自分の部屋へと向かう。

それから数時間たっただろうか。佐野が自分の部屋で家族の写真を眺めていると、地響きが聞こえる。

何事かと外に出ると、倒れた笹野隊員と、怒りの表情で棍棒を振り上げている鬼の姿であった。

「待て！」

佐野は慌てて二人の間に入る。笹野は頭を殴打され気絶していた。

「私の部下に何をする！」

「貴様がこいつの上司か。ならば良く言い聞かせておけ、ここでは鬼に逆らわない方が身のためだとな。」

そう言うと、鬼は棍棒を担いで歩いて行く。佐野は笹野を抱えると、ステーションに戻り、治療させる。数時間して笹野は目を覚ます。

「笹野隊員。」

「隊長。」

笹野は悔しそうに顔を顰めていた。

「外で何をしていたんだ。」

「……石を、積んでいました。」

「石を？」

「はい。何とかあの子たちに成仏してほしくって……」

「そうか。」

そう言うと、佐野は笹野の頬を殴りつける。

「バカ野郎!! 貴様は私の命令を無視し、三途の川のルールを無視したのだ! 命があるだけありがたいと思わんか!」

「しかし、隊長！」

「黙れ！お前には3日間の謹慎を命じる。営倉は破壊されているから、自分の部屋でじっとしている！」

「……はい。了解しました。」

笹野は自分の部屋に戻る。そして、壁を殴りつけた。

「くそ！」

壁を殴りつける手を休めない。彼が許せないのは何か。子供の霊を救えない自分にか、こんなルールを作った神にか。彼らを助けようとする隊長にか。それは彼にしか分らない。

しばらくして、扉が開く。

「おい、笹野。」

「……東原か。」

「右手が血まみれじゃねえか。まあこんな事だろうとは思ったが。ほら、消毒と包帯だ。」

「……ありがとよ。」

笹野は包帯を自分の右手にまく。その間、東原は話す。

「笹野、まさかお前、あれが隊長の本心だと思うのか。」

「……そうじゃないと、信じたいよ。」

「全く、バカ一直線だな。」

「何だと！」

「そう興奮するな。まだ頭、完治してないだろ。」

「……ツチ！」

笹野は腰を下ろす。東原は話し続ける。

「隊長はな、苦しんでいるんだよ。」

「苦しんでる？」

「そうだ。隊長だつてな、あの子たちを救いたいんだ。」

「ならあの子たちを救ってからでも。」

「馬鹿、そんな事してみろ、俺達はどうなる。」

「どうなるって……」

「確実に地獄に落ちる。それも神のルールに逆らつたんだ。無間地獄に堕ちるだろうな。」

「そんな……」

「隊長は俺達がそんなことにならないよう、ああやって厳しくしているんだ。」

「……」

「お前は地獄に落ちてでも、この子供たちを救う気があるのか？」

「それは……」

「ま、よく考えてみるんだな。」

そう言つて東原は部屋から出ていく。笹野は自分の考えの甘さに吐き気がした。だが、どうしても、あの子供たちが不憫でたまらなかつた。自分は、どうしたらいい。

それを考えていた時、ある思いが頭をよぎつた。こんな時、自分の尊敬するウルトラマンならどうする？ウルトラセブンならどうする？

彼らなら、命を懸けて守るんじゃないか？救うんじゃないか？

それに、俺は何のためにZATに入隊したんだ。

ならば、俺がすべき事は……

4日後、佐野のもとに笹野は来た。ある書類を持って。

「何の用だ。」

「隊長。これを見てください」

「……………これは……」

その書類にはZATステーションの隊員全員の署名と、血印が押されていた。内容は、賽の河原にいる全ての子供を成仏させる作戦への参加決意表明だった。

笹野は、一日中駆ずり周り、隊員達全てと話をし、署名させたのだ。もちろん渋る

者もいた。嫌がる者もいた。だが、笹野は必死に頼み込んだ。その熱意は、ZAT隊員としての使命に、誇りに火をつけた。

佐野が気がつくのと、ここにZATステーションの隊員全員が集まってきていた。

「お前達……解っているのか！これはとても危険な事なんだぞ。この作戦を行えば、お前たち全員……」

「解っています。ですが、我らはZATです！我らの任務は人を守る事です。苦しむ人を見つけたら、それを救うのが我らの仕事です。例え神が敵でも、救う相手が死者でも変わりません。」

「お前達……」

「我らはベムスターによって一度、何も出来ずに死にました。ならば、たとえ地獄へ落ちようと、誇りを持って戦い、死のうと思いません。」

「お前達……！！」

佐野は思わず涙が流れそうになる。自分の部下が、そこまでの誇りと覚悟を持ってZATの隊員となったのかと。

「お前達は……バカだ!!」

佐野は叫ぶ。泣きながら叫ぶ。

「いいだろう。お前達の提案した作戦を実行することを許可する！みんな、作戦会議

だ。」

ZATステーションの戦闘隊員数は30人。彼らは鬼と戦うためにフル装備で臨み、非戦闘員は石を積む手伝いをする事になった。

まずは、賽の河原で子供がいる場所の周囲にステーションの残骸でバリケードを組み、鬼が侵入できないようにする。それが突破されたら、戦闘部隊が鬼と戦う。こうして時間を稼いでいる内に石を積み上げさせる。

単純な作戦。だが、鬼の強さは未知数。戦えば死ぬかもしれない。

だが、命を捨てる覚悟をした彼らはそんな物は恐れない。ただ、守る。そして、成仏させる。それだけだ。

賽の河原、そこではZATステーションの隊員が必死にバリケードを張っていた。だが、子供達はそんな物は気にせず石を積み続ける。彼らはただ石を積むだけの存在。周りがどうなろうと、ただ石を積み続ける。まさに地獄だ。

いよいよ作戦が開始されようとする。佐野は、全隊員の前に出て話す。

「諸君。いよいよ作戦を決行する。念のために言うが、逃げたい奴は逃げていい。地獄行きがかかっているんだ。誰も攻めない。」

数秒経つが、誰も動かない。

「わかった。これから行う作戦は神の作ったルールに反する行為だ。もちろん、成功し

ようと失敗しよう和我らは死に、地獄へ行くだろう。だが、我らがZATに入隊した時心にあつた誇り、信念をここで出しきるんだ。そして、誇りを持って地獄へ行こうじゃないか！」

——オオオオオオオオオオオオ！

「次に会う時は地獄でだ。各員、全力を持って防衛せよ！」

——了解！

バリケードから少し離れた場所、そこでZATブラスターとZATガンを抱え待ち構える笹野に東原が話しかける。

「これが、お前の決意なんだな。」

「ああ。思えば俺達はウルトラマン達に守られてばかりだった。だから、今度は俺達を守る者たちになる。」

「くつくつく……お前の信念には負けたよ。地獄行ったら、お前の分の罰を少しは引き受けてやるよ。」

「ふ、ありがとうな。」

賽の河原はしんとする。ただ、石を積み上げる音が鳴るだけである。そして、一人の積み石が完成しそうになったその時、バリケードが吹き飛ぶ。戦闘部隊は武器を構え、鬼と対峙する。



「何だテメエら。」

「我々はZATステーションN01に所属する者だ。これ以上、この子たちの邪魔はさせない。」

「……ハ、ハハハッハ、アーハハハハハハハハ！まさか人間て言うのは馬鹿なのか？お前ら、そいつらが成仏すれば、お前達は地獄へ落ちるんだぜ。」

「そんな覚悟はとづくにできている。さあ、ハチの巣になりたくなければここから消えろ！」

「……何だとお!!」

鬼が棍棒を振りかざす。それに対抗し、隊員達は手に持つZATガンやZATプラスター、大型機関砲を鬼に放つ。

「ぐああああああ！」

鬼は、想像以上のダメージに驚いていた。その攻撃の一発一発が体を吹き飛ばしそうなほどの威力なのだ。対怪獣・超獣・大怪獣用の武装である。効かないはずがない。

「人間どもが……舐めるなあ！」

鬼は棍棒を回転させ弾をはじきつつ、隊員の一人の頭を棍棒でつぶす。鬼の力ならば、棍棒で人を粉々にするなど造作もない。だが、ZATも負けていない。

「角だ。角を狙え！」

ZATガンが火を吹き、鬼の顔面を直撃する。これが一発なら耐えたであろう。だが、まるで女どもにはやっっている弾幕のように撃たれてはたまらない。

「っちー！」

鬼は形勢が不利である事を察知し、逃げていく。一回戦はZATの勝利である。

「真……」

「気を抜くな明石。まだまだ鬼は来るぞ。」

鬼の襲撃からしばらく間が空いた。非戦闘員達はその石積みを手伝っている。そして、最初の一人が完成した。

「やった、やった！」

「よくやったな坊主！」

「えへへ、ありがとう。知らないおじさん。」

「俺達はZATさ。」

「ザット……うくん知らない。」

「まあいいさ。来世は幸せに暮らせよ。」

「うん！」

そして男の子は消えていく。

その時だった、バリケードが次々と破壊され、鬼達がやってきた。

「あらら、団体様のご到着ってわけか。」

「貴様らか。三途の川のルールを破る者は。」

「そうだ。親より先に死んだ子供は確かに親に深い悲しみを与えただろう。だがな、この子たちだって辛いんだよ！なになぜこんな地獄のような事をする！」

「それが是非曲直の定めたルールだからだ。」

「そんな物、くそくらえだ。この子たちには、早く天国に行ってもらおう、そのために俺達は戦うんだよ。」

「ならば貴様たちを殺し、騒ぎを鎮めようではないか。」

「ここから、鬼十体と戦闘部隊29人の激戦が始まる。射撃に関してはZATに分がある。だが、一旦接近されればZAT隊員の命は無い。」

激しい打ち合い、殴り合いが続く中、非戦闘員の手伝いで子供たちの石の塔が次々と完成して、成仏していった。

ZAT側は少しずつ数を減らす。だが、鬼はダメージを受けながらも健在だった。そのまま押し切られるかという時、基地からビームが放たれ、鬼を吹き飛ばす。

「な、何だ。」

「あれは……」

技術班がマゼランやアンドロメダの武装を外し、それで攻撃してきたのだ。

「隊長、援護しますよー！」

「よし、みんな、気を引き締めろ。死んでも石の塔を崩させるな！」

そう言いつつ、ZATガンで鬼の角をへし折る佐野。

まさに紛争状態だった。鬼も想像外に強い武器に苦戦し、人間のほうは一撃一撃が死に直結している。

時間にして2〜3時間経つただろうか。ZAT隊員は半分まで減り、鬼は3体行動不能となった。

だが、石を積んでいる子供で残っているのは3人だけ。いける！そうZAT隊員は思った。

「貴様ら……ゆるさあぁあぁん！」

鬼の隊長クラスが巨大な棍棒を振り、三人の隊員の命を狩る。この鬼にはハイパーミサイルなどをぶち込んでもびくともしない。こいつから三人の子供を助ければミッシヨン達成だ。

だが、もう弾薬が無い。彼らが持っているのは弾が切れそうな武装とZAT手榴弾が数発。こうなれば……

「笹野。」

「何だ東原。」

「地獄で会おうぜ。」

東原は全ての手榴弾の安全ピンを抜き、鬼に抱きつく。

「ウオオオオオオオオオオ!!」

そして、東原の命と共に鬼の命も消える。

「東原!!……くそー!」

笹野は両腕の武装をZATバズーカに変え、鬼に撃ちまくる。

一人の霊が積み終わり、成仏する。

佐野は死んだ隊員が持っているZATブラスターを持ち、鬼の口に突っ込み、放つ。

一人の霊が積み終わり、成仏する。

笹野と佐野は鬼の隊長クラスに同時攻撃を放つ。

一人の霊が積み終わり、成仏する。

これで全ての子供が成仏する権利を得、消えた。

それを鬼が許すはずがなかった。

「貴様ら……キサマリアアアアアアアアアア!」

鬼の隊長は叫び、棍棒で次々と非戦闘員を殺していく。そしてZATステーションを持ち上げると、三途の川に放り込む。何という怪力!

「……………」

「貴様ら、死ぬ覚悟はいいか。」

「そんなもん、とつくに持っている。」

「ならば死ぬ！そして地獄に堕ちろ！」

笹野と佐野はそれぞれ叩きつぶされた。

この事件は後に、賽の河原紛争として地獄の鬼達の記憶に刻まれる事となる。

四季映姫は浄玻璃の鏡を見る目を動かし、目の前の男を見降ろす。

「佐野。あなたは生前、立派な功績を残しています。これだけなら迷いなく白なのですが、あなた達賽の河原で行った事は前代未聞の大事です。あなた達はそう、正義感が強すぎた。」

「……………」

「是非曲直片は大混乱です。あなたが行った事は死後の世界のルールを破る事だったので判決は黒。地獄送りです」

佐野は、鬼達に抱えられ、地獄の門へと連れられて行く。そこで佐野は口を開く。

「あの子供達はどうかになった。」

「あの子たちですか。あの子たちは白。天国へと送られましたよ。」

「そうか……………よかった。」

そして地獄の門に放り込まれる寸前、四季映姫が一言いった。

「ありがとう。あの子たちを救ってくれて。」

そして佐野は地獄に投げ込まれた。

彼らが取った行動が正しかったのか、間違った事だったのかは分からない。だが、彼らは誇りを持って子供らを救ったのだ。その誇り、覚悟は、僅かに四季映姫の心に響いた。なので彼らは無間地獄でなく、比較的浅い地獄で罰を受けてもらう事となった。

ZATの誇りは、消えない。例えばそこが地獄であっても。そして罰が終わり、彼らが天国へと来た時、子供たちがきつと歓迎してくれるだろう。

そして幻想郷にはもう一つ巨大な要塞が落ちてくるのだが、それはまた別の話し。

## 木更津の幻想入り

幻想郷の境界が外部から干渉されてから数日たった頃。博麗霊夢たちがピリピリしている、迷いの竹林の付近ですさまじい轟音と共に巨大な何かが落ちてきた。

一体何が起きた。とウサギたちやてゐ、鈴仙と永琳、そして妹紅がやってきて、その巨大な建造物を見る。その建造物は銀色で地上では立ちそうもない形状で半分以上がつぶれ、破壊されていた。そしてすさまじく酸い、粘性のある液体で覆われていた。

迂闊にもそれを触ろうとする妹紅。それを永琳の厳しい声が止める。

「やめなさい！この臭いは消化液のものよ。見なさい。」

永琳はカバンから青く小さい紙を取り出すと、粘液にあてる。すると青色の紙は一瞬で赤く染まった。

「なんだそれ。」

「これはリトマス試験紙と言って、簡単に言うとか酸かどうか調べる紙よ。これは強い酸……何かの生き物の胃液と考えられるわ。」

「とにかく、中を見てみましょう。」

少女達は粘液に気をつけつつ内部に入る。そこはまさに地獄絵図であった。粘液に



覆われ溶けている者、機械や基地の骨格に潰されている死体、何か変な形のカプセルで死んでいる男女、様々な死体があった。

「これは酷いわね。」

「そこらじゅうに粘液がついています。」

「生存者は期待できないですね……」

「とりあえず、死体を確認するわ。」

一体一体死体を確認していく永琳と鈴仙。妹紅は手持無沙汰に周りを見る。すると、粘液に覆われているが、僅かに胸の動いている者を見つけた。

「永琳！生存者！」

「何ですって。」

永琳は急いで患者を見る。

「これはまずいわね、幻想郷の技術じゃあ蘇生は難しいわ。」

「くそ、せつかく生きている奴を見つけたのに……」

すると永琳は目の前の死ぬ寸前の男がどこかを指差そうとしている事に気がついた。

その先を見ると、メディアカルルームと書かれていた。

「そうか、ここの技術なら分からないわ。鈴仙、内部を確認して。」

「はい。」

鈴仙はメデイカルルームに入る。その部屋は奇跡的にまだ使える状態であった。人  
工皮膚や見た事もない器具が並んでいた。

「師匠。何とか手術できます」

「解ったわ。何とかこの男を運ぶわよ。」

男は酸にまみれていたので、基地内で発見した防護服を着用して運ぶ。そして、応急  
措置を施した。

その間に妹紅は4人の死にかけの男達を見つけ、メデイカルルームで応急措置を施  
し、彼らを永遠亭へと運んだ。

その男は技術班主任だった。MACステーションアジア本部基地では天才と呼ばれ、  
機体の整備から武器の製造まで何でもござれだった。だが、彼が本当にしたかった事は  
他にある。

それは、空を飛ぶ事。いつか自分が整備したマツキーで空高くをフライとしたかった  
のだ。だが、現実には厳しく、自分の飛行の腕はエリート達には遠く及ばなかった。だが、  
今の仕事に満足していないのかと聞かれればそうでもない。自分が、MACを縁の下か  
ら支えている感覚は気持ちがいい。だが、それもあの日に終わってしまった。

鳴り響く警報、侵入してくる触手。なんとか隊員を脱出させようと頑張るが、それも  
無駄に終わりそうである。失意の中、黄色い粘液に包まれた。

気がつくと、自分はベッドの上に寝かされていた。一体どうなっている。自分は死んだのではないのか。そう思い、体を動かそうとするが、一ミリも動かない。そこに、少女の声が聞こえてくる。

「あ、師匠！最後の人が目を覚ましましたよ。」

「そう。」

そして自分を見降ろす女性、なんだか変わったナース服である。と言ってる場合ではない。

「あ……ああ……」

「無理にしゃべらなくていいわ。あなた、消化液まみれで奇跡的に生きていたのよ。それに体も動かしてはだめ。あの基地……MACステーションだったかしら？あれに乗っていた人間で、生存者はあなたを除いて四人よ。」

四人しか助からなかったか。モロボシダン隊長は生きているのだろうか。

「四人ともあなたの事を心配してうるさかったわ。」

どうやら、生存者の中に隊長はいなかったようだ。無念である。

「さて、彼らにも説明したけれど、あなたにもしてあげるわ。ここ幻想郷について。」

こうしてここが幻想郷という土地である事を聞かされた。まあ、宇宙人や怪獣がいて。妖怪がいはいはすもないが、少し驚いた。

「さて、じゃあ健康診断と行きましようか。」

それから数日たち、何とかベットから起き上がれるほどに回復した。すると、自分の周りに4人の男が集まってきた。

「木更津主任！」

「ああ……なんだ。」

「主任！喋れるまで回復したのですね。」

「ああ……まだ……長くは喋れんが……な。」

「よかった……ダン隊長が亡くなられたと聞き、落ち込みましたが、主任が無事なら！」  
「ほらほら、病人はおとなしくベットで寝ていなさい。」

ウサ耳をつけた少女……たしか鈴仙という名前だった気がする……が四人をベットに押し込む。

仕方がないので、ベットの上で会話をする事となった。

「お前達……は、どうして……生きられた。」

「俺達は主任とは違って機材の下敷きになっていただけだったので、主任ほどの怪我は負わなかったんです。まあ、1週間は絶対安静らしいですが。」

「早く治して、この幻想郷から出たいですね。M A Cが壊滅しちまったら、地球はウルトラマンレオ一人で守らないといけませんからね。」

「ああ。防衛軍だけじゃ不安だからな。早く帰って、新しい脅威を伝えないな。」  
「ああ。」

一週間が経過した。元気になった隊員達は今日、博麗神社という場所に向かうらしく、意気揚々と出ていく。だが、帰ってきたときには完全に意気消沈していた。

「どうしたんだ、お前ら。」

「実は……」

時間は少し戻って博麗神社。そこで男四人と少女一人が対峙していた。

「外に出られないだと！という事だ。ここに来れば外に出られると聞いたぞ。」

「分からないわよ。」

「分からないで済むか！我らはな、外でやるべき事が山ほどあるんだ。」

「煩いわね。できないものはできないの。私だつて困ってるんだから。」

「くつ、ならば、せめて外に通信はできないか。我らが生きている事を伝えたい。」

「無理。この結界は万全よ。その、何？電波とかいう奴もシャットアウトするわ。」

「ぐ、ぐぐう……」

「で、帰ってきたと。」

「はい。面目ありません。」

「まあ、お前達の対応にも問題があつたと思うぞ。」

「な、なぜです。」

「まず、手見上げも持つて行かなかった。それに相手は少女だろう。そんな今にもマツクガンを引き抜くような勢いでまくし立てたのも減点だな。」

「う、それは……」

「まあ、それは俺が後であいさつに行くときにわびるか。で、ここから出られないならここで暮らすしかない。」

「やはり、ここで暮らすのですね。」

「当たり前だろう。ずっと入院しているわけにもいかん。とりあえず、永琳女医から聞いた話では、MACステーションの残骸は河童という種族が持つて行つたらしい。彼らとコンタクトを取りたいが……」

木更津は四人をじろりと見る。こいつらに交渉ごとは無理だと博麗の一件で理解した。ならば、自分で行くしかない。

とりあえず、まだ松葉づえが無いと歩けないが、その体に鞭打ち、動く練習をする。いわゆるリハビリだ。

必死のリハビリの甲斐あつてか、三週間で驚異の回復をした木更津。まずする事は、永琳達への礼だった。

「いや、皆さんのおかげで完治できました。どうもありがとうございます。」

「いえ、当然のことをしたままですわ。」

「ですが、今の我々には払うべき物がありません。なので、しばらくつけという事にしてもらえませんか？」

「ええ。いいですよ。ですが注意してください。あなたは5人の中で一番重症だった。定期的な通院をお勧めします。」

「肝に銘じておきますよ。では！」

てゐに先導され竹林を出る。目指すは妖怪の山の河童居る場所。だが、妖怪の山の妖怪は好戦的と聞く。自分達は丸腰。命の危機再びである。だが、永琳からいい情報をもらった。川は意外と見張りがゆるいという事だ。なので、4人を山の下に置き、一人で川に沿ってそつと登山する事となった。

時間にして2時間かかっただろうか。粘液がきれいに洗い流された我らがM A C S テーションアジア本部基地の残骸が無造作に転がり、河童たちが調べていた。木更津は近くにいた青髪で緑のリュックを背負った少女に話しかける。

「あーすまないが、君。」

「え……」

木更津は話しかけられた少女は固まる。そして一拍置き……

「に、人間！」

と叫ぶ。すると、作業していた河童たちも驚きの目でこつちを見る。これはまずいと木更津は胸に刺繍されたマークを見せる。

「俺はその基地の中にいた生き残りだ。ほら、このマーク。基地中にある筈だと思っただろう?」

河童たちはそのマークを見ると、固まって話をし始めた。

「生き残り?」

「そんなのがいたのか。」

「だが、好都合かもしれんな。」

「うむ。」

そしてこちらを向き、さっきの少女が話してくる。

「すまないね盟友。人間がこんな山奥まで入ってくる事は珍しいからみんな驚いちゃったんだ。」

「いや、いきなり来た私にも比はある。」

「それよりさ、あのでつかい要塞、あれは何なの?」

「ああ、質問に答えるのはいいが、その前に、山の下にいる4人の部下の入山を許してほしいんだが。」

「分かった。おーい。川下に4人の人間がいるから連れてきてっさー!」



「分かったぜ」

河童が数人川の中に入り、下っていく。

「さて、この基地はMACステーションと言って……」

「これはマックガンだな。怪獣と戦うための武器だ。」

「これはマッキーシリーズ。戦闘機……いわゆる空を飛んで戦うために作られた機体だ。ただ、壊れているな。」

こうして目を輝かせている河童たちに一つ一つ説明していく。

しばらくして4人も合流したため、自己紹介をし、話しに入る。

「さて、河童のみなさん。皆さんに頼みがあるのですが……」

「何？」

「我々をここに住まわせてほしいのです。」

その言葉に、河童たちは顔を見合わせる。彼らにとって人間は盟友だ。大抵の事は聞いてやりたい。だが、いきなり来て住まわせろとはいささか凶々しいのではないか。

「もちろんタダとは言いません。皆さんは住んでみたくありませんか？あのMACステーションのような基地に。」

その言葉に数人の河童が反応する。

「へえ、じゃあなんだい。あんたらならあの基地が作れると？」

「そうです。あなた達の技術は幻想郷随一と聞きました。かく言う私も外の世界では天才技術者と呼ばれた身。それが合わさればできないことなどありません。」

「ふうむ……たしかに魅力的だな。いいだろう。お前達が住めるよう天狗どもと掛け合ってやろう。」

「ありがとうございます。」

「で、早速で悪いのだが、今、間欠泉地下センターという場所で核融合という新エネルギーが研究されている。我らもそれに対抗して新しいエネルギーを作り上げたいのだが、どうだ、できるか？」

「お安いご用です。」

「よし。にとり。お前が木更津さんの下で働け。」

「い、いんですか?」

「うむ。若いお前なら柔軟に彼の技術を取り込んでくれるだろう。期待しているぞ。」

「はい!」

こうして、木更津の仲間にとりが加わった。木更津は早速基地の残骸の中からある物を探す。

「木更津さん、何を探しているんですか。」

「ん、ソーラー発電パネルさ。」

「ソーラー発電。パネル？」

「そうだ。簡単にいえば、太陽の光を電気に変える装置だ。」

基地の中をくまなく探す。何とかソーラー発電に使用する材料を集めた。ここから木更津の本領発揮である。

「さあ、始めよう。」

一日後、河童の住む場所の近くでソーラー発電の実験が行われた。結果は大成功。この功績により、木更津は河童たちに認められたのだ。

そして木更津は、河童たちの住む場所の改造に着手した。河童の住む滝の内部に基地を作るのだ。河童たちは喜んでそれに従った。

木更津は長い石段のある物を背負って上っていた。そしてその上には箒をもって掃除をしている少女、博麗霊夢がいた。

「博麗霊夢さんだね。」

「ええ、そうよ。あんたは……その刺繍、こないだのうるさい奴らの仲間？」

「ああ、あいつらは部下でね、君に不快な思いをさせたようだ。すまない。」

「ま、分かってくればいいのよ。で、用件は？」

「ああ。この間のお詫びにこれを持ってきたんだ。」

そう言って背中にしよつたものを降ろす。

「何それ。」

「ソーラー発電パネル。簡単にいえば電気を作る板さ。」

「へえ、でも、私電気は使わないのよね。」

「今はね。でも、夏や冬になったらこれが役に立つんだ。まあ、何か欲しくなったら河童の所に来てくれ。無理な物以外は作ってあげるから。」

「ふうん。ま、覚えておくわ。」

「この時の霊夢はあまり気にしていなかったが、後に霊夢は扇風機とエアコンと炬燵を頼むことになる。」

そして秋から冬に季節が変わる頃には、基地の40%が完成した。

「木更津さん。すごい。すごいよ！」

「いや、まだだ。俺が目指すのはもっと先だ。」

「もっと先？」

「そう。俺はな、空が飛びたいんだ。」

「空？私でいいならつかまってくれれば飛ぶけど……」

「いや、そうじゃなくて、俺は、俺の創った翼で飛びたいんだ。」

「……？」

にとりにはまだ難しい話だったようだ。木更津の目標。それは自作のマッキーで空

を飛ぶ事なのだ。だが、その前には数々の解決しなければならぬ問題が山積みである。それをどうクリアしていくのか。今は、誰も知らない。

## 半人前の剣豪

これから始まるのは刀の物語。最強の剣豪と半人前の剣士の物語。死した剣豪は幻想の中に何を見るか。

ここは冥界。死者たちが閻魔の裁判を受け、成仏転生するまで待つ場。その管理を任されたるは

天衣無縫の亡霊こと西行寺幽々子。その彼女が住まう白玉楼につながる石の階段の下に男は座っていた。

その男、姿はまるで昔の武士のような服装で、一本の刀をさしている。

この男の名は錦田子十郎景竜。物の怪を見極め、妖怪退治を生業とした剣豪である。

だが、とうの昔に肉体は滅び、自らが振るった刀に宿り、自らが封じた者たちが復活しないよう見張っていたはず。

「ぬう、ハハハは……どいだ。」

男は首をひねる。彼の最後の記憶は、光の巨人とともに鬼を倒し、その力を身に宿す男に未来を託し

未練なく成仏したように思ったのだが、なぜが石造りの階段の下にいる。

しかも周りには妖気が蔓延しており、危険な場所であることに間違いない。「ふむ、もしや別の世に飛ばされたか。」

この男、平然と言つてのける。

「久しいものよ。別の世に行くとは。」

男は考え耽る。自分は生前の旅の中で、様々な魑魅魍魎や鬼、妖怪を退治してきた。その人生の中で、たまに灰色の歪みをくぐる時があつた。はじめて見た時こそ驚いたものの、

一度くぐれば今までの場所とはまったく違う空気と妖気の世、しかも人々が強大な人外の魔物に苦しめられる世に着くことが分かり、それ以降はその歪みを進んでくぐつた。今回もそうなのかと。

とりあえず考えても埒が明かぬと、石段を登り始めた。

そして、何事もなく上りきることができた。だが、本来なら弱い妖怪や亡霊たちに攻撃を

受けるはずだが、男が放つただならぬ気配を恐れ、近づけなかつたのだ。

石段の上にあつたのは日本屋敷の門だつた。それ自体は驚くに値しないが、門の向こうから、恐ろしく強い妖気がにじみ出ていた。

「ぬ、これはいかん。」

錦田は気を引き締め門をたたく。経験上、強力な妖怪は大抵の場合は人に仇をなす。それを止めるのが最強の剣豪である自分の使命だと考える錦田にとって、この妖気は見逃せなかった。

「たのもう！たのもう！誰ぞおらぬか！」

「はい、今開けます。」

そして、扉が開くと、中から白髪の少女が出てきた。この少女は半人半霊の庭師こと魂魄妖夢。

この少女は人と幽霊のハーフであり、一応は主人である西行寺幽々子の剣術指南役だ。

だが、そんなことはつゆ知らない錦田の目には、なぜか人の気が半分しか感じられず、もう半分は死者……いや、霊魂の気をもつ妖夢はかなり異様に映った。

だが、錦田はこの感じをはるか昔感じたことがある気がする。かつての懐かしい記憶。

だが、それよりもまずこの強大な妖気だ。

「あの……どなたですか？」

「わが名は錦田小十郎景竜。いきなり失礼だが邪魔するぞ。」

「ま、待ってください。」



錦田は少女の制止を振り切り、屋敷の庭へと向かう。

「ぬう……この桜か。なんと恐ろしい妖気か。」

錦田は恐ろしいほど濃密な妖気と殺気を放つ桜の前に立った。

まるで、死を誘うような気配に劍の柄を握る手に力が入る。

だが、なぜかこの桜からもほのかに懐かしい気配が漂っているのが気にかかる。

とにかく、この桜がこの屋敷の人間を死に誘う事がないよう切り倒すため、刀を抜き、一閃した。

だが、その斬撃は桜ではなく、後ろから切りかかってきた二刀をはじいた。

「お主……何のつもりだ？」

「だまれ侵入者！ 貴様こそいきなり侵入してきて西行妖に切りかかるなど何のつもりだ！」

そして、その少女は二刀を構える。だが、錦田はやはりその姿に見覚えがある気がする。

少女の構えはかつて戦った、自分が同格と認める数少ない異世界の劍豪によく似ていた。

そして手にある二振りの刀は間違いなくその劍士が持っていた刀、白楼劍と楼観劍だ。

そこから、錦田はある可能性を思いつく。

「お主、もしや……」

「うるさい。侵入者に語る口など無い！」

そして、激しい刀の打ち合いとなった。だが、打ち合いといっても少女の攻めを錦田が防ぐ、

はたから見れば一方的なものであった。

だが、実は少女は攻めあぐねているのだ。

どう刀をふるっても、まるでその太刀筋を知っているかのごとく防がれる。

「どうした、この程度か。」

「……つくー！」

さらに、錦田の余裕に満ちた表情が妖夢の神経を逆なでする。

ならばと妖夢はいったん相手から離れ、半霊を飛ばす。

もちろんそれを錦田は驚きつつもかわすが、それは予想済み。本命は別にある。

「魂符〔幽明の苦輪〕」

そう、半霊は妖夢の姿をコピーできる。つまり、実質的に二対一、四刀対一刀となるのだ。

そして、位置的には挟み打ちとなる。しかも、錦田はそれに気づいていないようで、

こちらに向かってくる。妖夢は、すべてが自分にとって有利となつていているように感じた。

そして、錦田の首と胴は前と後ろから切り裂かれる……はずだった。が、強い衝撃を感じたのは妖夢だった。

「え……？」

気づけば、妖夢の腹部には刀の柄が、半霊の腹部には鞘の先端が埋まっていた。そして、

そのほんの一瞬の後、妖夢とその半霊は前が暗くなるほどの激痛と共に大きく吹き飛ばされた。

だが、妖夢は気絶しなかった。片足は付いたが、強く相手を睨みつけ、殺気を衰えさせない。

それに対し、錦田は妖夢との戦いで頭に浮かんでいた可能性が実際のものであったことを確信した。

「ふふ……太刀筋はあの魂魄妖忌に似ているが、すべてが半端、未熟だな。」

錦田がかつて灰色の壁を通り抜けた向こうの世で出会った剣豪、魂魄妖忌。

その太刀筋は堅実で質実剛健。一瞬でも気を抜けない凄まじい剣豪だった。

「……な……なぜおじいちゃんを……知っている！」

「お主は恐らく奴の娘か孫であろう。いや、懐かしいな。まさかこの数百年で子供をこさえていたとは。あの堅物が子供をなあ……」

錦田はかつての懐かしい記憶を思い出した。

かつて、灰色の壁を抜けたところにあつた世の一つでの体験。

その世にいた強大な物の怪を三人がかり……いや、正確には二人と半分がかりで倒した後の酒宴でのこと。

あの亡霊の提案で始まった魂魄妖忌と自分との腕比べ、

恐らく、博麗のに止められなければ百日手となつたであろう。

だが、そうならなかつたのをほんの少し残念に思えた、そんな強く、素晴らしい劍豪であつた。

が、そんなことは妖夢には関係ない。

もしかしたら、消えた祖父の消息がわかるのかもしれないのだ。

痛む腹を抑えつつ、刀を構える。

「おじいちゃんは……どこにいる!」

「まだやるつもりか。だが、今のお主の体と腕では無理だ。」

「うるさい!何が何でも聞きだしてやる!」

そう言うとうと、錦田に飛びかかる……前に、それを止める声がかつた。

「そこまでよ妖夢。刀を引きなさい。」

「幽々子様!ですが…」

「引きなさい。彼には今のあなたの腕では絶対勝てないわ。」

主にそう言われ、かなり悔しそうに刀を納める。

そして錦田も刀を納め、妖夢の主である西行寺幽々子に向き直った。

「西行寺ではないか。また懐かしいな。ということは、やはりここは白玉楼とかいうところか。」

「ええ。久しぶりね景竜。大体……五百年ぶりかしら。ここに来るには遅すぎないかしら?」

「五百年か。時がたつのは早いものよ。だが、お主は少しも変らんな。ところで…」

「ああ、妖忌は悟りを開いて出て行ったわ。」

その言葉に内心驚く錦田。

「……なんと。お主から離れていくとは奴らしくないな。」

「……まあ、そこらへんの積もる話をしましょうよ。妖夢、あなたは下がっていないさ。」

妖夢は少しづつとしていたが、さすがに主の命には逆らえない。

「…分かりました。」

そう言うと、フラフラと屋敷に戻る。

「ところで、あなたはなんでここに来たのかしら？」

「ああ、この桜の妖気に引かれてな。」

そう言うと、桜のほうへ向きなおる。

「お主……こんな桜がある屋敷に住んでいたのか？」

「ええ。綺麗でしょう。まだ蕾だけだけど、八分咲きがまた美しくてね。」

「フム……お主は死んでいるからわからんのだよ。まだ蕾の段階でこの妖気。」

満開になったら何が起るかわからん。ここで切り倒すことを勧めるが……」

「いやよ。それに、私も満開を見たことがないわ。かつて幻想郷中の春を集めても満開にならなかつた……今でもちよっぴり残念。」

錦田は軽いため息をついた。彼としてはこんな物騒な妖怪桜は切り倒して封印してしまいたいのが、

どうもこの亡霊のお気に入りのようなのだ。彼女を説得するのは湖面の月を持ち上げることがごく

難しいだろう。

錦田は屋敷に上がしてもらった後、幽霊から酒を出され、それを西行妖を着に幽々

子と

飲みかわすこととなった。

「しかし、こう立派な屋敷で酒を飲むとは何年ぶりか。」

「へえ、じゃああの後にも戦い続けたの？」

「無論よ。それが俺の務めだからな。」

そう話していると、襖が開き、部屋に妖夢が入ってきた。

「あら、妖夢。どうしたの？」

「いえ…その、景竜様。先程はご無礼をいたしました。まさか幽々子様のご友人とはつゆ知らずに…」

「いや、構わぬよ。私も無作法が過ぎたのだ。すまない。」

「そうだね。妖夢、あなた景竜に剣を教わったら？」

その主のいきなりの提案にポカンとする妖夢と、やれやれと首を振る錦田。

「景竜はね、とつてもつよい剣豪なのよ。その彼に剣を教われれば、きつと半人前から一歩前進できると思うわ。」

「は、はあ。」

「まで西行寺。俺は他人に剣を教えられるような器用な人間じゃないぞ。」

「いいのいいの。最近妖夢ったら少し緩んでるから、鍛え上げて頂戴。」

「はあ……まあ、お主がそう言うなら何かしてもかまわんが……」

錦田は妖夢を見る。そして真剣な目で目を見る。

「肝心なのはお主がついてこれるかだ。どうだ、妖夢とやら。」

その眼力にやや気押されている妖夢であったが、負けじと目を見返す。

「もちろん、ついていきます。」

「そうか……」

錦田はにやりと笑う。

「とりあえず、今日はもう遅い。早朝一番に始めるから、寝坊はするなよ。」

「馬鹿にしないでください。寝坊なんかしませんよ。」

「あらあら、楽しみだわ。」

次の朝、妖夢は武士スタイルで気合を入ってきた。だが、錦田は至って普通の服装だ。

「じゃあ始めるが、その前に言っておく事がある。」

「何ですか？」

「俺の剣はいわば戦いの中で自然にできた物。とてもじゃないが教えられるようなもん

じゃない。」

「教えられない？」

「そうだ。だから盗め。俺はお前にひたすら打ち込む。それをお前が盗むのだ。」

「は、はい。」



「とりあえず防具はつけとけ、木刀でも、当たり所が悪ければ死ぬぞ。」  
「分かりました。」

妖夢は急いで剣道で使用されるような防具に着替え、再び対峙する。

「よし、では行くぞ。まずは小手調べだ。」

そう言うのと、錦田の姿が、消える。妖夢が気がついた時には既に目の前に迫っていた。

「つくー！」

妖夢は1歩下がって体制を整えようとするが、そんな暇はなかった。錦田がまるで嵐のように木刀を振ってきたからだ。それを二本の木刀で裁く妖夢。だが、まるで防げない。上、右、左斜めと自分の祖父の太刀筋とはかけ離れた、いわば力の攻撃についていけず、妖夢は膝をつく。

「どうした、その二本の刀は飾りか！ちゃんとさばき切って見せろ！」

錦田の一太刀一太刀はとにかく重かった。一撃受けるたびに腕がしびれる。だが、自分だつて祖父に剣術を学んだのだ。祖父の誇りにかけて、こんな所では躓けない。

「ヤアアアアアアアアアア!!」

妖夢は気迫と気合で何とかさばき切る。

「ふむ。」

そして錦田の攻撃が終わり、次は妖夢の番だ。

「では、行きますー！」

妖夢の太刀筋はかなり基本に忠実、かつ素早い。だが、錦田は片手で木刀を持ち、か  
るく防ぐ。

バカにされていると感じ、僅かにイラつく妖夢。だが、そこを突かれる。

「ふんー！」

ゴンと鈍い音がして、妖夢の面の上に木刀が叩きつけられる。

「だめだな。そんなへなちよこ剣じゃ実戦ではまるで役に立たん。妖忌はお前に何を教  
えたのだ！」

「何ー！」

祖父の悪口を言われたと思い、僅かに怒る妖夢。だが、次の言葉で沈黙する。

「お主の弱点は妖忌だ。」

「弱点が、おじいちゃん？」

「そうだ。お前は中途半端に妖忌の剣をまねているだけだ。それではお前の剣が作れな  
い。まずは、妖忌を捨てるところから始める。今日はここまでだ。明日からはもつと厳し  
くやるからな。覚悟しておけ。」

そう言うのと、錦田は館へと入っていく、妖夢は薄れゆく意識の中で、錦田の言葉の意  
味を考えていた。

おじいちゃんを捨てる……？ 剣のすべてであったおじいちゃんを？ そんな事が出来るのか？

そして、妖夢は倒れた。

気がつくくと妖夢は布団の中に寝かされていた。起きようとする、全身に激痛が走る。

「あらあら、寝てなきやだめよ。」

「ユ、幽々子様。私は……」

「どうだった。景竜との稽古は。」

「……私の弱点はおじいちゃんだと言われました。」

「そう。」

「私は今までいくつもの異変を解決してきました。ですが、それが井の中の蛙である事に気がつかされました。景竜様の剣は、まさに戦いの剣でした。」

「ふふ、そこに気がつけただけでも大収穫よ。ほら、料理番の幽霊に頼んで一杯ごちそうを作ったから、後で食べましょ。」

「はい。」

次の日、その次の日と錦田と妖夢の稽古は続く。稽古といっても、錦田が一方的に妖夢を打ち、妖夢がそれを防ぐというものだった。だが、激しい攻撃の中、妖夢は、何か

をつかみ掛けている気がした。

妖夢と錦田が稽古をしている中、三途の川の彼岸では大変な事態が起こっていた。突如空が割れ、彼岸やそこに運ばれてくるはずの幽霊たちがその割れた空から出てきた謎の空飛ぶ船によって、全て連れ去られたのだ。そして迎撃に出た死神や鬼達までも魂を抜かれ、灰色になり倒れる。その船こそ、かつてネオフロンティアスペースでウルトラマンダイナと戦った強豪怪獣の一体、幽霊船怪獣ゾンバイユである。

そして、ゾンバイユはさらなる餌を求め、冥界を目指す。冥界が壊滅するのは、時間の問題かと思われた。

激しい稽古の後、妖夢は息を荒げ、砂利の上に倒れこむ。錦田はかなり余裕そうである。

「どうだ妖夢。何かつかめそうか。」

「は、はい。もう少し、もう少しなんです。それがつかめれば、何か変わる気がするんです。」

「そうか。お前が何かつかめた時が楽しみだな。」

錦田はにこりとしている。どうも妖夢は上達が早い。だが、妖夢がぶつかっている壁

は予想以上に高いようだ。

その時だった、錦田は、邪悪な気配を察知し、虚空を睨みつける。

「どうしたんですか？」

「何か来る。邪悪な何かが。」

すると、虚空が音を立てて割れ、中から船が出てくる。

「あれは、空飛ぶ船……」

「いや違う。うまく船に擬態しているが、あ奴は魔の存在だ。」

すると、船の下部から黒い光が降り注ぐ。そして、それがこちらに向かってきていて  
ではないか。

「いかん。妖夢！」

「え、きや。」

錦田は妖夢を小脇に抱え、そこから飛び退く。そして、一瞬前までいた所に黒い光が  
降り注ぐ。すると、その場にいた幽霊たちが消えてしまった。

「奴め、恐らく霊体を食物としているに違いない。」

「ど、どうしましょう。あんな大きな船、刀じゃ勝ち目なんて……！」

その言葉に、錦田は反応し、妖夢の頬を叩く。

「妖夢。だからお前は半人前なのだ！」

「景竜様？」

「刀で勝ち目が無いだと？お前は俺の剣と妖忌の剣を見てきたのだろう。なのになぜそんな弱気を吐く。」

「そ、それは……」

錦田は、妖夢の頭に手を置く。

「妖夢。今まで教えてきたことを生かすんだ。そして、今掴みかけている物をつかめ。そうすれば、敵が自分の何百倍大きかろうと倒せるようになる。」

「景竜様……」

錦田は白玉楼に妖夢を降ろすと、刀を持ち、ゾンバイユに向かっていこうとする。

「景竜様、私も……」

「だめだ。お前は私の戦いを見て、掴むんだ。今掴めそうな何かを！」

そう言うと、錦田は刀を抜き、ゾンバイユの青い発光体に刀を突きさす。そしてそこからゾンバイユの頭へと切り裂いていく。錦田の刀とゾンバイユの皮膚が火花を散らす。錦田は何度も発光体を切り付け、ゾンバイユは苦しむ。だが、ゾンバイユもやられてばかりではない。錦田が刀を振ろうとすると、目の前から消え、錦田の上空に現れる。そして、黒い光線を浴びせようとする。だが、錦田は刀を投擲し、下部の発光体に突き刺す。すると、その発光体が爆発を起こし、ゾンバイユは落下していった。

その様子を妖夢は固唾を飲んで見ていた。錦田はとにかく攻勢で相手に隙を与えない。そして地上戦でも何度もゾンバイユの皮膚を切り付けている。その光景を見て、妖夢は何かをつかみ取ろうとしていた。

「どう、何か掴めそう?」

「幽々子様。」

そんな妖夢に、幽々子が話しかけてきた

「景竜様は力強いです。とにかく攻撃が激しくつて、おじいちゃんとは……」

その時、妖夢は自分の中にある何かの姿を見た。そうだ、景竜にはおじいちゃんのような技が無い。とにかく切るのみの力技だ。なら、二つを組み合わせたらどうだろう。景竜の力を、おじいちゃんの技に組み合わせる。

やってみよう。そう妖夢は思った。気がつくとき白楼剣と楼観剣を握っていた。そして、ゾンバイユへと駆け出す。

ゾンバイユと戦う錦田は走ってくる妖夢を見て、叫ぶ。

「掴めたか、何かを。」

「はい!見ていてください。私の、力と技を!」

妖夢は二振りの刀を抜き、構える。そしてイメージする。自分がかつて学んだおじいちゃんの技に、景竜から学んだ力を加える。

「六道剣「一念無量劫——Lunatic——！」

無数の斬撃が、ゾンバイユを切り刻む。そして、その皮膚に穴をあけることに成功する。そこから、どンドン幽霊たちが逃げていく。

「うむ、お前の力と技、見せてもらったぞ。ならば俺も見せよう。俺の最強の斬撃を。」  
錦田は腰を低く構える。錦田の剣の周りの空間が歪む。そして、一気に振り下ろす。

この技に名は無い。ただ、相手を全ての力で持て一刀両断するのみの技。  
この技を食らい、ゾンバイユは真つ二つとなり、爆散した。

白玉楼。そこでは灰色のカーテンを背にした錦田と、妖夢、幽々子がいた。

「もう、行かれるのですか。」

「もう少しゆっくりしていけばいいのに。」

「あはは、そうもいかん。まだどこかの世界が俺を呼んでいるようだからな。」

そう言うと、カーテンに向かう錦田。そして、カーテンに入る寸前で足を止める。

「妖夢よ。」

「はい。」

「力と技の剣。見事だった。」

そして振り返り、優しく言う。



「俺の剣でもない、妖忌の剣でもない、お前の剣をみつけれ。そうすれば、妖忌はきつとお前の所に帰ってくる」

そう言い残し、錦田はカーテンに入って行った。

最強の剣豪が鍛えた半人前の剣豪。彼女はこれから、無数の侵略者との戦いに巻き込まれてゆくが、それは別の機会に語ろう。

## 幻想のセブン

今回語られる物語は人形の物語。外の世界の英雄を模した人形と、自立人形を求める少女の物語。彼らが出会ったとき、どんな異変が起こるのだろうか。

ここは魔法の森の中、そこに七色の魔法使いことアリスの家があった。その中でアリスは落ち着かない様子で部屋を歩き回っている。

「…遅い、遅いわね。」

彼女は何かを待っているようだ。周りの人形たちもそれに応じ少しそわそわしている。

「やっぱり私も行くべきだったかしら…ダメダメ！それじゃ実験にならないわ。」

「どうやら何か実験をしているようだ。ぶつぶつと独り言を言っている。」

「でも…やっぱりまだ上海にお使いは難しいかしら。」

そう、彼女は上海人形にお使いを頼んだのだ。これは彼女の夢である自律人形製造のための実験であり、マスターが近くにいなくても、店への道と買ってくる物と簡単な行動を指令してのお使いという行為の中で、自立思考を基にした自立行動できるかを試したのだ。とはいえ、それを頼んですでに三時間。外は暗くなり、さすがに時間がかかり

すぎである。落ち着くために紅茶を入れようとしたとき、ドアを叩く音が聞こえた。  
「……やつと帰ってきたわね！」

彼女は嬉々としてドアへ向かう。

「まったく、上海、遅いじゃ……」

そこには確かに買い物袋を抱えた上海人形がいた。何者か知らないが男とともに。

少し前、上海人形は森の中を自分のマスターの命令を果たすため、森の中をふわふわと飛んでいた。

彼女の手には大根や豆腐、ネギなどが入った袋が下がっている。

すると、森の中、ボーッと立っている男を見つけた。といっても、それだけなら無視して行くところだが、その男に話しかけられてしまった。

「なあ、君。すまない、が、ここ、は、どこ、だい？」

その男はひどくたどたどしい話し方で自分に質問してきた。だが、これに対する受け答えは命令されて

おらず、どう答えればいいのかわからなかった。とりあえずマスターに指令を仰ごうと家へ連れて行くことにする。

「コッチコイ」

そう上海人形は言つて、再び帰路につき、その後ろを男が付いていった。だが、その歩みは非常にたどたどしく、ゆっくりだったためかなり時間がかかった。

しばらく森を歩くと、森が開き、一軒家が見えてきた。その扉に近づくと、上海人形は

「チョットマツテロ」

そういうと、扉をたたいた。すると、中からほつとした表情の金髪の少女が出てきた。

「まったく、上海、遅いじゃ…」

こうして二人は出会った

「あなた…誰？」

「私…は…ウルトラセブンの、の、はず、かも、です。」

この出会いが二体の人形に大きな影響が出るとはこの時点では、誰も知らない。

アリス・マーガロイドは混乱していた。時間はかかったとはいえ上海人形が無事お使いを達成できたのは喜ばしいが、無駄なものも連れてきてしまった。しかも服装からして外来人。最近はずしくもなくなってしまうが、どうもこのウルトラセブンかもしれないと言う男、妙な感じがする。

「……」

「……」

とりあえず招き入れ、机を挟んで座っているが、空気が重い。自分はそういうことは気にならないが、普通の人間、しかも右も左もわからない外来人なら気まぎれで何か言ってくるはず。しかし何も言っていない。それに、見た目は普通の青年だが、何か違和感を感じる。人間のような気がしないのだ。

「…ねえ。」

「はい。」

一息おいて、アリスは問う。

「あなたは…人間なの？」

「いいえ。わたし、は、人間、では、あり、ません。」

ここまでは予想通り…とまではいかなくとも別段驚かない。最近の外から妖怪が流入しているという噂も聞く。

だが、次の一言は予想していなかった。

「わたし、は、人形です。」

「…は？」

人形…自分が聞き違えなければそう聞こえた。目の前の男は、自分を人形と評した。

「…ちよつと失礼するわね。」

近づいて手を触ってみる。普通の人間に近い感触と暖かさである。

「あなたね、からかわないですよ。」

「からかう、なんて、してません。私、は、人形。直人君の人形です。」

「どういふことだろう。自分を人形と思い込む異常者か、それとも九十九神か、メラニコリーのように人形が妖怪化したか。と考えていると、どうも様子がおかしい。」

「人形……ちがう、私、は、セブン、ウルトラセブン。悪い、奴ら、を、倒す、正義、の、ヒーロー。」

すると、男は頭を抱え、苦しみだした。

「私は人形、直人君の人形。違う、私はセブン、ウルトラセブン。いや、私は……私は！」  
「そういうとびたりと動きが止まり、自分のほうを向いた。その表情をみると、ぞつとした。」

「わたしは、いったい何なんでしょうか。」

それは、まさに人形のような、能面のような表情だった。

男は苦しんでいた。彼には二つの記憶がある。一つは直人少年との人形としての記憶。彼と一緒に暮らして、共に遊ぶのは人形名刺に尽きた。つまり、自分は間違いなく人形だった。

もうひとつの記憶はウルトラセブンとしての記憶。正義の味方、ウルトラセブンとし

て、直人少年に怪我を負わせた悪者たちを倒そうとして、邪魔する奴と戦った。それに直人少年も自分をウルトラセブンと呼んでいた。つまり自分はウルトラセブンである。

だが、何か違う。どちらも何かが足りない。自分は人形か、セブンか。その疑問ばかりがわいてきた。

しかも、自分は少なくとも人間ではなかったのに、人間として木々の生い茂るところにいた。

一体何が起きているのか。この男には理解できなかった。

「…わからないわ。あなたの主人…直人君？その人に聞いたらいじやない。」

アリスはほんの一瞬ぞっとしたが、すぐに気を取り直し質問に答えた。

男はなるほどと思った。自分に存在意義をくれた彼なら何か知っているかもしれない。い。

そう思った時、やっと彼は、幻想入りした人間がだれでも抱くであろう疑問を抱いた。「そうですね。ところで、ここはどこですか？」

「……」

とりあえず、アリスは森にごく稀に迷い込む外来人にする説明をした。

「幻想郷…ですか。」

「ええ、もしかしたら、あなたは人形が妖怪化したのかもしれないわね。」

「フム…外に変えることはできますか。」

「もちろん。博麗神社から帰ることはできるわ。でも…人ならともかく、妖怪が出られるかは知らないわ。」

「困った。直人君は外にいるのに。」

アリスは困る男を尻目に、とりあえず夕食を用意した。

「まあ、考えるのはあと。今は食事にしませう。」

「シヨクジ?...ああ、直人君が毎日していましたね。でも、どうやるんですか。」

「...え?」

結局食事は自分だけ済ませた。だが、その様子を好奇心いっぱい目の目で見られるのはなんだかくすぐったかった。

食事の後は人形のメンテナンスである。今回、上海人形には長距離を飛んでもらった。

きちつと整備してやらなければ。とりあえず服を脱がし、関節を確認する。

すると、男が真っ赤な顔をして顔をそむけた。どうやら、上海人形の裸を見てしまったらしいが、別段人形の裸など反応するようなことではない。変なやつである。

「とりあえず、お客用の部屋があるから、そこで寝てね。」

「寝る...ああ、あれですね。わかりました。」



あれって何かと疑問がわいてきたが、まあ、追求するのはめんどくさい。部屋に押し込んだ。

「はあ、なんだか面倒なことになったわ…」

男が寝たのを確認し、ため息をつく。人形が運んできた紅茶を飲むと、何をしようか考える。

とりあえず、竹林の薬師に見せて人間かどうかを確認しよう。ただの妄想にとりつかれた人間なら

とつと博麗神社からお帰りいただく。本当に人形だったらなかなか興味深いことだ。彼を研究すればなにか自立人形へ近づく道が見つけられるかもしれない。

「まあいいわ、上海。明日、私が起きる前に掃除しておいてね」

「ハーイ」

そういうとアリスも就寝する。

次の日、男は目を覚ました。といつても本来人形なのだから睡眠など必要ない。ただ目をつむって太陽が昇るまで待つていただけである。とりあえずは居間へ向かった。

「おや、」

そこでは、数々の人形が動いて掃除をしていた。その中央では一体の人形が指を動かしている。

「おはようございます。上海人形さん。」

「オハヨー」

どうやら上海人形が動かしているようだ。すごい働き屋さんな人形である。自分の人形としての記憶では、直人君の隣で寝ていたり、動かされたりと自ら動いている記憶がない。

「あなたは働きの者ですね。上海人形さん。」

「ソレホドデモ」

上海人形からしてみれば、昨夜の命令を遂行しているだけ。別に特別なことではない。

そこで会話は途切れる。すると、妙なことに男の様子がなんだかおかしい。どうも落ち着かないようだ。

「その…上海人形さん。」

「？」

男が口を開く。

「何かすることはありませんか？」

「ネエヨー」

「そ、そうですか…」

また無言の時間が続く。なんだか、男は居心地が悪そうだ。

「ふあ……おはよう。」

「あ、おはようございませう。」

上海人形たちがトーストとめだま焼きを焼いていると、そこにアリスが起きてきた。中々かわいらしいパジャマである。

「それじゃ、朝食が済んだら、竹林に行くわよ。」

「チクリン……とは？」

「ああ……歩きながら教えるわよ……」

アリスはげんなりしながら椅子に座った。すでに机には朝食がきれいに並べられている。

「じゃ、朝ごはんにするけど、あなたはどうする？」

「はい、食事ですね。じゃあ、この茶色いのを。」

そういうと、トーストに手を伸ばす。そして、間違っても丁寧ではない……いや、かなり汚い食べ方をする。

「………とりあえず、ただののり人形よりものを知らなさそうなのはわかったわ。」

そして、机の上が片付いた後、アリスは着替え、男を連れて竹林へと向かう。ついでに魔理沙への見舞いも持って行く事にする。

外は少し前までの恐ろしい暖冬とは打って変わってかなり寒く、アリスはかなり厚着をしている。だが、男は別段寒そうではない。

「あなた…寒くはないの？」

「ええ、そういう感覚はないものですから。」

もう突っこむのはやめよう。とにかく、男は飛べないだろうから、歩いていくこととなった。

「単刀直入に言うわ、あれは人間ではない。」

竹林に住む月の頭脳ごと八意永琳は男を簡単に検査した後、断言した。

「人間じゃない…？じゃあ、やつぱり人形の妖怪？」

「それに近いと思うわ。でも妖怪じゃないんじゃないかしら。少なくとも痛覚や血は無いようだし。」

永琳は検査の中で血液を抜こうと注射器を刺したが、男は眉一つ動かさなかったし、血は一滴もとることはできなかったらしい。

「まあ、詳しくはもつと解剖しないとね。」

「フム…じゃあ、まさに生きた人形ってことね。面白いじゃない。」

「ええ、面白いし興味深いわ。彼は自分のことを人形だとも思っているし、ウルトラセブ

ンだとも思っている。その二つの間で葛藤しているの。」

「へえ、ところで、ウルトラセブンって?」

「さあ。彼が言うには正義の味方らしいわ。」

「正義の味方……ねえ。」

何というか、胡散臭い話である。トーストの食べ方も知らない奴が正義の味方と言われてもいまいとつピンとこない。

「まあ、考えられる可能性の1つとしては、彼はウルトラセブンという正義の味方模した人形が妖怪化、または魂を持った存在である……つてとこね。でもよかったじゃない。」

「なにがよ。」

「あなた、自律人形の研究をしているんでしょ?彼は正義の味方を模した人形が自我を持った時の貴重なサンプルじゃないかしら。」

「そうねえ……」

自律人形の制作。それがアリス・マーガトロイドのライフワークである。たしかに妖怪化した人形を自立人形の1つの形のように思う者が多い。だが、そう言った存在はあくまで妖怪であり、自律人形では無い。それがアリスがメディスン・メランコリーという人形の妖怪を自律人形と認めない理由だ。

だが、人形の妖怪が研究に全く関係ないと言えそうではない。今回見つけた男は葛

藤という興味深い事をした。もし上海人形が自律したら、彼のように自分の存在に葛藤するのだろうか。

決めた。彼ともう少し暮らし、研究に役立ってもらおうではないか。

そしてついでに魔理沙にも会う事にした。

「お、アリスじゃないか。お前も見舞いに来てくれたのか。」

「ええ。暖冬異変を解決したんだって聞いたわよ。まあ死ななくてよかつたじゃない。」

「しばらくは歩けないけどな。暇でしようがないぜ。」

「そうだと思つて魔道書を持ってきたわ。」

「え、いいのか?」

魔理沙はアリスから魔道書を手渡される。魔道書を盗む事には慣れていても、普通にもらう事には慣れていない魔理沙は驚き半分、嬉しさ半分だった。

「ええ、その本はとつくの昔に読み終えているし。そんなに興味無い内容だったから。」

「ずいぶんと優しいな。変なキノコでも食ったか?」

「怪我人には優しくしないとね。そう思っただけよ。」

そして病室から出るアリス。その背に声が掛けられた。

「ありがとな、アリス。」  
と。

永遠亭からの帰路の途中、アリスはふと大事な事を忘れていた事に気がついた。

「そう言えば、あなたの名前を決めないとね。」

「わたしの、名前？」

「そうよ。いつまでもあなたじゃなんか変だし。そうねえ……セブンなんてどう？ウルトラセブンの人形だからセブン。」

「セブン……わたしの名はセブン。」

「そうよ。今日からよろしくね、セブン。」

「わかりました。アリスさん」

セブンとアリスは帰路につく。日が傾き暗がり広がる頃、その背を見つめる何かがある事も知らずに。

そうしてセブンとアリスの奇妙な共同生活が始まる。まずは、セブンに徹底的に常識、マナーというものを叩き込んだ。

「いい、私のまねをしながら食べなさい。」

「寒い時にそんな薄着じゃあ変に思われるわ。ちゃんと厚着しなさい。逆に暑い時は脱ぎなさい……ズボンじゃないわよ！」

「ちゃんとお風呂に入る、寝る前は歯磨きをする、起きたら顔を洗う。生活の基本のきよ。ちゃんとやってね。」

……という風なアリスの熱血指導でセブンはすっかり人間と変わらない生活をするようになった。だが、変わった事も起きた。上海に頼んだ事をなぜか人形達に混じって手伝っているのだ。また、上海によく話しかけたりするようになった。

変わった事をするものである。やはり元人形だけあつて何か通じる事があるのかも知れない。また、話しかけられる事が上海人形にも良い影響を与えているようだ。何かとセブンと一緒にいる時間が多くなっている気がするし、何か行動がより効率的になった気がする。

これは、上海人形が自律人形に近づいた証ではないか。そう思ったアリスは上機嫌でセブンと上海を一緒に行動させてみることにした。今回もまたお使いに上海を行かせると。無論、セブンも一緒に。

すっかり暗くなり、二人は人里からの帰路に就く、上海とセブンは会話をしていた。セブンが初めて見た人里という場所についての感想を一方的に言っているだけのように見えるが、ちゃんと上海も受け答えしている。

そんな時だった、セブン達の前に、フードで顔を隠した黒づくめの子供が現れた。黒い風船を持って。

上海はその異常性に気づいて警戒するが、セブンのほうは何の警戒心なく挨拶する。

「いんげんぽんぽん。」



「こんばんは。ウルトラセブン。」

「……う？なぜそれを——」

それ以上は話せなかった。黒づくめの子供が持つ風船が割れ、中から黒い闇がセブんに襲いかかったのだ。

「グアアアアアアアアアア!!」

闇は、セブンの体を変性させ、巨大させた。セブンがいた場所には、赤と銀の巨人がいた。そう、我らのヒーロー、ウルトラセブンである。ただし、この存在はウルトラセブンであってウルトラセブンでは無い。直人少年のマイナスエネルギー、怨念が人形に憑依した存在、かつてウルトラマン80と戦った妄想ウルトラセブンなのだ。

「さあ、暴れるウルトラセブン。この幻想郷を破壊してしまえ！」

オオオオオオオオオオオオオオオオ

それを見ていた上海は急ぎマスターの家へと向かう。セブンの異常を知らせに。

## 幻想のセブン2

アリスは久々にゆっくりと一人で紅茶を楽しんでいた。多少時間はかかっているが、まあ許容範囲だろう。きつとあの二体ならお使いを完べきにこなしてくれると信じている。その時、ドアが激しくたたかれる。

「……?どうしたのかしら。」

アリスがドアを開くと、上海が飛びついてきた。

「上海、どうしたの。セブンは?」

「セブंगा、セブंगा!セブंगाカイブツニナッタ!!」

「……!何ですって。」

アリスは慌てて外へと出る。すると人里の方向へ向かおうとする巨人を見つけた。

「あれがセブンなの?」

「ソウ。アヤシイヤツニナニカサレタ!」

「まずいわね、あんなのが人里に入ったら大惨事よ。上海、行くわよ。」

アリスは空高く飛び立ち、ウルトラセブンの前が出る。

「止まりなさい!セブン!」

だが、ウルトラセブンは止まらない。腕でアリスをたたき落とそうとする。「くっ！やっつけてくれるじゃない。」

アリスは人形を呼び出し、迎撃態勢に入る。

「注力（トリップワイヤー）」

人形達がセブンの体の周りを飛び回り、縛り上げる。セブンは引きちぎろうとするが、なかなか切れない。

「魔界の紐の強度をなめないでよね。まだまだ行くわよ。咒符（上海人形）。咒詛（蓬莱人形）。」

二体の人形、上海人形と蓬莱人形が出てきて、セブンの顔面に光線を打ち込む。

爆音と共にセブンは数歩後ろに下がる。だが、セブンは紐を力ずくで引きちぎると、両手の指二本を立てて額の光っている部分に当てる。すると、青色の光線が放たれた。アリスは寸での所でかわす。

「やっぱり効いてない、全く、火力勝負は苦手なのに……」

自分は魔理沙のような力技は好きではないし、巨大な敵に効果的に攻撃する術がない。とにかく、霊夢か早苗のような異変解決の専門家が来るまで足止めをしなければならぬ。だが、あの光線はまずい。あれ一発で人里の人間が何人死ぬだろう。何とか、額のランプだけはつぶさない。そう考えていると、上海が勝手に前に出る。

「上海ー！」

セブンが腕をL字型に組もうとした時だった、上海が、セブンの前に出て、話しかける。

「セブン！コンナコトシチャダメ！イツモノセブンニモドツテ！」

その言葉は、闇に支配されたセブンの心を揺り動かす。セブンの腕が、組まれる寸前で止まったのだ。そして、頭を抱え苦しみ出す。

「上海の言葉が、効いている？」

上海は話しかけ続けた。まるで、自分の意志を持っているがの如く。そして、その言葉は、セブンを支配する闇を切り開いていく。

セブンは闇に閉ざされた空間でもがいていた。このまま暴れては、直人君の信じた、正義の味方ではなくなってしまう。そして、自分と仲良くなってくれたアリスや、上海達を傷つけてしまう。それは、それだけは、いやだ。

——わたしは・正義のヒーロー・ウルトラセブンの人形だ!!

セブンは理解した。自分は人形であり、同時にウルトラセブンなのだ。それを悟ったセブンは光となった。本物のセブンに比べたらマツチの光ほどに小さな光、だが、それでも光となったのだ。そして、心の闇を吹き飛ばした。

頭を抱え苦しんでいたウルトラセブンの体から闇が飛び出た。そして、ウルトラセブ

ンの体は小さくなっていく。

「闇が……！」

闇はどこかに逃げ居ていこうとした、だが、それを止める者がいた。

「霊符（夢想封印）」

札が闇を取り囲み、その博麗の秘術の詰まった札の効果で闇は封印された。

「全く、こないだの怪獣騒動から少ししか経ってないのに異変なんか起こさないですよ。」

「霊夢。」

そう、我らが博麗霊夢が来たのだ。セブンのうめき声は幻想郷中に響いていたらしい。

「で、何でこんな事が起こったの。」

「分からないわ。何でも、妖しい奴がセブンに何かしたらしいんだけど……」

「セブン？」

「ああ、そうだ！セブンは無事かしら。」

アリスは慌ててセブンが消えた場所へと向かい、霊夢もそれに続く。

そこには、地面に倒れこんだセブんと、黒づくめの子供がいた。その男がセブンに触れようとする。

「偵符（シーカードールズ）」

人形から放たれた光線は黒ずくめの子供の周りに着弾し、男は後ろに下がる。

「ふん、魔法使いに巫女か。」

「ええ、そうよ。あんたは？」

「私か、我が名はヤプール人バキシム。」

「セブンをおかしくして……何が目的なの。」

「そんなことを貴様ら下等生物が知る必要はない。なぜなら貴様らはここで死ぬからだ」

その瞬間、空がきしみを上げ、ひび割れる。

「な、なに？」

「空が割れる？」

男の嘲笑が響き渡る。空のひび割れは酷くなり、ついに音を立てて割れる。

「さあ現れよ、蛾超獣ドラゴリーよ！」

そう言うのと、黒づくめの子供は笑いながら創りだした空間のひび割れに入って行き、消えた。

「なんて事、また怪獣と戦う事になるなんて……」

「あいつも人里を目指してる。何とか倒さないと大惨事よ。」

「とにかく、攻撃を仕掛けるわよ。」

「えええ！」

アリスと霊夢は超獣ドラゴリーに向かっていき、札やレーザーで弾幕を張る。だが、ドラゴリーにはまるで効かない。

「やっぱり通常攻撃じゃ歯が立たない以前の問題ね。」

「大技を叩き込まなくては……」

「皆さん、お待たせしました。」

そこに助っ人が来た。

「早苗。ちようどいいわ。あいつの事知ってる？」

「あいつは確か超獣の内の一体だったと記憶しています。たしか、超獣は怪獣より強いですよ。」

「最悪の情報ありがとう。でも、三人で同時にスペルカードを使えば……」

話していると、ドラゴリーが炎を放ってくる。

「くっ！話している暇はないわね。一気にたたみかけるわよ」

「大結界〔博麗弾幕結界〕」

「グランギニョル座の怪人」

「大奇跡〔八坂の神風〕」

三人が持つ高火力の弾幕がドラゴリーを襲う。さすがのドラゴリーも三人から攻撃

を受ければひるみ、後ろに下がる。だが、根本的な対処法が無い。

「つち！相手が大きすぎて攻撃があまり効かないか……」

「霊夢さん、紫さんたちなら何とかできるかもしれないですよ。」

「生憎あいつは冬眠中よ。」

少女達がドラゴリーとの戦いで苦戦する中上海は倒れたセブンのそばにいた。

「セブン……」

「うつく……」

「オキタ！セブン、ダイジョウブ？」

「はい、大丈夫です。」

セブンは立ち上がると、ドラゴリーのほうへ向かおうとする。それを止める上海人形。

「ダメ、イッチャダメ」

「上海さん。私は、やるべき事に気がつきました。それは、人の命を、この命を懸けて守る事。そう、僕のオリジナルのウルトラセブンのように。それに、このままではアリスさん達がピンチなんだ。」

セブンは体内の光の力をすべて使い、巨大化した。ウルトラセブンとして。

いきなり現れた巨人。それに目を丸くする霊夢。そして、本物のウルトラセブンを見



れた嬉しさに目を輝かせている早苗、そして、セブンを心配そうに見つめるアリス。

「皆さん、セブンです。ウルトラセブンが来てくれたんです！」

「ウルトラセブン？何よそれ。」

「M78星雲からやってきた光の巨人。かつて地球を守り続けた正義のヒーロー。それがウルトラセブンです。」

「へえ、じゃあ、異変解決に協力してもらいましょうか。」

セブンは、ドラゴリーの顔を殴りつける、何度も何度も殴りつける。そして、偽エメリウム光線の発射態勢に入り、光線はドラゴリーの腹部に直撃、爆発を引き起こす。

少女達も、弱点と思われる部分、つまり顔や関節部を攻撃し、隙を作る。

ここまですれば、通常の怪獣なら倒れていた可能性はある。だが、相手は怪獣を超えた存在、超獣なのだ。ドラゴリーは炎を吐き少女達を追い払うと、セブンの腕に掴みかかり、おそるべき怪力で腕を引きちぎろうとする。それに苦しむセブン。少女達の援護があり、何とか手を外す。だが、ドラゴリーの猛攻は止まらず、大きく吹き飛ばされる。そして気がつくとき、ビームランプが点滅を始めていた。早く倒さなければ、人里は大惨事になる。

だが、もはやセブンに戦う力は残っていないかった。万事休すかと誰もが思った時、セブンの精神世界に声が響く。

「諦めるんじゃない。お前は、俺と同じウルトラセブンなのだろう！」

「あ、あなたは？」

「超獣は強い。命をかけて戦わねばならん。だが、今の君には難しい。」

「……」

「我らも君のいる世界に行きたいが問題があつて行けない。だから、君にこの力を託す。」

「これは？」

「ウルトラアイだ。それを目に装着するんだ。」

「はい……デユア！」

「頼んだぞ、幻想郷のセブンよ。」

ドラゴリーが今にもセブンの体を八つ裂きにしようとした時、セブンの体が光り、ドラゴリーを吹きとばす。

そして、ビームランプから緑色の光線、エメリウム光線が放たれ、顔を半分吹き飛ばす。さらに、腕をL字に構え必殺のワイドショットが決まり、ドラゴリーは大爆発を引き起こす。

ドラゴリーの絶命を確認したセブンは光となり、人の姿に戻る

「勝った……の？」

「凄い、凄いです！生でウルトラセブンの雄姿が見られるなんて。」

「たしかに圧倒的だったわね。……そう言えばアリスは？」

アリスはセブンの元に駆け寄る

「セブン。」

「すみませんアリスさん。ご迷惑をおかけしました。」

「いいのよ。結果人里はあなたが守ったようなもんだし。」

上海は、セブンに抱きついた。

「セブン、モトニモドツタ。ヨカッタヨウ……」

「上海さん……」

なにやら、いい雰囲気か漂ってきている。もしかしたら、上海は自律人形へ一歩進化したのではないだろうか。

「さて、今日は少し贅沢な夕飯にしましょう。」

「そうですね。」

こうしてマイナスエネルギーと人形から生まれた闇の巨人は、たった一体の人形力で光になる事が出来た。だが、彼は幻想郷唯一のウルトラマンとして、身を削って戦う事となるが、それはまた、別の機会に話そう。

異次元、そこは赤紫にゆがんだ不気味な世界。そこで様々な黒装束が集まっていた。

「ドラゴリーがやられたか。バキシムよ。」

「は、申し訳ない。妄想セブンが思いのほか強敵で……」

「だまれ！ ザンボラーによる幻想郷灼熱作戦、ゾンバイユによる冥界の壊滅作戦、そして今回の妄想ウルトラセブンによる人里の破壊まで失敗するとは……無能は要らぬ。消えろ。」

「ぐ、も、申し訳ありませんでした。」

「ここ幻想郷を前線基地にするのに裂ける時間は長くない。皆の物。早急に作戦を実行するのだ。」

「ははー！」

こうして、侵略者たちは新たな牙をといでいる。幻想郷の住民は、この悪にどう対抗していくのか……

## 人里お茶騒動

皆さんはお茶は好きだろうか。紅茶、中国茶、緑茶と無数に種類があるお茶だが、特に日本人が好むのは緑茶だろう。これは妖怪達だつて同じだ。魔女や吸血鬼は除くとして、彼らも喉を潤したいときには水以外なら緑茶を飲む。これは、そんなお茶好きな人々が利用されたある騒動の物語である。

幻想郷に人間が追う税金でいる所はどこかと聞かれたら、迷いなく人里と誰もが答えるだろう。人里は確かに幻想郷最大の街だが、規模はそれほどでもない。なので、何かを商っている店は古くから続く老舗のみとなっている。幻想郷にとあるニユースが流れた。お茶を扱っていた店が、外来人にその店を継がせるといふのだ。幻想郷の老舗を外来人に継がせるといふのは前代未聞の珍事だ。

幻想郷に入ってくる外来人の種類は三つある。一つは凶悪犯罪者などの死んでも誰も困らない人間、一つは自殺をしようとしていた人間、そして運悪く足を踏み入れてしまった人間の三種類である。一つ目の人間は幻想郷に迷い込んだら大抵すぐに殺され、妖怪の糧となる。三つ目の人間は運が良ければすぐに八雲紫や博麗霊夢の手によって

幻想郷とおさらばできる。まあ、運が悪ければ妖怪の餌になるが。だが、二つ目の自殺をしようとした人間はどうだろうか。自殺の原因は様々な物がある。借金で首が回らなくなったような自業自得な者からいじめ等で自殺しなければならないほど追いつめられてしまった者まで様々だ。そんな人間は勿論餌になってしまう者が多いが、外での生活に嫌気がさしたり居場所がなかったりで外に帰るといふ選択肢を取らない者たちがいる。そんな者たちのために作られた長屋がある。通称外来人長屋だ。そこには外に帰らなかつた人間や外に帰るまでしばらく滞在しなければならぬ人間が住んでいて、自殺志願者だつた人間達はそこで、人里の役に立ちながら人生の再起を図っている。

鈴木隼人もそんな外来人の内の一人だつた。彼は外の世界でお茶を販売していたが、友だつた人間の連帯保証人となり、裏切られ莫大な借金を背負い、自殺を選んだのだが、運がいいのか悪いのか、ここ幻想郷に迷い込んだのだ。そして妖怪との追いかけっこや霊夢との出会いなどと色々あつて最終的に外来人長屋の住人となつたのだ。そして、お茶を扱う店の手伝いとして働いていたのだが、その一人娘に惚れられ、トントン拍子で店を任されたのだ。元々人柄のよかつた彼は、すぐにとはいかなかつたがだんだんと若旦那として人里になじんでいった。すべてが順調だつた。それは、恐ろしいほどに。

人里に妖怪の山から二人の男が降りてきた。大田と木村、彼らは元M A Cの技術班出身で、M A Cステーションの生き残りだ。そんな彼らは木更津から頼まれ、道具屋と交

渉しに来たのだ。

「しかし木更津主任はすごいよな。まさかマツキーを生産しようだなんて。」

「ああ。でも俺は難しいと思うな。正直言ってここの技術レベルじゃ、科学特捜隊のジェットビートル以前の機体すら生産できそうにないぜ。」

「ああ。レアメタルやエンジンの問題もあるしな……だけど、そんな事言えないよな。」

そんなことを言っていると、銃声が聞こえる。二人は一瞬顔を見合わせると、大急ぎでその音の鳴った方へと向かう。

そこでは旧式の猟銃を持った男が暴れていた。その男は猟銃を乱射していて、里の人々は混乱している。二人はM A Cガンを抜き、男の猟銃を狙い撃つ。弾は命中し、猟銃は男の手から離れる。そして暴れる男を二人がかりで取り押さえようとしたが、大暴れしてなかなか落ち着かない。結局里の男達も参加し取り押さえると、ふつと男の力が抜け、倒れた。

「ふう、一体なんだってんだ。」

「とにかく、けが人はいないか確認しないと。」

二人は周囲を確認したが、物が壊れた以上の被害は出ていないようだ。後は自警団に頼んで、さっさとお使いを済ませようとしていると、再び騒ぎが起こる。今度は女性が

大暴れして人に嘯みつこうとしていた。

「今日取り押さえた人間は四人。全員暴れていた時の記憶は無い、か。」

「はい。全員お茶を飲んで一息入れた後の記憶がないらしいです。」

滝裏の秘密基地。そこで二人は木更津に今日起こったことを説明した。

「何が起こったんでしょう。人が意味もなく暴れるなんて。」

「うむ、何か、侵略者の臭いがあるな。一応、霊夢さんに話してみるか。」

次の日、木更津は博麗神社へ向かった。到着してみると、奥の方で何かが壊れる音と叫ぶ声が聞こえた。

木更津は急ぎ奥に向かう。すると、霊夢が暴れており、それを必死で角の生えた少女が取り押さえていた。

「霊夢、一体どうしちゃったの!？」

「ああああああああああああああ!!」

これはいけないと木更津は霊夢の首を狙い、手刀をふるう。

「ぐぎや……」

霊夢は気絶し、大人しくなる。部屋の中は嵐が起ったかの如くボロボロだ。

「いや、助かったよ人間。で、あんたは誰?」



「私かい、私は木更津。君は……もしかして鬼かい？」

「その通り、私は鬼の萃香だよ。でも、霊夢はいつたいどうして……」

「ふむ……」

木更津は、割れた急須と湯呑を見る。

「もしかして、霊夢さんはお茶を飲まなかったかい？」

「え？ たしかに、縁側でお茶を飲んで一息ついてたけれど、それがどうかしたの？」

「お茶、か。」

たしか人里で暴れていた人間達もお茶を飲んだと言っていた。お茶に何かあるのか？

木更津は、急須の欠片をサンプルに持ち帰った。そして基地の機器で無事だった高性能成分分析機にかける。すると、驚くべき結果が出た。

「これは……」

「主任、どうかされたんですか。」

「ああ、実はな……」

そう言いかけた時、大田がお茶を飲もうとした。

「飲むな！ 大田。」

「え、あ、わ！」

大田はいきなりの大声にお茶をこぼす。

「一体なんですか主任。」

「実はな、今お茶の分析結果が出たんだ。それで分かったんだが、どうやらこのお茶には宇宙ケシの实の成分が入っているんだ。」

「宇宙ケシ?」

「ああ。一昔前、煙草の中にその宇宙ケシの实が入っていてな、人を凶暴化させたのだ。」  
「じゃあ今回の人の凶暴化の原因は……」

「十中八九、お茶によるものだ。」

「じゃあ大変だ! お茶を飲まない日なんてないですよ。」

「ああ。だが、被害は意外に小さい。どうやら、特定のお茶にのみ入っているらしい。俺は霊夢さんと共にお茶屋へ行く。大田、お前は永遠亭へ行って永琳聖戦を呼んで来い。他の三人は鎮静剤を持って先に人里へ行け!」

「了解!」

木更津は再び博麗神社へと向かう。着くと、一人の女性も来ていた。誰だろうか。奥へ行くと、布団に入った霊夢がいた。声をかけると、よろりと起き上がった。

「木更津さん。さっきは恥ずかしい所を見せちゃったわね。」

「いや、霊夢さんが悪いんじゃない。お茶が悪いんだ。」

お茶、その言葉に女性は肩を震わす。木更津は、お茶についての話を霊夢にした。

「へえ、じゃあその宇宙ケシつてのがお茶に入っていたのね……舐められたものだわ。」

霊夢は心底悔しそうだ。まあ、異変解決のプロフェッショナルが今回の異変の首謀者の思う通りの行動をしてしまったのだ。無理もない。

「で、そつちのあんたは誰？」

「あ、わ、私は、その……」

女性は言いにくそうに口ごもっていたが、意を決したように口を開く。

「私は人里の茶問屋の娘です。」

「茶問屋の娘？」

「はい、今回は、私どものお茶のせいでご迷惑をおかけしました。」

「で、その茶問屋の娘が何の用。」

霊夢はかなり機嫌悪く言い放つ。

「はい、実は、私の夫が何か悪いものに取りつかれているようなのです。」

茶問屋の娘話は次のようなものだった。

最近、夫の様子がおかしい。昼間は何か上の空で、夜も寝ずに何かをしている。夜中偶然目覚めて、夫の部屋を見ると、夫が恐ろしい、狂った目で何かを粉末にし、お茶っ葉に混ぜ込んでいたのだ。その行為を止めたかったが、その時の夫の目が恐ろし

く、何もできなかった。きつと悪い何かに取りつかれたに間違いない。なので、着き物を落としてもらおうとここまで来た。

「なるほど、たしか茶問屋の若旦那って言えば、外来人だったわね。もしかしたら、本性を現しただけじゃないの？」

「違います！彼は優しく、とてもお茶に毒を仕込むような人間ではありません。」

「ふうむ……その何かが宇宙ケシであることには間違いない。だが、あなたの夫もまた誰かに操られているな。」

「ま、行ってみない事には始まらないわね。」

霊夢は立ち上がり、お祓い棒を持って外に出る。

「もう大丈夫なのかい？」

「ええ。私をコケにしてくれた奴をコテンパンにしないと気が済まないのよ。」

「そうか。じゃあ行こうか。」

そして木更津と霊夢は人里へと向かう。人里につく寸前、二人は驚愕した。人里で火の手が上がっていたのだ。急いで人里に入ると、多くの住人が暴れまわっていた。

「これは……！どうやら、急がないといけないな」

「ええ！」

二人は急ぎお茶問屋に入る。そこでは、ぼうつと虚空を見上げる鈴木隼人がいた。

「あなたね、今回の異変の主犯は！」

「霊夢さん、厳密には違う。犯人は彼に憑いているやつだ。正体を現せ、メトロン星人！」

メトロン星人、その言葉を聞くと、鈴木は不気味に笑う。

「ふふふ……まさか、我らの事を知っている者がいるとはな。」

「メトロン星人？」

「ああ。こいつは怪獣でも妖怪でもない。別の星から来た侵略者なんだ。メトロン星人、なぜこんな真似をする。」

「実験さ。」

「実験だと！」

「そう。宇宙ケシの実が人を狂わすのは前任者の実験で十分なデータが取れた。私はそれを、君達が一般に飲む飲料に混ぜてみたのさ。名付けて目兎龍茶作戦だ。どうだ、面白いだらう？」

「ふざけないで！」

霊夢が札を出そうとしたが、鈴木は不気味に笑ったままだ。

「おっと、この体はただの人間の物だ。傷つけていいのかね？」

「ええ。」

「え？」

霊夢は、札を鈴木に叩きつけた。

「ぐあ！貴様、この体は人間だぞ。なぜ攻撃できる！」

「弾幕用の札に殺傷能力は無いわ。さあ、あなたがその体から出ていくまでぶつけるわよ。」

「くっ……なんて野蛮なんだ。仕方ない。」

がくりと鈴木が倒れる。どうやら、メトロン星人が出ていったようだ。

「霊夢さん……荒療治ですね。」

「ふん。異変の首謀者にかける情けは無いわ。」

「主任！」

「おお、大田か。」

「永琳先生たち、呼んできましたよ。」

「よし、後はメトロン星人の……」

その時であった、空が軋む音が三人に聞こえた。

「……まさか。」

三人が外に出ると、サクランボ型のメトロン星人の宇宙船が空の割れ目に入って行くうとしていた。

「くそ、あのままでは逃がしてしまう！」

「でも、さすがにMACガンでは宇宙船は落とせませんよ。」

「くそ、マッキーが完成していたら……！」

その時であった。空の割れ目を覆うように、裂け目ができた。

「あれは？」

「まったく、遅いわよ、紫。」

その裂け目から無数のレーザーや弾幕が宇宙船に降り注ぎ、火を吹いて墜落していく。さらに墜落する先に隙間が現れ、宇宙船を飲みこんだ。

「何が起こったんだ……！」

「わ、わかりません。」

「これが妖怪の大賢者、八雲紫の力よ。」

木更津と大田は驚いていた。妖怪の力の強さに。そして、目の前にも隙間が現れ、金髪の妖艶な女性が現れた。

「初めまして、ですわね。木更津さん。」

「あ、あなたが八雲、紫さん……！」

「この間のザンボラーとの戦いでのご協力の感謝をしていませんでしたね。」

「い、いえ。MACの人間として当然のことをしたまでです。」

「ですが、あなたの協力がなければ幻想郷は滅んでいた。そして今回も。」  
「はあ。」

「そのお礼に私の家に招待したいのですが、いかがでしょう。」

「よ、喜んで。」

「では、また……」

「待つてくださいい！」

紫が隙間に消える前に木更津は声をかける。

「我々が消えて外の世界は、地球はどうなったのですか！」

「……」

少し間が空き、紫は振り返る。

「ご心配なく。立派にウルトラマンレオが守り抜きましたよ。」

「ほんとですか！よかったです……」

「詳しい話は、東風谷早苗が知っていますよ。では。」

そして、八雲紫は隙間に消えていく。木更津はホツとしていた。自分達がいなくなっても、レオは立派に戦いぬいたのかと。

「主任。よかったですね。」

「ああ。さて、めちやめちやになった人里の復旧に力を貸さねばな。行くぞ、大田。」



「はい！」

こうしてお茶による幻想郷侵略は失敗に終わった。皆さんもお茶にご注意を。もしかしたら私達が信頼し合うのを邪魔するためにお茶に何か仕込む侵略者がいないとも限りませんから。

## 咲夜の過去・父との再会

時間。それは一方通行に流れる川のようなもの。その流れは止まる事も、遡る事もできない……普通は、だが。これは時間の物語。時間を止める事の出来る少女は、自身の過去に何を見る。

紅い悪魔、レミリア・スカーレットが住む館、紅魔館。その従者である十六夜咲夜は目の前で立ったまま昼寝をするという器用なまねをしている紅魔館の門番、紅美鈴を見て頭を抱えていた。まあ、こんな事していても敵が来ればちゃんとしてくれるし、仕事を放棄しているわけではないのだが。逆を言えば敵意がなければ素通りできると言う事だし、紅魔館の門番がこれでは、紅魔館全体が弛んでいると思われ、評判も下がってしまうかもしれない。

とにかく起こそうと思い、ナイフを投げる。その殺気を察知したのか美鈴は眼を覚まし、寸での所でナイフを避ける。ナイフは門の隣の壁に突き刺さる。

「わ……酷いじゃないですか咲夜さん。私だつてナイフが刺さつたら痛いんですよ。」  
「黙りなさい。全く。いつもいつも昼寝をして、あなたがそんなのでは紅魔館の評判に傷がつくのよ。」

「ははは、すいません。でも、もうすぐ春なんですから、少しぐらい……」  
「何か言つたかしら。」

「い、いえ！」

咲夜は軽いため息をつき、紅魔館へと戻る。美鈴は気を取り直して門の前に立ち続ける。このやり取りは週に2〜3回は行われる。よく飽きずに昼寝をすると思うが、美鈴もちゃんと考えて昼寝をしているのだろう……多分。

咲夜の仕事に休みは無い。主人のわがまま、使えないメイド妖精。咲夜がいないと中々紅魔館は動かない。だが、空き時間を見つけて休憩をとるのも一流のメイドの務めだ。時間を止めて休めばいいと思われるかもしれないが、毎回時間を止めていると自分の体内時計が外の時間とずれてしまうので、休む時には使わない。使うのは、敵が来たときや忙しい時のみだ。今日も仕事の合間に一息つく。そして、自分の持っている時計を見つめる。この時計、自分が持つ唯一の、自分が十六夜咲夜となる前の物だ。自分の血筋に伝わってきた時計らしいが、今の自分は十六夜咲夜。そんな物は関係ない。だが、この時計を眺めていると、捨てきれなかった思い出、ただの少女だった頃の思い出が蘇ってくる。そういうば、今日は……

そんなことを考えている時だった。何かガラスが割れるような音が聞こえ、次いで地響きが響く。急いで外を見るとそこには、自分の悪夢がいた。

美鈴は驚愕した。いきなり空が割れたと思つたら、中から青いナメクジの化け物が出てきたのだ。しかも特大の。これが新聞に載つていた怪獣とかいう奴だろうか。とにかく、こんなのが紅魔館に入つてきたらたまらない。美鈴はそんなに弾幕勝負は強くない。だが、格闘戦ならば普通の妖怪の中では強い方だ。美鈴は拳法の構えをとり、そのナメクジに飛びかかろうとした。だが、それより先に何かが自分の横を飛んで行つた。「ああああああああああああ!!」

それは、叫びながら鬼のような形相でナイフを振るう咲夜だった。咲夜はいつもの瀟洒な雰囲気捨て、暴れるようにナイフを投げつけている。美鈴はそれを見て一瞬あざんとしたが、すぐに気を引き締め、咲夜を捕まえようとしている触手を自慢の拳で吹き飛ばす。

「咲夜さん、冷静になつてください。」

「美鈴、邪魔しないで!こいつは……こいつは!」

「咲夜さん!」

美鈴の言葉は怒りに身を任せている咲夜には届かない。すると二人の耳に、聞いた事のない音が聞こえる。そして空間が歪み、この時間から二人と化け物は消えた。

この化け物こそ、かつてアンヘル星を始めとした数々の星の時間をめちやくちやにして滅ぼしてきた怪獣、時間怪獣クロノームである。

どれほどの時間気絶していただろうか。どこだかわからないが森の中で美鈴は目を覚ました。

「おねーさん。おねーさん。」

「う、うう……ここは？」

起き上がると、隣には銀髪の少女がいた。

「おねーさん。大丈夫？」

「え、うん。大丈夫だよ。ほら。」

美鈴は立ち上がると、空中で一回転して見せた。

「おお、すごい！」

「ははは。ところでお嬢ちゃん、ここはどこかな？」

「ここ？ここは私のお家だよ。」

「お嬢ちゃんのこと？」

「うん。」

美鈴が周りを見渡してみると、道の遠くに屋敷が見えた。紅魔館では無い。だが、幻想郷に紅魔館以外の洋館なんてほぼない。どういう事だろうかと考えていると、少女が話しかけてきた。

「おねーさん。どうかしたの？」

「え、いや、何でもないよ。ところで、私の他にあなたと同じ髪の色をしたお姉さんはいなかった？」

「いなかったよ。」

どうやら、咲夜は別の場所にいるらしい。さっきのあの剣幕。あれはなんだったのだろう。

「おねーさん。おねーさんのお名前は？」

「え？ああ。自己紹介しなくっちゃね。私は紅美鈴。」

「ほんみりん？」

「ほ・ん・め・い・り・ん！あなたは？」

「私？私は〇〇、〇〇××だよ。」

××ちゃんか。いい名前だね。」

「美鈴さん。一緒に遊びましょ。」

「え、いや、その……」

困った。自分は咲夜を探さなければならぬのに。だが、目の前の少女の頼みを聞かないのも後味が悪い。まあ、咲夜も子供じやないんだから少しくらい大丈夫だよ。そう思い、少女と遊ぶことにした。

「わかった。何して遊ぶ？」

「えつとね、鬼ごっこ！」

「じゃあ、まずは私が鬼をやるね。」

「うん。十数えてね。」

こうして、美鈴と少女は遊びに夢中になり、結局夕方になるまで遊んでしまった。

咲夜が目を覚めたのはどこかの屋敷の前だった。その屋敷を見て、咲夜は眼を見開く。

「わたしの……家。」

そう、その屋敷は咲夜の実家であった。咲夜は、震える手で扉を開き、内部へと入る。同じだ。飾ってある壺の配置からシャンデリアの形、階段の飾りに至るまですべて記憶の底に封印していた物と同じだった。

「どうして……何が、どうなっているの？」

この屋敷が今、建っているわけがない。この屋敷は、あの悪夢の日に崩れ落ちたのだから。それこそ、時間を逆行しなければ。

「まさか私は、過去の世界にいると言うの？」

あり得ない。自分の能力でも過去に飛ぶことはできないのに、過去に来る事ができるなんて。だが、過去に来たとしか考えられない。それか、これが夢か。そうだ、夢に違

いない。

「そうだ。」

——どうせ夢なら、何をしてもいいよね。

咲夜は階段を上り、ある人物に会いに行った。

美鈴と少女は3時間ぶっ続けで追いかけっこをした。よく飽きないものだ。

「あー疲れた。」

「いやー夕方まで遊んじやったね。」

「もう、美鈴さんったら足早すぎよ。」

「はは、普通の鍛え方はしてないからね。さて……Xちゃん。」

「なあに？」

「もうそろそろお家に帰る時間じゃない？」

「あ、そうだね。美鈴おねーさん。一緒にいこ。」

「え、でも……」

「一緒にご飯食べよ。私、お父様以外にご飯食べた事がないんだ。」

「そう……わかった。でも、ご飯を食べたらわたしは帰るよ。」

「うん！」



美鈴は断れなかった。少女が見せた僅かな悲しみの表情を見ると、でもこの少女、どこかで会った気がするのはなぜだろう。

咲夜はとある扉の前に来ていた。その扉に書かれている名前を愛おしそうに撫でる。そして、意を決して開けた。

中には一人の銀髪の男が窓から外を見ていた。その男は扉が開いた音に驚き、咲夜を見た。

「……？誰だね、君は。」

「私は……私は……！」

咲夜は言葉が出なかった。何年も流していなかった涙が止めどなくあふれてくる。

「私は、〇〇××です。お父様！」

「なに？」

そう、この男こそ咲夜の父であった。咲夜の心の中には様々な気持ちが渦巻いていた。

「……証拠は。」

「？」

「君が私の娘、〇〇××であるという証拠だよ。それを見せてみたまえ。」

「……」

咲夜は無言で懐中時計を取り出す。それを見て、咲夜の父の目が見開かれる。

「それは……！」

咲夜の父はデスクに向かい、懐中時計を机から取り出した。それは、咲夜の物とまったく同じものであった。

「そうか……俺はこの時計を娘に渡したのだな。」

「お父様……じゃあ。」

「ああ、認めよう。お前は私の娘だ。」

「お父様……お父様！」

咲夜は父に抱きつく。そして父親も抱き返す。一体何年ぶりの感覚だろう。この父の筋肉の感触、臭い、全て、あの日に捨ててきた物だ。そして、父親は疑問を言う。

「X。どうやらお前は時間を逆行してきたらしいな。」

「はい……でも、どうしてかわからないの。」

「そうか。お前の能力では無いのだな。」

「……！お父様、私の能力を知っていたのですか？」

「ああ。お前の能力を知れば世間の科学者にモルモットのように扱われると思ってな、その能力を伝えなかったのだ。そして……」

そこで父は言葉を切る。そして意を決したように話し始めた。自分の罪を。

「×。お前には謝らなければならぬ事がある。」

「×。なんですか？」

「×。お前は地球人ではない。月人なのだ。」

その言葉で咲夜は殴られたかのような衝撃を受けた。自分が、人間ではない？

「×。どういう事なの？」

「ああ。私はな、かつて月の都がヤプールという悪魔に滅ぼされたときに地球に逃げて来たんだ。そして地上でお前の母親と出会い、お前が生まれたのだ」

「×……」

「いつかは伝えなければと思っていたのだ。だが、どうやら私はこれを伝える前に死んでしまったらしいな。」

「×……」

「すまん。お前にこんな秘密を明かさぬまま死んだ私を許してくれ！」

「×……」

咲夜は、頭を下げる父の頭を両手で優しく包んだ。

「許すも何も、私は何も恨んではいませんよ。」

「×。×。」

その言葉に咲夜は首を振る。

「今の私は十六夜咲夜という名前です。でも、よかった。例え夢でも、お父様にもう一度出会えたのだから。」

「……×。すまない。」

そこで咲夜は思い出した。今日は、何月何日だ？

「お父様、今日は何月何日ですか？」

「今日？今日は○月○日だが……」

○月○日！それはあの悪夢の日ではないか。咲夜は急いで父にこの屋敷から避難する超に言おうとした。だが……

「ん？何だこの音は……海鳴り？こんな内陸で……」

そして、地響きと共にクロノームが姿を現した。

美鈴は外からクロノームの出現を見ていた。

「あれは……！」

「なに？あの化け物……」

「×ちゃん、ここを動いちゃだめよ。」

「え、美鈴おねーさんは？」

「私はすぐにあの化け物を倒してくるから。」

「え、そんなの無理だよ。」

「無理じゃないよ。大丈夫、私は強いから。」

そう言つて、<sup>×</sup><sup>×</sup>の制止を振りきりクロノームへと向かう。あの化け物を倒せば元の場所に戻るかもしれない。クロノームも美鈴に気づき、触手を伸ばして迎撃してくる。それに対し弾幕を張り触手をそらす、そして角のような部分に飛び蹴りをくらわす。そして一旦距離を置き、弾幕を繰り出す。

〔華符「セラギネラ9」〕

美鈴の周りから無数の弾幕が放たれ、クロノームは後ずさりする。さらに、美鈴は体のでばったところをつかみ、全力でへし折る。クロノームは叫び声を上げ、光弾を放つてくる。だが、弾幕勝負になれた美鈴に当たるわけがない。戦いは美鈴が優勢に見るが、決定打がない。クロノームはちよこまか動く美鈴の事を無視して、屋敷を破壊しようとしていた。

屋敷の内部では咲夜が必死になって父親を脱出させようとしていた。

「お父様、急いでここから逃げてください。」

「……いや。やめておこう。」

「な、何ですか。」

「×、君の様子では、私は今日死ぬようだね。」

「……！そ、そうです。」

「ならばそれに逆らってはいけない。私が生き残れば、時間が変わってしまう。そんなれば君のいた未来も消えてしまう。お前は、新しい家族を見つけたのだろうか？」

そう言われ、十六夜咲夜としての家族の姿が思い浮かんできた。スカーレット姉妹、パチュリィ、小悪魔、紅美鈴……

「さあ、お前はお前の時間を生きろ。×……いや、十六夜咲夜。」

「……はい。」

「そうだ、最後に頼みがある。この懐中時計をこの時代の××に渡してくれないか？そしてこう言ってくれ。生きろ、何が何でも生き続けるのだ。生き続ければ必ず何かが見つめると。」

「はい、必ず！」

「さあ行くのだ。お前のいた時間に！」

「……はい！」

そして咲夜は屋敷を出る。その時、クロノームの攻撃が屋敷に当たり、崩れていく。

「お父様……あなたの仇は必ず討ちます。」

そして咲夜もクロノームへと向かっていった。

美鈴は蹴りや正拳突き、たまに弾幕を放って攻撃するが、クロノームに対して決定的なダメージが与えられない。すると、後ろからナイフが飛んできて、クロノームに突き刺さる。

「咲夜さん！」

「ごめん。遅くなったわ。」

「まともに戻ったのですね。よかった……」

「さあ、あの化け物を殺すわよ。」

「でも、私達の攻撃では火力が……」

「美鈴、あなたの持てる最大の技を使いなさい。」

「え？」

「魔理沙が言ってたわ。一人では無理でも、二人なら何とかなるってね。」

「あの泥棒魔法使いもたまにはいい事言いますね。じゃあ、行きますよ！ 気符「猛虎内頸」」

美鈴の体に光が集まる。そして……

「華符「彩光蓮華掌」」

クロノームの頭部に拳を打ち込む。すると、そこに気が集まり、大爆発した。そして

そこに、咲夜が無数のナイフを打ち込み、爆発によって外に見えるようになった脳は針千本のようになった。

幾ら生命力がバカに高い怪獣でも、脳みそを攻撃されればまず間違いない行動不能となる。

咲夜たちの勝利である。気づくと、体が少しずつ消えていく。完全に消える前に、父との約束を果たさなければ。

完全に崩れた館の前に、少女は茫然としていた。

「あ、ああああ、ああああああ……」

「××ちゃん。」

「あ、美鈴おねーちゃん……おねーちゃん！」

少女は美鈴に抱きつき、泣いた。喉が枯れ、涙が枯れ果てても叫び続けた。そして、何とか落ち着いていた。

「××ちゃんね。」

「あ、あなたは？」

「私は十六夜咲夜。お父様から預かりものですよ。」

咲夜は、懐中時計を少女に手渡した。

「××ちゃん。強く生きなさい。何が何でも生きるのよ。そうすればきっと何かをつかめ



るから。それが、お父様の願い。」

「……」

「あ、そうだ。」

美鈴は何か思い出したかのように帽子を脱ぎ、少女に渡す。

「これ、貸してあげるわ。」

「これは？」

「私の帽子。いつか私に会えたら返してね。」

「ま、待って、待ってよ！」

そして、二人の姿はこの時代から消えた。

「う、うくん。」

「美鈴、起きなさい。」

咲夜はナイフで起こそうとする。

「ぎゃー！ さ、咲夜さん。それに紅魔館。帰ってきたんですね。」

「ええ。あ、そうだ。少し待ってて。」

咲夜は時間を止め自分の部屋に行き、あるものを取り出す。そして美鈴の前に持って行った。

「はい。」

「え、こ、これって。」

それは、美鈴が少女に与えた帽子であつた。

「ありがとうね、美鈴おねーちゃん。」

「え、じゃあの子が咲夜さん？」

「さあ、仕事仕事よ。」

「ちよつと待つてくださいよ。咲夜さーん。」

こうして彼女達は時間に迷うことなく元の世界に戻つてくれた。この日から、咲夜的美鈴に対する昼寝の起こし方は気持ち優しくなつたらしい。

# 子の心、親の心

冬だと言うのにまるで真夏の様な深夜の人里。その道を歩く一人の男がいた。

「~~~~~♪」

その男はただの人間だった。やっと一日の仕事が終わり、鼻歌を歌いながら家に帰れば苦勞して手に入れた妻と娘が待っている。そう言う普通の男だった。

「~~~~~♪」

だからこそこの男に起こった事は理不尽だろう。悲劇だろう。

「……う？あんた、だ」

ジュパ!!

ただ言える事は、この男は底なしに不幸だったということだ。

次の日、道端で肩から腰にかけて斜めに真つ二つになった死体が発見された。

さて、これから始まるのは親子の物語。いがみ合い、分かりあおうとしない二人が和解できるだろうか、それをこれから語ろう。

人里。普段は人が道を行き賑わうこの場所であるが、今はしんと静まり返っていた。無理もない。ここ数日葬式が立て続けに行われているのだ。

そして、人が集まれば、ここ数日起こっている連続通り魔事件の話で持ちきりとなる。「これで何人目だ。」

「ああ。△△さんも可哀そうに。奥さんと娘さんを残して殺されちゃうなんて。」

「まったく、人里はどうなっちまったんだ！」

「知ってるか。死体の断面はどんな刃物でもあんなにすっぱり行けないそうだ。」

「どうせ妖怪の仕業だろう……」

そんな話を聞きながら、道具屋香霖堂の主、森近霖之助は人里一番の大きさを誇る霧雨道具屋に来ていた。

「ごめんください。」

「いらつしやい……ああ、霖之助さん。」

「やあ杉さん。親父さんはいるかい。」

「ああいるよ。さあ、上がって上がって。」

霖之助は杉という老人に連れられ、奥へ行く。奥の部屋では難しい顔をして壺とにらみ合う老けた男がいた。

「先生。霖之助さんが来ましたよ。」

「……む、霖之助。よく来たな。まあ座れ。マチ！霖之助が来たぞ。茶を用意してやれ」

「親父さん。お構いなく。ちよと用事があるだけでして。」

霖之助は座布団に座る。すると間をおかず初老の女性がお茶を持ってきた。「ありがとう。マチさん。」

「いえいえ。それにしても珍しい。霖之助さんが来るなんて。」

「いえ、実は魔理沙の事でお話が……」

魔理沙、その言葉を聞き、先生と呼ばれた男の顔色が変わり、忌々しげな表情になる。

「その名を私の前で言うな。気分が悪くなる。」

「親父さん。」

「あの娘のことなら話は聞かんど。霖之助。」

「魔理沙が大怪我したとしてもですか。」

「……!」

その言葉に杉とマチの表情が変わる。

「霖之助さん。それは本当ですか!お嬢が大けがをしたなんて!」

「ええ。明日の新聞に載るかと思いますが、異変の解決に乗り出して解決と引き換えに大やけどと骨折をしたと聞きました。」

「先生、どうしましょう。お嬢様が大けがを……」

「ふん、下らん。」

「先生!」

「話はそれだけか。霖之助。あの娘とは縁を切ったのだ。怪我をしようとのたれ死のうと関係ない。」

忌々しげな表情を変えず、そう言い放つ霧雨。

「先生！それはあんまりじゃないですか。」

「ふん。話が終わったのなら帰れ。今、壺の鑑定で忙しいのだ。」

杉が諫めようとするが、そんな物を歯牙にもかけない霧雨。その様子に軽くため息を吐き、霖之助は懐に手を入れる。

「ハア……もうひとつ用はあります。これを。」

そう言つて懐から、小型の銃の様な者を取り出した

「何だそれは。」

「さあ。たぶん銃でしょう。」

その言葉にあきれ顔となる霧雨。

「全く。またお前の収集癖が出たか。お前の能力があれば使い方くらいわかるのだろう。」

「ええ。これの使い方は至つてシンプルで、引き金を引くだけです。威力はここでは試せませんが、少なくとも岩や木などを紙きれのように飛ばす程度はあります。これを護身用にしてもらおうと思つて。」

「護身用だと？」

「ええ、近頃は物騒ですから。昨日も一人殺されたらしいじゃないですか。」

「ああ。痛ましい話だ。で、これを私に持てと。」

「はい。」

「……ふん。お前に心配されるとは、私も年をとったな。」

「親父さん。僕はあなたに死んでほしくない。だからこれを携帯してください。」

「……いいだろう。ありがたく貰っておく。」

霧雨は、霖之助から銃を受け取った。この銃こそ、かつて科学特捜隊の天才イデ隊員が開発した対怪獣用の新兵器、スパーク8である。

「では、僕はこれで……」

「さて、お前も気をつけ……いや、心配は無用か。」

「ええ。親父さんも知つての通り、自分の身を守るくらいには強いですから。では。」

そう言つて、霖之助は霧雨道具屋を後にする。霖之助が帰つた後、杉とマチが霧雨に詰めよつた。

「先生。あまりにもお嬢に冷たくはありませんか。」

「そうです。仮にも、血を分けた……」

「黙れ！」

その言葉に二人の言葉が止まる。

「出ていけ。私は今忙しいのだ。」

「先生……」

「出ていけと言うのが分からんか！」

その言葉に二人はしぶしぶといった感じで部屋を出ていく。

そして誰もいなくなった部屋。そこで霧雨は鑑定していた壺を置くと戸棚に歩み寄る。そして、一枚の写真を見た。

「マリー……」

その写真には、魔理沙によく似た、というより瓜二つの女性が写っていた。

部屋の外では、杉とマチが魔理沙の見舞いのための準備をしていた。魔理沙が好きだったまんじゅうを風呂敷に包み、早く怪我が良くなると言われているお守りを準備した。そしていざ出発という所で呼び止められる。

「おい、杉、マチ。」

「せ、先生」

二人は、魔理沙の見舞いへ行くことを怒られるかと思った。だが、霧雨は、壺を投げてよこす。



「これは偽物だ。捨てて来い。」  
「先生？」

その壺は少しは芸術に通じていれば一目でわかるほど美しく、見事な物だった。それを偽物呼ばわりするとは普段の霧雨からしてみればあり得ない。これはもしやと二人が考えていると、霧雨の怒声が響く。

「どうした、早く捨てて来い！」

「は、はい！」

そして二人は、永遠亭へと向かう。

永遠亭では、魔理沙と霊夢が暇そうにすごしていた。魔理沙は鈴仙に家から持ってきたもらった魔道書を眺め、霊夢は何をするでもなく、ただ魔理沙の横に座っていた。

「あく暇だぜ。」

「そうね。」

「まったく、幻想郷を救ったヒーローをもっとみんな崇めてもいいとも思うんだがな。」

「ヒーローは自分をヒーローと呼ばないものよ。でも入院って暇ねえ。」

暇と言いつつ、魔理沙は何度読んだかわからない魔道書のページをめくる。烏天狗も嵐のようにやってきて、嵐のように去って行った以降は来ないし、見舞客もなかなか来

ない、まあ、幻想郷の住人がザンボラーを魔理沙が倒し大けがをしながらも倒したというのを知るのは、烏天狗の新聞が発行される明日以降の話なのだから仕方がないのだが。

そういう言っていると、てゐがやってきた。

「魔理沙。面会だよ。」

「お、やっと魔理沙様を称える奴がき……た……」

魔理沙の言葉はそこで止まる。面会に来たのは魔理沙にとって懐かしい顔だった。

「お嬢！」

「お嬢様！」

「マチに杉じい！」

魔理沙は予想外の来訪者に驚愕していた。彼らとは、自分が家を飛び出して以来になる。

「この人たち誰よ。」

魔理沙にとつては重要人物でも。霊夢にとつては知らない人だ。霊夢は魔理沙に聞いた。

「あ、ああ。この二人は、私の、実家で世話になった人だけ。」

「ふうん。」

二人は、霊夢を見ると、嬉しそうに話しかけてきた。

「ああ、博麗の巫女様。巫女様がお嬢とご友人なのは新聞で知っていましたが、本当だと  
は。」

「別に友達なんかじゃ……」

「いえいえ、お嬢様の怪我の後ずっと付き添っていると聞きました。お嬢様は立派なご友人を持たれて……」

「マチ、杉じい、恥ずかしいからやめてくれ。」

「恥ずかしそうに魔理沙は顔を赤らめる。」

「さあ、お嬢様、お嬢様が好きだったまんじゅうです。」

「お、マチ。ありがとうな。」

「あ、それ人里で一番人気のまんじゅうじゃない。私にもよこさない。」

「あ、大きいの取ったな！」

「そう言いつつ、霊夢と魔理沙は競ってまんじゅうに手を伸ばす。そしてそれを微笑ま  
しそうにマチと杉は見る。」

「所で杉じい。その持つてるでかい立派な壺は何なんだ？」

「ああ、これは先生がお嬢にと……」

先生、その言葉を聞いた魔理沙は、甘いまんじゅうを口にしながらもまるで苦虫を囓んだかのような厳しい表情となる。

「……嘘だな。あの冷血漢が見舞い品なんて用意するはずないぜ。」

「お嬢。先生も心配しております。」

「それも嘘だ。あいつに人を心配するような立派な心がある筈ない。」

「お嬢、それは違います！先生はいつもお嬢の事を……」

「うるさい！」

そう魔理沙は怒鳴る。そして、それが足に響き、苦しむ。

「お、お嬢！お怪我が……」

「何ともない。それより、そんな物いらなげ。」

「あら、もつたいない。かなり立派な壺じゃなげ。」

「要るならやるよ、霊夢。仮にあいつからの見舞い品なら、一秒たりとも見たくないからな。」

「お嬢様！」

「マチ、杉じい。お見舞いは嬉しいよ。でも、私は家には帰らない。絶対に。まあ、あいつが土下座でもして見せれば考えなくもないぜ。」

「お嬢……」

「さあ、二人とも、見舞い品がこれだけなら帰ってくれ、今、あいつの話聞いて気が立ってるんだ。」

「お嬢様、言わせていただきます。店の者は皆お嬢様がお帰りになることを望んでいません。異変解決なんて危険な事などやめて、実家に……」

「黙れ！私がしたいからやっているんだ。それをどうこう言われたくない。仮に私が帰る時はあいつが死んだ時だ。帰れ、帰れよ！」

そう言われ、しよんぼりして二人は部屋を出ていく。その様子を、霊夢は呆れかえつた目で見ている。

「はあ。」

「魔理沙、いいの？あんな立派な壺。」

「だからやるって言ってるだろ。まさかお前まで。」

「別に興味ないわ。ただね……」

「ただ？」

「親が死ぬのを望んじやいけないわ。親のありがたさを死んでからわかるのは遅いのよ。」

「何だ、説教かよ。」

「別に、気にしなくてもいいわ。ただね、親が生きているだけありがたいものよ。」

「ふん。気分悪いぜ。」

それから数カ月が経った。やっと冬らしくなったと主思ったらもうすぐリリーホワイトが春を告げに来る季節である。魔理沙は退院し、少し不自由ながらも歩けるようになった。そして、アリスにもらった魔道書に書いてあった薬を作るため、家で怪しげな実験を行っていた。

そんな時だった。家の扉が激しくたたかれた。

「……？ 一体誰だ。」

ドアを上げると、行き切れをしている霖之助が立っていた。

「なんだ、香霖じゃないか。珍しいな。」

「魔理沙、落ち着いて聞いてくれ。」

「……なんだ、お前がそんなに慌てるなんて珍しい。」

「親父さんの事だ。」

「ああ、聞く気をなくしたぜ。帰ってくれ。」

魔理沙は扉を閉めようとする。だが、扉は霖之助によって掴まれている。

「魔理沙！」

「何だよ。まさかあいつが死んだわけじゃないだろう？」

「……何だよその嫌な間は。」

「魔理沙、昨日の夜、親父さんが通り魔に襲われた。今永遠亭で手術が行われている。」

昨晚のこと、霧雨は珍しい道具を買いに人里の長に会い、その帰り道だったという。最近の人里の夜は通り魔のせいで出歩く者などおらず、出歩くにしても護衛が必要だった。霧雨も例外ではなく、三人の屈強な男と共に帰り道を歩いていた。すると、道の向こうに怪しい影が立っていた。

それに気がついた時だった。護衛の一人が真つ二つに切られた。

その時霧雨が見たのは、人間ではない、妖怪でもこれほど醜悪な姿の化け物はいいなと言ふほど恐ろしい姿だった。二人の護衛が剣を抜こうするが、抜く前に真つ二つに切られ、霧雨も斜めに深く切り裂かれそうになり、実際半分切られたのだが、霖之助からもらったスパーク8を力を振り絞って発射し、寸での所で追い払う事には成功したという。

「……」

「はつきり言つて手術の成功率は3割だそうだ。魔理沙、急いで……」

「ふん。あいつもやつと死ぬのか。」

「……」

「何だよ、その目は。私とあいつは関係ない。分かったら」

その瞬間、魔理沙は何が起こったかわからなかった。分かるのは、霖之助の手が動いた事と、自分の頬が痛むことだけであった。

「……君がそこまで親父さんを憎んでるとは知らなかった。じゃあ、僕は永遠亭へ行くからね。」

その目は何を語っているのだろうか、悲しみと落胆、怒りの入り混じった瞳だった。魔理沙は、去っていく霖之助の背を見ている事しかできなかつた。

家に入ると、自分の叩かれた頬を触る。霖之助に殴られるなんて一体何年振りだろう。

「はは、なんだ、あいつも怒る事があるんだな。」

魔理沙は散らかった部屋を進む。そして、鍵のかかった箱を開ける。その中には……



## 子の心、親の心2

それから数日経過した。霖之助からのそっけない手紙で手術の一応の成功が伝えられた。だが、以前予断を許さないらしい。

その夜の事、永遠亭に忍び込む影があつた。その影は霧雨の眠るベッドの近くまで来る。そして、影は霧雨に語り始めた。

「よう、あんた会うのは何年振りだ。」

「……」

霧雨は答えない。だが、影は語り続ける。

「別にあんたが死のうとどうも思わない。死んで清々する……はずなんだけどな。」

影は写真を取り出す。自分と、父親と霖之助が並んで撮った写真。

「何でだろうな。この写真、あの日から捨てよう捨てようと思つていて、捨てられないんだ。」

「……」

「それに最近よく眠れない。ご飯も酒もまずい。実験は失敗続きだ。全部、あんたのせいだ。」

「だから、早く目を覚ませよ。あんたがそんなんじや胸張つて罵れないじゃないか。」  
「なあ……」

その時だった、部屋の外で動きがあった。

影は慌てて窓から逃げる。そして、部屋には霖之助がやってきた。

「……親父さん。今のが、魔理沙の本音ですよ。」

霧雨は、目を開く。そう、手術は大成。目など始めから覚めていたのだ。だが、霖之助はあえて魔理沙の不安を仰ぐような手紙を出したのだ。

「……何のつもりだ、霖之助。」

「……僕はね、あなた達が見ていられないんですよ。」

「何?」

霖之助の後ろから、マチと杉が顔を出す。

「先生。先生がお嬢の活躍を新聞で見ている時、それは嬉しそうにしておられるのがつかないんですか。」

「先生、マチは、夜中に懐かしそうに昔のアルバムを見ている事を知っています。」

「親父さん。僕はあなたが冷血漢でも無責任な男でもない事も知っています。だからこそ、あなたは皆に愛されている。」

「……」

「親父さん！」

霖之助は珍しく声を荒げる。霖之助にとって、二人は家族のように大切なのだ。

「…………ふ。」

霧雨は自傷気味に笑う、そして、重い口を開く。

「魔理沙の奴、見舞いに来やがった。あいつが出ていった日、あれだけ酷い事を言ったのにだ。」

「…………」

「あの通り魔に切られた時、そして手術を受けるとき、俺の頭には二人の大切な存在の姿が見えた。」

「…………」

「霖之助、俺が魔理沙を嫌ってると思うか。」

「いえ、思いません。」

「ああそうとも。あいつは目に入れても痛くない、俺にとって店よりも大切な宝だ。そして俺の妻、マリーの忘れ形見だ。どうして嫌えようか。」

「…………」

「この間な、マリーが夢に出てきた。俺を罵り、殴り、蹴ってきたよ。なぜあの子を孤独にするのかとね。」

「……」

「だがな、俺は、どうしても魔理沙に、魔法使いにはなつてほしくなかった。あんな、あんな……」

「親父さん。そこから先は、魔理沙に聞かせるべきです。」

「……そうだな。だが、昼間に会ってくれるだろうか。」

「何としてでも連れてきます。必ず。」

その次の日の事、魔理沙の家に霖之助とアリスはきていた。縄を持って。

「何なんだぜ香霖、それにアリスも。こんな朝っぱらから……ロープ？」

「魔理沙。何としてでも来てもらうよ。」

そう言うとアリスの人形達が縄で魔理沙を縛る。

「さあ、病院へ行くわよ。そこであなたのお父様に会うの。」

「……！死んでもごめんだけ。」

「ああそう。でも、連れていくわ。」

そう言つて、魔理沙を無理やり永遠亭へと運び、父親の前に降ろす。そこには、マチと杉もいた。

「……」

「……」

二人してにらみ合ったまま動かない。ピリピリする空気の中、アリスが口を開く。

「霧雨、何娘を睨んでるのよ、そんなんじやマリーが浮かばれないわ。」

「……！アリス、こいつと知り合い？というか、何で母さんの名を？」

「どうするの？別に私から話してもいいけれど。」

「……いや、私が話す。」

そう言つて、霧雨は語りだした。

「魔理沙。」

「……あんたに名前を呼ばれるだけで鳥肌が立つぜ。」

「すまなかつたな。あの日、勘当なんて言つてしまつて。」

「……！何だよ、いきなり。」

「お前には話したい事が山ほどある。だが、今日はお前の母について、そして私かなぜ、お前が魔法使いになる事を否定したかについて話したい。」

「……私の……母さん。」

「そう、お前が生まれる4年ほど前だったか……」

「四年前、私は霧雨道具屋を継ぐため様々な道具……特に魔法に関連した道具についての研究をしていた。」

「……？でも今は魔法の道具なんて販売していないじゃないか。」

「お嬢。お嬢が生まれる前は普通に魔法道具を商っていました。」

「そう、その研究の中で、俺はある魔女に惚れた。その魔女の名はマリー。ちようどお前のような金髪でな、美しく、優しく、変わりものだったが立派な人物だった。そして俺は彼女に愛の告白をし、マリーはそれを受けた。お互いに一目ぼれだったのだ。」

「……マリーは私の親友でもあったわ。私とマリーは私が人間だった頃からの付き合いだったの。ま、霧雨に惚れてからは惚気に付き合わされてうんざりしたけれどね。」

「先生と奥さまはそれは仲が良く、幸せな夫婦でしたよ。」

「だが、一つだけ問題があった。魔法使いは、子を為せないのだ。だが、私は後継ぎが欲しかったし、マリーも子供を作りたいと言っていた。」

「マリーは言っていたわ。彼と同じ時間を生きたい、赤ちゃんは自分が生きた証拠だと。それで彼女はとんでもない事をしたわ。」

「とんでもない事?」

「魔法使いをやめたの。捨虫の法をすて、人間として生きることを選んだのよ。マリーは。」

「そんな……」

「そして程なくしてマリーはお前を身ごもった。その時の喜びは、とても言い表せなかった。」

「先生ったらお嬢様用の食器を自分で作ろうとする始末でしたよ。」

「だが、その日からマリーの地獄が始まった。マリーの事を、魔法使いどもが虐めてきたんだよ。」

「そんな、なんで？」

「恐らくだが、魔法使いである事を捨て、人間になろうとした彼女は魔法使いの恥と映つたのだろう。とにかく、マリーは日に日に弱つた。」

「霧雨道具店が魔法に関する道具を商うのをやめたのはこの時期です。先生は、少しでも魔法使いのいじめから奥さまとお嬢様を守ろうとしていらつしやつたのですよ。」

「そして決定的な事が起こつた。とある魔法使いが、忌々しくも、子を産むと母体が死ぬという呪いをかけてきたのだ。」

その言葉を言う霧雨の目には怒りしか映っていなかった。

「その魔法使いは私が殺したわ。でも、呪の解除ほうも分からないまま時が過ぎていった。」

「俺は子供を堕胎させることを提案した。だが、それにマリーは怒り、そして泣いて懇願してきた。この子を産む事が、私が残せる唯一の物だと。おれは、マリーの命がけの懇願を受け入れた。その日は一日中泣いたよ。」

「そんな……母さん……」

「そしてお前が生まれ、マリーは死んだ。そして俺は決意したのだ。お前には魔法と全く関わらずに生きてもらおうと。だが、お前は魔法使いになりたいと言いだした。俺はそれだけは許せなかった。俺はアリス以外の魔法使い全員に憎悪を抱いている。魔法使いどもは傲慢で、恥知らずで、研究しか頭にない馬鹿どもだ。そんなのになつてほしくなかった。」

「……なら、ならなんであの時それを言ってくれなかったんだ。」

「お前が魔法使いになりたいと言いだした時、俺の頭は真っ白になった。その時は冷静な判断ができなかったのだ。だから、お前に対して、勘当などと……」

その時の霧雨は目に涙を貯めていた。

「魔理沙、いまさら何を言っても遅いかもしれない。だが、言わせてくれ。すまなかった。このとおりだ。」

霧雨は頭を下げた。深々と。ベッドの上でしかも大げがをしている体では土下座はできない。だが、それに迫る気迫の謝罪だった。

「……何だよ。もう、遅いよ。」

「ああ。」

「私はもう一人の魔女として活動してるんだぜ？」

「ああ。」



「私、あんたに死んでほしいと言うほどのバカ娘だぜ。」

「ああ。」

「でも、それでも……」

魔理沙も泣いていた。整った顔を崩し、ボロボロと泣いていた。

「それでも、私の事を娘と言ってくれるのか？親父。」

「ああ！」

しばらく、すすり泣く声が病室に響く。霧雨、魔理沙、マチ、杉の泣き声が響いていた。

この日、一組の家族の絆が元に戻った……とはまだ言い難いが、きっかけはできた。後は時間をかけ、ゆっくりと修復されていくだろう。

その姿を見て、霖之助は満足げな表情となった。霖之助もこの二人が仲たがいで深く心配していたのだ。

これでやるべき事の1つは終わった、後は……

そう思いつつ、霖之助は病室を去る。

とある墓場、そこには霧雨マリーと書かれた墓標があった。それにアリスはそつと花を手向ける。

「あなたの夫と娘、和解したわよ。よかったわね。」

そう言いつつ、目を瞑る。すると、マリーの記憶が浮かんでくる。

初めて会った時魔法使いになる指導を受けた事。

霧雨に会った時の惚気。

子供ができた事の報告。

全てが思い思い出だ。もう一度、心の底から言う。

「よかったわね。マリー。」

魔理沙は一通り泣いた後、家に戻るついでに香霖堂へと向かった。いつの間にかいなくなつた霖之助を探すためだ。そして、魔理沙は香霖堂の前で信じられない物を目にする。

あのめんどくさがりで優男風である霖之助が、刀を振るっていた。それも、鬼気迫る表情で見えないほどのスピードで。

「い、香霖？」

「……ん、魔理沙か。どうしたんだい。」

「何してるんだ。いつもはインドアのお前が。」

「何、この頃体がなまっていてね、少し運動してたんだよ。」

「……嘘だな。あの振り方はただの運動じゃない。香霖、お前……」

「魔理沙。僕はね、霧雨の親父さんを傷つけた奴が許せないんだよ。」

「……」

「僕は半人半妖で世間から冷たい目で見られてた。そんな僕に商売の何たるかを教えてくれたのが親父さんだ。それに……」

「それに？」

「もしかしたら君と親父さんが和解せずに永遠に別れる所だったんだ。僕は決して通り魔を許さない。」

「香霖……」

「親父さんの話では、相手は妖怪、しかも二刀流らしい。だけど僕は剣士とは戦った事が無いんだ。どうしようか……」

「ふうむ、二刀流ね。なら、適役がいるぜ。」

「……そうか、妖夢は二刀流だったな。彼女と協力すれば。」

「ああ、そうと決まれば行動開始だぜ」

「私に稽古をつけてほしい……ですか。」

「はい。僕が通り魔を倒すために。」

「ふうむ。事情はわかりました。ですが、もっと手っ取り早い方法があります。」

「?」

「私と霖之助さんが同時に仕掛けるんです。私が二振りの剣を止めます。その隙をついてあなたが切りこむ。どうでしょうか。」

「そうか、同時攻撃って奴だな。なら、二人の空気を合わせなきゃな。」

「はい。ところで、霖之助さんはどのくらい強いんですか。」

「まあ、そこらへんの妖怪には負けないよ。」

「そうですか。ならば、勝負!」

妖夢は、いきなり霖之助に切りかかってくる。それを見た霖之助は眼を鋭くし、刀を抜く。そして、妖夢の連撃を裁いて見せた。

「ふむ、この強さなら特訓は要りませんね。」

「そうかい? そう言われるとうれしいね。」

「それでは、二人の空気を合わせる特訓をしたいと思います。覚悟はいいですか。」

「ああ。」

そして二人の特訓は三日三晩続いた。その中で、お互いの呼吸、間合いを考え、相手を切る修行を行った。

「ふう、これくらいすれば大丈夫でしょう。後は相手の出方次第ですね。」

「ああ。そうだね。」

そして二人は、夜の人里を練り歩く。すると、目の前に怪しい影が出てきた。そして、その影は一瞬で間合いを詰め、霖之助を切り裂こうとする。だが、それを横から妖夢が止める。赤い眼光、トカゲのような姿。こいつこと、かつてウルトラマンレオを苦しめた快樂殺人の宇宙人、奇怪宇宙人ツルク星人であった。ツルク星人は一旦距離をとる。そして、二振りの刃を構え、襲いかかってくる。右の剣を右の刀で、左の剣を左の刀で受ける。その一瞬の隙を、霖之助は見逃さず、剣でその頭を切り落とす。多くの人間をただ殺してきた快樂殺人の常習犯はここに死んだのである。実にあっけなく。だが、凶悪犯罪者にとってはあっけない死のほうがお似合いだろう。

こうして、霧雨と魔理沙の仲は一応元通りとなった。と言っても、魔理沙は一人暮らしを続け、偶に実家に顔を出す。そして杉やマチは魔理沙の内の掃除をするなど手のかかる孫にするような事をする。そういう風に落ち着いた。ちなみに、霧雨はうっかり孫が早く欲しいと言ってしまう、顔を真つ赤にした魔理沙に殴られしばらく入院が長引いたそうだ。

なにはともあれ、一組の家族が元に戻りかけているのだ。めでたい、実にめでたいことである。

## 妖怪標本一号が捕まらない

風見幽香は花を愛している。なので、冬という季節はあまり好きではなかった。まあ、花が育つのに必要な休眠の季節と考えればいいかもしれないが、それでも花がほとんど育たない季節というのは好きになれない。

なので、様々な植物がその芽を出し、花を開花させる春を告げる春告精リリーホワイトトとは意外と仲が良かった。一般に雑魚と言われる妖精であるリリーホワイトと最強クラスの妖怪である幽香の仲がいいのはおかしく思われるかもしれないが、リリーホワイトが通った道には花が芽吹き、美しい桜が咲く。幽香は、それを楽しみにしていたのだ。

なので、リリーホワイト害すると言う事は——特に春という季節の間は——

——幽香を敵に回すという事だ。それを、この存在は知らなかった。

その存在の胴はシマウマのような幾何学模様の縞縞で、顔は見ようによつては女性にもみえる……だが女性と見るにははるかに不気味な顔をしたその存在は、外の世界で人間標本を集めようとしウルトラマンと戦った三面怪人ダダと呼ばれる存在だ。

このダダは356号という番号が振られ、幻想郷に生息する人間以外の二足歩行の生

命体の標本を集めると上司から命令されたのだ。なのでダダは異次元からのルートで幻想郷に侵入し、そして目についたその生き物をミクロ化機の光線を使って捕獲しようとした。それがこのダダ356号の受難の始まりだとは知らずに……

「ダア……ダ……」

「なんだかピンチですよー!」

ダダははじめに目についた妖精、リリーホワイトを追いまわしていた。空を飛ぶその存在は意外とすばしっこく、中々捕まえられない。そうこうしている内に、なんだか開けた場所に出た。

「あら、リリーじゃない。」

「幽香ー!助けてー!」

そして優香の目は人間によく似た何かを見つけた。何者かは分からないが、とりあえずリリーに害為す者だろう。

「へえ……わかったわ。リリー、危ないから向こう行ってなさい。」

「わかりましたよー。」

「さて。リリーを危ない目にあわして……春の桜が咲かなかったらどうしてくれるの？」

「ダア?」

その次の瞬間、幻想郷が少しだけ震えた。

異次元に存在するダダの基地。そこにダダ356号は転送されてきた。白かった顔を茶色く焦がして。

「だ、だめだ。妖精には強い用心棒がついている……」

だが、上司は全くダダの様子を気にした様子は無い。

「妖怪標本を早急にとらえ、転送せよ。」

その言葉を受け、ダダ356号は顔を変え再び幻想郷へと向かう。今度は紅い館へと。

紅魔館の悪魔の妹、フランドール・スカレットは強力無比な能力も持っている。そして同時に、気がふれていると言われている。だが、本当に最初から気がふれていたのだろうか？彼女が生まれたのは495年前、そして幽閉されていた時間も495年。つまり、生まれたばかりの彼女はすぐに幽閉されたのだ。それは誰の意思だ。少なくともスカレット家の誰かが決めた事には間違いないだろう。それがなぜか、親は反対しなかったのか、それはわからない。だが、少なくとも彼女の気が多少ふれていようと、彼女のせいではない。なので、屋敷に侵入してきたその不屈き者がどんな目にあつたとしても、その不屈き者が不運だったとしか言えないのだ。

ダダ356号は紅魔館の地下に侵入していた。上司の話では、ここに悪魔の妹と呼ば



れる妖怪がいるらしい。その標本を送れとのことだ。全く、あの上死はいつも無茶な事を言う。だがやらなければ飯が食えない。仕方なしに壁の内側にワープする。そこでは、一人の少女が体育座りしていた。

「あなた、だあれ？」

「ダア……ダ……」

「ダアダ？ダダって言うの？」

それにダダは答えず、ミクロ化機を使い、光線を浴びせた。だが、それは簡単に避けられる。そしてフランは少し距離を置き、手を伸ばす。

「遊んでくれるの？じゃあ……」

——簡単には壊れないでね？

その後少しの間、ダダはこの世の地獄という物を味わった。そして、仕上げてギユツとしてドカーンを食らい、ミクロ化機を犠牲にして何とかそこを離れることに成功する。

再び異次元にあるダダの基地。そこにダダは転送されてきた。体中余すところなくボロボロになって。

「だ、だめだ……フランドール・スカーレットはまずい。あれは、あれを捕らえるのは……不可能だ。」

その必死の言葉にもダダの上司は全く意に介さない。

「直ちに妖怪標本を捕らえ、本星に転送せよ。ミクロ化機を送る。これを使い、早急に作戦を遂行せよ。」

その言葉に、理不尽さを感じながらもダダ356号は幻想郷へと戻る。

幻想郷最強の妖怪とは何かと聞かれた場合、意見は分かれる。八雲紫、フランドール・スカレット、風見幽香など……。だが、幻想郷最強の種族は何かと聞かれたら、皆が口をそろえて言うだろう。それは、鬼だと。地底界の旧都に住まう星熊勇義はそんな鬼の中でも最強クラスの實力を持つ。その二つ名は怪力乱神。理屈抜きにこの妖怪は強い。それこそ、挑むなら搦め手で挑むしかない。この勇義にスペルカードルール抜きで戦おうなどよほど自分に自信があるか、ただの愚か者のする事である。そんな愚か者がここに一人……

旧都が震え、一人の愚か者が吹き飛んでいく。それを見て、勇義は呆れたようにため息を吐く。

「ハア……何年振りかの挑戦者だからどれくらい強いかと思つたら。まさかこれで終わりじゃないだろうね。」

ダダは、何とか立ち上がり、ミクロ化機を勇義に向けようとする。だが、勇義は一瞬で肉薄すると、拳がダダの顔を捕らえる。再び大きく吹き飛び、家屋をいくつか破壊し

つつその下に埋もれる。だが、まだダダは立ち上がる。ダダは一応頑丈だ。たとえ高い所から足払いされ落とされようと、スペシウム光線を受けても一応生きていける程度には。

「ははは。そんなからくり頼るようじゃ私には敵わないね。顔を洗って出直しな。」

そして勇義は興味を無くしたように後ろを見せ歩いて行く。それを隙だと思い、ダダはミクロ化機を向ける。だが、その時、ダダの本能が警鐘を鳴らす。今、この引き金を引けば、自分は徹底的に叩きのめされ、殺されると。

その本能に従いダダは地底界から逃げる。その本能に従って正解だっただろう。鬼は、卑怯な手を嫌う。もし後ろから光線を打っていたらダダの命は無かっただろう。

鬼との戦いからほんの数時間後、ダダ356号は地底界に舞い戻って来ていた。本心を言えば戻ってきたくなどなかった。だが、敗北ならともかく逃げ帰ってきたとなれば今月の査定に響き、最悪首だ。なので、一匹でもいいから妖怪を捕らえなければならぬ。そう思いつつ、地底界でも有数の大きな屋敷にワープする。

最強の妖怪は誰かという質問に対する答えは多岐にわたる……というのはさつきも言った通りだ。だが、最恐の妖怪は誰かと聞かれれば、その答えは一人しかない。地獄に落ちてきた怨霊すら恐れ、怯む少女、覚り妖怪の一人、古明さとりである。力で叩きのめすのが鬼だとしたら、彼女は心を踏みいじり、潰す力に長けている。それが、覚り

妖怪特有の能力である心を読む程度の能力。その能力ゆえに人や妖怪から忌み嫌われ、恐れられ地底界に隠居しているのだが、そんなこと知らないバカな侵入者が一人……

古明地さとりは動じない。たとえ怪しい存在が部屋にいきなり現れ、自分に銃らしき物を突き付けていようと。

「ダア……ダア……」

「……なるほど。私を捕らえ、その、別の星ですか？あなたの故郷に連れ去る気ですか。」

「ダ!?……ダア……」

「なぜそんなことが分かった。まさかこいつ、俺の脳内を読んだのか。いや、あり得ない……ですか。御名答ですよ。」

「ダ、ダダダ……」

「ふふふ、動揺していますね。心を読まなくても分かりますよ。さて……」

——あなたのトラウマは何かしら？

その後、ダダには幽香、フランドール、勇義の攻撃が直撃し、地霊殿から大きく吹き飛ばされる。

異次元にあるダダの基地。そこに体中ボロボロとなったダダ356号が転送されてきた。ダダは、何とか起き上がり、クラクラする頭で報告した。

「申し訳ありません。地底の妖怪は……」

「もういい。」

「は？」

「もういい、と言ったのだ。356号。」

やっとこの地獄のような仕事が終わるのか。そう思い少し浮いたダダの心は、次の言葉でたたき落とされる。

「お前には失望した。これからの作戦は別の者に依頼することにする。お前は、くびだ。この世界で朽ち果てるがいい。」

その言葉に慌てるダダ356号。その言葉はダダが一番恐れていた言葉だ。

「お願いします。次はきつと成功させますから。どうか、くびは、くびだけは……」

「ふむ、その言葉に偽りは無いな。」

「は、全身全霊を懸けて作戦を遂行させる所存です！」

「ならば最後のチャンスをやろう。次の作戦を確実に遂行せよ。」

「は！」

今度のダダは、死ぬ気で作戦を遂行しようとしていた。まあ当たり前だろう。この星に取り残されれば、確実に待っているのは死だからだ。

ダダに与えられた最後の任務。それは、博麗神社の破壊、及び博麗霊夢の捕獲、あるいは抹殺である。ダダは巨大化すると、空を飛び博麗神社へと向かう。

だが、ダダは知らなかった。博麗神社にも鬼が住んでいる事を。

博麗神社に着いたダダは拳を振り上げ、神社を破壊しようとする。そして、今までのうっ憤を込めて力一杯振り下ろす。だが、その腕は途中で止められる。たった一人の、小さな存在によって。

「ダア………！」

ダダは驚愕した。ただの人間サイズの存在が、自分の攻撃を止めた？さらにその人間サイズの存在は、巨大化してきたのだ。

「ダ………ダア？」

「全く、博麗神社をたたき壊そうだなんて不届きな事を考える奴があいつの他にもいたとはね。」

「ダ、ダアー！」

だが、驚いてばかりもいられない。こいつを排除しなくては自分の命が危ない。ダダはその存在に向かっていくが、その存在が放った一撃で山肌を削りながら下山する事となる。

「ふん。あんたもこの頃幻想郷を騒がせている侵略者つて奴だろ？じゃあ、容赦はしないよー！」

そしてその存在……もう読者の皆様はお気づきだろうが、二つの角に丸三角四角の飾

り、小さな百鬼夜行こと伊吹萃香である……は、ダダに掴みかかると、何度も地面に力一杯叩きつけた。

「鬼符「大江山悉皆殺し」」

である。そして、幻想郷の強豪達の攻撃を受けてきたダダの体にも限界が来た。

ダダの最後の思考は、

「ああ、次生まれ変わったらもう二度と幻想郷何か来ないぞ！あと上司、あんたもここに来てみる。そして俺みたいに絶望して地獄に堕ちろ！」

であった。ダダ356号は考えつく限り汚い言葉で上司と、幻想郷を罵りつつ爆死した。

ダダ本星。そこでダダ356号の上司は画面に向かい話しをしていた。

「では、これより作戦実行権をお前達に譲る。その代わり……」

「分かっている。我々は人間よりも丈夫な奴隷となりえる妖怪が欲しい。貴様らも実驗用動物として妖怪が欲しい。我らが捕らえた妖怪の一部はお前達ダダに流してやる。」

「うむ。」

そしてダダ上司は通信を切る。本来ならあんな奴らに頼みたくは無かったが部下の

無能さゆえ仕方がない。

全てはダダ本星の発展のため。356号はその礎になったのだ。まあ、後は吉報を待つことにしよう。

「頼んだぞ、レイビーク星人ども。」



## 闇夜の侵略者

異常に暑かった冬が過ぎ、幻想郷にリリーホワイトの元気な声が響く。

「はーるーでーすーよー!」

そう、春である。花が咲き、命が芽吹くめでたい季節……のはずなのだが、現在の幻想郷には春に似合わない非常に不景気なうわさが流れていた。真夜中に空が割れる音を聞いた、新春の飲み会に何時も呼ばれてもいないのに来る騒霊が来なくなった。夜中出歩いているとカラスの妖怪に連れ去られるなど……しかもこれがただの噂では無く、実際に人がいなくなっているのだから始末が悪い。ついこの間辻斬りの犯人が退治されたというのと人里の間人は不安がり、夜の人里はめつたに人が歩く事が無くなり、シンとするようになった。

そんな辛気臭い雰囲気の流れる人里だが、そんなことは関係なく騒ぐ者たちもいる。そう、子供だ。大人の表情が暗くとも、人里の子供たちの元気さは減る事が無い。だが、元気すぎると言うのも考えもので、夜、肝試しをする子供がいて大人は心配している。その心配する大人の内の一人が上白沢慧音である。彼女は寺子屋の先生という立場上、子供たちに夜出歩かないよう注意しているのだが、悪ガキの中にはそれを守らない奴も

いる。そんな子供の事を思い、彼女は夜見回りを一人でしている。特に子供たちが肝試しをするのは命蓮時のお墓だ。命蓮寺の妖怪は悪意を持って人を襲う妖怪はあまりいないが、それでも心配は心配だ。それに最近は食欲旺盛なキョンシーもいるらしい。なので命蓮時の僧侶である聖白蓮にも頼んで、夜は墓場に入れないようにしてもらっているのだが、それでもどこかに抜け道を見つけるのが悪ガキだ。

今日も、授業の終わりに慧音は子供たちに注意する。

「さてみんな。最近物騒だから、絶対に日が暮れたら外を出歩くんじやないぞ。特に……日向！」

慧音はクラスの中でも特に悪ガキな少年、日向かいを名指しする。

「何だよ先生。俺はそんなことしないって。」

「全く、お前は昨日出歩いて私に頭突きされたのを忘れたのか。」

そう、この日向は夜間外出の常習犯なのだ。しかも、一人で出歩くならまだですが、別の誰かもさそって行くのだからたまらない。最近は怒られることに快感を覚えているのではと疑ってしまう。

「とにかく！外は出歩かない。特に墓場に行くなど言語道断だ。分かったな。」

「はい。」

そしてその夜、慧音は街を歩く。少し前までは夜も道行く人がいたのだが、今はほぼ、

と言うより全く人がいない。静かなものだ……と思っていると、人が住んでいる場所のあたりから人影が見えた。

まさかと思い、その後を走ってついて行く。すると、その影は墓場の柵に開いた穴に入っていく。間違いない。

「日向……」

深くため息を吐き、空を飛んで柵を越える。そして、暗い墓場を走っていく。

「日向……」

「げ、先生……」

「全くお前は！あれだけ墓場には来るんじゃないと言ったのに……覚悟はできているんだらうな。」

「に、逃げろ……」

「待て……」

そして夜の墓場で追いかけてっこが始まる。日向はすばしっこく墓の間をすり抜けていく。すると、目の前に一つ目の傘が現れた。

「わ……」

「わ………何だ。小傘じゃん。」

そう、愉快な忘れ傘こと多々良小傘である。小傘はあまりにも驚かない日向かいに不

満そうな表情になる。

「何だつて何よ。もつと驚いて。」

「へっ。今時そんなことで驚かないぜ。じゃ、俺は逃げてるから……」

そう言う日向かいの両肩はしっかりと小傘に掴まれていた。

「な、何だよ。小傘。」

「へっへー。夜中に歩出く悪い子を捕まえると聖に褒められるんだ。だから観念してね。」

「ふざけんな小傘！は、離せー！」

日向は暴れるが、さすがは妖怪と言った所か、小傘の腕はびくともしない。そんな声を聞いて慧音が降り立つ。

「小傘、よくやった。」

「へへへ。」

「さあ日向。覚悟はできているな。」

「あ、ああ、ああ……」

墓場に鈍い音が響く。慧音の必殺技、頭突きである。

「痛つてー！」

「全く。もう夜であるくんじやないぞ。」

「はーい。」

「もう一発食らいたいか？」

「い、いや、わかりました。わかりましたよ。」

「ハア……所で小傘、お前も出歩いて大丈夫なのか。最近妖怪も行方不明になってるんだろ？」

「だって昼間私が現れても誰も驚いてくれないし、夜じやなきや私のお腹が膨れないの。」

「まあ夜でもあんまり怖くないけどね。」

その時だった、突然夜の闇を切り裂き、青い光線が小傘を捕らえる。

「え？」

そして、小傘が、消えた。

「ここ、小傘？」

「何だ、一体！」

慧音は光線の発射された方向を向く。そこには、闇夜に光るオレンジの目があった。

「貴様、一体何者だ！」

その言葉に何者かは不気味な鳴き声を発し、銃らしき物から光線を発射する。

「つちー！」

慧音は日向を抱え、横へと飛ぶ。すると、墓の影からさらに3体の影が現れる。

「くそ、日向、急いで命蓮時へ走れ。」

「そんな、先生はどうするんだよ。」

「私は大丈夫だ。しかしお前がいると動きが制限される。」

「先生……」

「さあ、行け！日向！」

日向は全力で命蓮時の方向へと走り出す。それを追おうと影が動くが、それを慧音の弾幕が遮る。

「さあ、お前達の相手はこの上白沢慧音だ！」

この後、尋常ではない様子であった日向に連れられ、白蓮達が到着した頃には、誰もいなくなっていた。そう、誰も。

上白沢慧音の失踪、このニュースは人里を震撼させた。人里を守ってくれる守護者が居なくなつたのだ。守護者を失つた人里は丸裸も同然。自警団はいるものの、もしこの間に最近噂されている侵略者が現れたら……そう考えると、人々は震えあがった。

そして失踪した者を心配する者は命蓮時にもいた。聖白蓮は次々と失踪する妖怪達の事を思い、心を痛めていた。その悲痛な顔を見て、二ツ岩マミゾウが話しかける。

「そんな表情をするものではないぞ、聖。」

「ああ、マミゾウさん。」

「たしかに多々良小傘達の事は心配じゃが、お主がそんな顔をしてどうする。余計に妖怪達を心配させるだけじゃ。」

「そうですわね。ところで、ぬえは？」

「ああ、あいつは幻想郷を飛び回っておるよ。興味が無いように見えて、あいつはあいつなりに心配しているのじゃろう。」

すると、部屋に寅丸星とナズーリンが入ってきた。

「星、ナズーリン、人里の様子はどうでした？」

「はい、人里は道行く人が少なく、皆の表情も暗いものでした。」

「やはり上白沢慧音の失踪が効いているみたいですね。皆不安と恐怖におびえています。」

「そうですか……ナズーリン。」

「はい。」

「あなたの家は人里から離れた場所にあります。もしかしたらこの失踪の犯人が狙ってくるかもしれません。しばらくはここに泊りなさい。」

「はは、大丈夫ですよ。家の部下達の事も心配ですしね。それに今日は香霖堂の主と約束があるんです。」

「そうですか。ですが、くれぐれも気をつけてください。」  
「分かっていますよ。」

この時、もつと念を込めて引きとめていればと聖達は後悔することになる。

その夕方、ナズーリンは家に戻り、霖之助に買い取ってもらうガラクタの整理をしていた。すると、ネズミ達が騒がしくなる。家に誰か近づいているようだ。恐らく霖之助だろう。そして、家の玄関に誰かの気配がした。その扉を開けようとするが、ふと、ある予感が彼女の胸をよぎる。

——もしかしたら、連続失踪事件の犯人が来たのでは？

その考えが頭に浮かんだ瞬間、ナズーリンは固まって動けなくなつた。もしかしたら、そう考えると今まで感じていなかった恐怖が胸に湧き上がってくる。

落ち着け。失踪はいつも夜に起きている。今はまだ夕方。失踪事件が起こる時間じゃない即ち扉の向こうにいるのは犯人ではない。だが、いや、でも……

そうナズーリンが悩んでいると、扉の向こうから声が聞こえる。

「ナズーリン。扉を開けてくれないか。」

その霖之助の声を聞いた瞬間、ほっとすると同時に、なんだか今まで悩んでいた事がばからしくなつた。

「ああ、すまないね。今開けるよ。」



開けた扉の向こうにはよく知る香霖堂の店主がいた。その顔を見てホツとしすぎて腰が抜けそうになったのは秘密だ。

そして二人は商談を始めた。ナズーリンの集めたガラクタも、香霖に見せれば延々とうんちくが語れる材料であり、それに少々うんざりしてきた頃、ネズミ達が再び騒ぎ出す。何事だろうと思うと、扉の向こうに気配を感じる。誰だろうか。まさか、今度こそ連続失踪事件の犯人では？ そう思い、顔が青くなる。その気配を察知した霖之助は護身用に使っていた刀に手を懸け、扉に近づく。そして、扉が、破壊された。

霖之助は気がつく、体の自由が利かなくなっていた。どうやら、拘束されているらしい。頭は動くので周囲を見渡すと周りにはナズーリンと慧音が眠っていた。

「……どうやら、僕とした事が誘拐されてしまったようだね。」

霖之助はため息を吐きながらつぶやく。とりあえず、両隣りで眠る二人を起こした。

「……う、う、うは……」

「う、うう……」

「二人とも、起きたかい。」

「む、香霖ではないか。まさか、お前も？」

「ああ、してやられたよ。二体はやつつけたんだけどね。」

「あ、小傘じゃないか。」

「……驚けー……ぐー」

「馬鹿、起きないか。」

「……ん、あれ？私どうしたの？」

「誘拐犯に誘拐されたんだよ。」

「えー！私びつくりしちゃった。」

そんなことを話していると、天井が開いた。

「騒々しいな。なんだ？」

「わ！お、大きい……」

覗き込んできたそれは、自分達よりはるかに大きいカラスの様な顔だった。

「貴様、何者だ。私達をどうする気だ！」

「ふん。下等生物のくせに元氣だけはいいな。いいだろう、教えてやる。私はレイビーク星人。私の星ではお前達妖怪が言う所の人間と言う種族に近い生物を奴隸としていたのだが、こき使いすぎたのか絶滅しそうでね。その代わりに人間と言う種に目をつけた一派がいるのだが、私はもう一步先を行って、貴様ら妖怪と言う種族に目をつけた。貴様らは人間などよりも力が強く、奴隸にはぴったりだ。」

「なるほど、それで僕達を奴隸にする気かな？」

「ふざけるな！お前達なんてご主人や聖には敵わないぞ！」

「ソーだソーだ！」

「はっはっは。たしかに我らの純粋な能力では上級妖怪や神に勝つのは難しい。ならば挑まなければいいだけの事。もう十分サンプルはとれた。後はお前達を送れば我が研究が認められ、本星から増援部隊がやってきてこの幻想郷の全ての妖怪を捕らえるだろう。」

「な、何だと!？」

「ははは、それではごきげんよう。」

そう言うのとレイビーク星人は蓋を閉じた。

「あわわ、どうしよう。私、奴隷なんかいやだよ。」

「私だっついていやだよ。でも、どうする事も……」

「くそ! 何とか外と連絡できれば……」

「できるよ。」

「え?」

「実は念のために懐に通信用の陰陽玉を入れていてね。これで霊夢と通信できる。まあ、ここがどこだかわからないから意味は無いかもね。」

「だが、使って損は無いだろう。香霖、使ってくれ。」

「ああ。霊夢、気づいてくれよ。」

霊夢と魔理沙は博麗神社でお茶を飲んでいた。まあ、魔理沙が勝手に押しかけてきたのだが。話題は、自然と連続失踪事件に移る。

「そういや、今人里は大変らしいぜ。」

「ええ。慧音が居なくなってしまったものね、無理ないわ。」

「ああ、だが今回の異変、今までになく悪意がこもっているって思わないか?」

「多分、この間の辻斬りみたいなこの世界にとつてイレギュラーな存在の侵略者でしょうね。」

「動かないのか、お前は。」

「動かないわけじゃないわ。ただ、相手が尻尾を出すのを待っているのよ。それに……」

「それに?」

「私の勘が言っているのよ。ここでじっとしていれば自ずと結果が出るってね。」

「ほんとかよ。」

そんな時だった。萃香がひよこりと顔を出した。

「霊夢。物置でなんだか声がするよ。」

「声?妖精でも入りこんだのかしら。」

霊夢と魔理沙は物置へと向かう。たしかに声が聞こえる。それも、よく知る声が。

「霖之助さん?」

「香霖の声じゃないか。」

一人が物置に入ると、陰陽玉から霖之助の声が出ていた。

「霊夢、聞こえたら返事をくれ。霊夢！」

「これは、いつかの異変で使った通信用の陰陽玉じゃない。霖之助さん。聞こえるわよ。」

「私もいるぜ。」

「ああ、よかつた。二人とも、落ち着いて聞いてくれよ。今、僕達はレイビーク星人という連中に誘拐されている。」

「な、なんだって!」

「落ち着きなさい、魔理沙。で、どこに誘拐されているの?」

「それはわからない。僕らは今、箱の中に閉じ込められているようだ。」

「そんなんじや居場所なんてわからないぜ。」

「いいかい、この通信用陰陽玉は霊力を介して声を伝えている。つまり、霊力を追跡できる道具があれば、ここが発見できる。」

「でも、そんな事が出来るのか?」

「できる人が一人いるじゃないか。あの発明の天才が。」

「ああ、木更津さんね。彼に霊力を追跡する道具を作ってもらえばいいのね。」

「ああ。急いでくれ。奴ら、僕達を奴隷として別の場所に連れていく気だ。」

「香霖が奴隷!?! 冗談じゃないぜ。霊夢、急ごう。」

「ええ。」

二人は大急ぎで木更津のいる滝の裏の秘密基地へと向かった。

「霊力を追跡する装置? ああ、あるよ。」

「なんだか分からないが、赤い鳥の形をした何かをいじる手を休めて木更津は対応してくれた。」

「この世界には鑑識と言う者が無いからね、何か妖怪が悪さをした後その妖怪の……」

「ああ、うんちくはいいから早くくれよ。香霖がピンチなんだ。」

「そうだな。少し待て。」

木更津はそう言うと、奥から八卦炉に似た道具を取り出した。

「霊力レーダーだ。これを使えばその陰陽玉からの霊力を探知できる。」

「よっしゃ!」

「あと俺の部下も連れて行け。数は多い方がいいだろう。」

「待っているよ。香霖、すぐに助けに行くからな。」

霊力レーダーを参考に霊夢たちは飛んでいく。木更津の部下は必死で走っている。走っているというのに息を切らさないのはさすがと言ったところか。そして、霧の湖付

近にある廃洋館にたどりついた。

「ここね。」

「早く突入しようぜ。」

「待ってくれ。」

香霖から通信が入る。

「敵は僕達を捕獲する光線銃を持っている。それに当たらないよう気をつけてくれ。」

「分かったわ。」

そして木更津の部下達も集まり、廃館に突入した。

廃館の中は非常にぼろく、蜘蛛の巣や腐った床に足を取られ中々先に進めない。すると、奥から影が出てきた。木更津の部下の大田がマックガンを放ち、その影は倒れる。その周囲に皆が集まる。

「なるほど、最近言われているカラス顔の化け物ってこいつか。」

「恐らく、宇宙人だろうな。」

すると、上から横から多くの気配がするようになる。

「どうやら感づかれたらしい。俺達4人はこの宇宙人を狩る。君達は捕らえられた人たちを！」

「ああ、分かったぜ。」

こうして彼女達は二手に分かれた。

霊夢たちはレーダーに従い、奥へと進んでいく。すると、開けた場所に出た。そこには4体のレイビーク星人が居たが、銃を携帯しておらず、箱を持っていた。

「お前ら、その箱を離すんだぜ！」

「何だ貴様ら、ここがどうして……」

「うるたえるな。」

慌てるレイビーク星人を、赤目のレイビーク星人が諫める。

「貴様ら、たった二人で挑んでくるとは所詮は下等生物よ。」

「何だと！」

針、札、星の弾幕がレイビーク星人達に襲いかかり、オレンジ目のレイビーク星人は全て倒れる。

「後はお前だけだぜ。」

「ふん、貴様らも奴隷にしてやる！」

赤目レイビーク星人は光線銃を構え、霊夢たちに撃つ。だが、そんな直線的な光線に当たると二人は抜けていない。さらにレイビーク星人は目からもビームを放つが、当たらない。長距離戦闘は不利だと覚ったレイビーク星人は銃を捨てると、霊夢に飛びかかってきた。だが、霊夢も体術が全くできないわけではない。



「〔神技「天覇風神脚」〕」

赤目レイビーク星人は力強く蹴られ、少し吹き飛ぶ。その隙をつき、魔理沙の攻撃が飛ぶ。

「〔星符「ドラゴンメテオ」〕」

その強力な光を受け、赤目レイビーク星人はさらに奥に吹き飛んでいく。

「やったか？」

「魔理沙、それはフラグってやつよ。」

すると、地響きが起こり、何かがこの廃館から出ようとしていた。

「な、なんだ？」

「二人とも、無事かい？」

「ええ、あなた達は？」

「この館内の宇宙人は全滅させた。だがこの地響きは？」

全員が廃館から出ていく。すると、円盤が館を破壊しつつ現れた。

「う、宇宙船だと！」

「あんなの、撃ち落としてやるぜ。」

魔理沙は八卦炉を構える。そして、スペルカードを発動する。

「〔邪恋「実りやすいマスタースパーク」〕」

その光線は円盤に命中。爆発を起こし落ちていく。それを、いきなり現れたスキマが飲み込む。

「紫の奴、見ていたなら助けなさいよ。」

こうして誘拐騒動は一応の終息となった。縮小光線銃は木更津以下河童の精鋭チームによつて解析され、元の大きさに戻る事が出来た。

皆がもろ手を挙げて慧音の無事を祝っていると、日向がやってきた。

「どうした、日向。」

「先生……ごめんなさい！」

謝られた慧音は目を丸くする。まさかこの悪ガキが反省しているなんて。

「俺、俺……」

「日向。」

日向かいの名を呼ぶと、慧音は優しく抱きしめた。

「もう、あんな危険なまねはしないな。」

「うん。」

「宿題をさぼらないな。」

「うん。」

「寝坊してこないな。」

「うん。」

「じゃあいい。」

そして、慧音は眩しいくらい笑顔を見せ、頭をなでた。

こうして誘拐犯が消え、人里に元の活気が戻った。そして春の大宴会が行われる。

だが、その裏では侵略者の魔の手が伸びている。人里は、これからどうなっていくのだろう。それは、また別の機会に

## 子供の怨念は何を生みだす

突然だが、幻想郷には子供を捨てる親はほほいない。ただでさえ周囲には人食い妖怪がたむろっているのだ。子供を捨てる事などしていたらあつという間に個体数が少なくなり、種の存続が成り立たなくなる。子供は多い方がいいというわけではないが、捨てる余裕などないのだ。

だが、子供を捨てる親がほほいない……言い換えれば極僅かにいるのだ、そういった親が。例えば先天的な異常、脳の遺伝性の障害、妖怪などとのハーフ……こう言ったことが要因で無縁塚に子供を捨てる親が極僅かに存在する。そして外から迷い込んできた、いわゆる外来人の中にも捨てられた子供はおり、その生存確率は大人の外来人のそれより格段に低い。そんな子供のために無縁塚には子供供養用の塚が存在する。だが、これは理不尽だ。たとえば肉体的・精神的異常があらうと、育てきれなくとも、そんなこととは関係なくその子供は生きているのだ。中絶や捨て子にするくらいなら性行為などしなければいい。理不尽によって妊娠してしまったというなら中絶をすればいい。この世に生まれ落ちたその瞬間から子供には命が宿るのだ。幻想郷の捨てられた子供の99・99%は死ぬ。そして死ぬば待つているのは賽の河原の石積みという地獄。こ

んな理不尽が許されていいのだろうか。いや、許されるべきではない。子供を捨てた親は人里では裁かれる。だが、死んだ子供は捨てた親を断罪することはできない。普通は、だが。これは、そんな捨て子の物語。捨て子の怨念はどこまで膨れ上がるのだろうか。霊夢は最近夢を見る。月明かりのみの暗闇、女性が謝罪してくる夢だ。

「ごめんね〇□、ごめんね……」

—— ああ、なんて鬱陶しいのだろう。謝るような事だと思うならしなければいいのに。

「ごめんね〇□。お母さん。あなたを育てられないの。」

その女性の目からはぼろぼろと涙が出ている。

—— お母さん？ バカ言わないですよ。あなたを親だと思った事は一度もないわ。私の母親はあの人一人。それに泣いているから許すとしても？ 泣くぐらいならこんな事、しなければいいじゃない。

「じゃあね。お母さん、もう行くからね。」

—— はいはい。早くどっかに行つちやいなさいよ。煩いから。

そして自分が入られた箱の中から空の星を見ると、一人の女性が……

そこで夢は終わる。何故だかはわからないが、最近自分が博麗霊夢になる前の夢をよく見る。鬱陶しいことこの上ない。どうせ見るなら母の夢でも見たいものだ。霊夢は

布団を片づけ、外を見る。

そこには、一輪の赤い花が咲いていた。

とある夜、森近霖之助は飛び起きた。汗でぐっしよりと濡れた服が気持ち悪い。そして周囲を確認し、軽くため息をつく。

「また、あの夢か。」

そうつぶやくと、布団に寝転がる。

「□□……もう捨てた名なだけどね。」

霖之助は、母親に捨てられた時のことを夢に見ていたのだ。霖之助の出生は決して良いものではない。母は妖怪に種付けされ、自分を産んだ。しばらくの間は罵詈雑言を浴びせられ、殴られ、蹴られながらも一応育ててもらったが、母が人間の男を好きになった時に捨てられた。それから地獄だった。人間でもない、妖怪でもない自分は人妖どちらからも忌み嫌われ、どこにも居場所が無かった。何度自分が生まれてきた事を呪っただろう。何度死のうと考えただろう。だが、地獄の中にも仏がおり、また自分の天生の能力によってギリギリ生きていけた。その後幻想郷に流れ着き、霧雨の親父さんに拾われたのだ。そして自分に呪いを込めてつけられた□□という名を捨て、今の森近霖之助が誕生したのだ。

「全く、最近この夢ばかり見る。睡眠薬でも処方してもらおうかな。」

そう言いながら眠気を覚ますためにコーヒーを淹れに行く。

香霖堂の外には一輪の赤い花が咲いていた。

とある日、魔理沙が博麗神社を訪れた。もちろんお茶をたかりにである。そして奥に行くのと、とても眠そうにお茶をすする霊夢がいた。

「よう霊夢。なんだか眠たそうだな。」

「ええ、最近変な夢ばかり見てね……ふあ。」

小さく欠伸をする霊夢。魔理沙も縁側に座り、お茶を淹れる。すると、場違いな物を見つけた。

「あれ、こんな所に赤い花なんて生えてたっけ？」

「さあ、何日前だったか忘れたけれどその時から生えてるわ。」

「バラと言えば、霊夢。これはちよつとした異変だぜ。」

「異変？」

「そうだ。今、人里に謎の花が無数に生えているんだ。不気味がつた奴が抜こうとしたんだがこれが抜けない。どうだ、面白そうだろ。」

「ん〜そうね。ま、気が向いたら調査するわ。」

「何だよ霊夢。付き合いが悪いぜ。」

「今日は永琳の所に行くつもりなの。夢を見ない薬を処方してもらうためにね。」

「夢？何か悪夢でも見てるのか？」

「ええ。最近ずつとね。」

「……分かったぜ。じゃあ今回の異変はこの魔理沙様が解決してやる。」

そう言うのと、魔理沙は箒にまたがりどこかへと飛んでいく。霊夢ももうそろそろ行くうかと永遠亭へと向かった。

「はい。一応夢を見ないように調べてみたわ。」

「ありがと。」

永琳から薬をもらう霊夢。

「寝る前に一錠飲めばそれで夢は見なくなるわ。でも……」

「でも?」

「いえ、何でもないわ。睡眠薬はいいの?」

「ええ。一応寝られるからね。」

永琳が言いかけた言葉、それは一日に同じ薬を二回処方するなんてと言う事だった。

霖之助は永琳に薬を処方してもらった後、無縁塚に来ていた。だが、今日はそこに時々転がっている道具……魔理沙たちに言わせればガラクタ……を拾いに来たわけで



はない。子供を供養する塚に花を添えに来たのだ。

自分らしくないという事はわかっている。ただ、自分も一步間違えればこの塚に供養される子供の一人になったのだ。いつもは目に留まっても何も感じなかったが、最近の夢の事もあり、少しくらい自分も供養してやらないと考えたのだ。だが、その塚を見て霖之助は驚愕した赤い花が、無数に生え、そのツタ絡まっている。

何だこれかと思ひそのバラに触れる。すると、頭に恐ろしいほどの怨念が流れ込んでくる。

「恨めしい……憎い……苦しい……寂しい……」

「ガア……ぐ……」

霖之助は頭を抱え、花から急ぎ手を離す。すると、花が伸びてきて自分を拘束しようとしてくる。霖之助は少しの間あまりにも強い怨念にくらりとしたが、伸びてくるバラを見て、何とか走って逃げる。そして何とか逃げ切れたが、霖之助は久しぶりに恐怖と言う物を感じた。二種類の宇宙人と戦っても恐怖を感じなかった自分がだ。何事も起こらなければいいかと思いつつ、香霖堂へと戻る。

その夜の事だった。人里に咲いた花が一斉に動き出した。その花達は人の血を求め蠢く。屋敷の開いた場所に潜りこみ、眠る住民をしびれさせ、耳から吸血を行う。だが、ツルク星人、レイビーク星人と被害を受けてきた人里は自警団や慧音のような守護者に

よる見回りを強化していた。なので、人里中に咲いた花が怪しい事は皆感じとっていた。そして案の定花は人を襲い始めた。自警団の男達は花の蔦を見つけ次第引きちぎり、焼いていった。だが、逆に蔦に絡めとられ、締め付けを受ける者や、返り討ちにされる者も少なからずおり、また花をちぎった時に出る赤い血のような液体に人々は恐怖した。

そして蠢く花は博麗神社にも生えていた。そのツタは、眠る霊夢を襲おうとする。だが、その花に、札が叩きつけられる。

「やっぱりあんただだったのね。最近変な夢を見せてきたのは。」  
「……………」

霊夢は寝ていなかった。巫女の勘で、今夜あたり花が動き出すことを予想していたのだ。

「全く、あなたのせいで寝不足よ。」

しばらく花はもがいたが、やがて赤い血を流して大人しくなる。

「さて、と。」

それを確認した霊夢は、空へと飛翔し無縁塚へと向かう。

香霖堂にもその花は生えていた。だが、その花は既に霖之助の手によって切られていた。

「やれやれ、僕に悪夢を見せていたのがまさかこの花だったとは。」

霖之助は憐れみと悲しみの混じった目で赤い血のような液を流す花を見る。そして霖之助は人里の命蓮時へと向かう。

無縁塚にある子供の供養塚。その地下から地響きを立てて鳶の化け物が現れる。そう、かつてウルトラマンタロウを苦しめた、子供達の怨念を吸い育った怪植物、鳶怪獣バサラである。まるで子供の泣き声の様な鳴き声を発して移動する。目指すは、人里。

だが、バサラが移動する寸前に霊夢が無縁塚に到着した。霊夢は感じとっていた。この怪獣から発せられる子供達の怨念を、無念を、執念を。そしてそれらが入り混じったどろりとした怪獣の魂を。霊夢は自然に理解した。この存在は自分がなったかもしれない可能性の1つだと。

「はあ、恨みつらみも溜まりに溜まれば怪獣になるのね。」

霊夢は憐れみのこもった目でバサラを見る。

「私も一歩間違えればあなたの一部になっていたのよね。」

霊夢はお祓い棒と札を構える。

「あなた達の事は可哀そうに思うわ。でもね、だめよ。そんな恨みなんかでこの世にとらわれてはだめ。」

霊夢はバサラに語りかけつつ飛翔し、札と針の弾幕を放つ。だが、そんな物では怯み

もしないバサラ、だがそんなことは欠片も気にせず、霊夢は語り掛け続ける。

「あなた達は誰が恨めしいの？自分を捨てた親？それとも自分達を捨てさせた世の中？でもね、あなた達が暴れても復讐にはならないわ。」

霊夢は、博麗に伝わる最強の秘術を発動させる準備に取り掛かる。だが、バサラも薦を伸ばして応戦する。その薦を、遠くから発射された弾幕が切る。

「霊夢、遅くなつたね。」

「霖之助さん。どうしてここに？」

「僕もこの存在には思う所があつてね。援軍を連れてきたよ。」

「援軍？」

すると後ろから聖白蓮がやってきた。

「ああ、何という……」

白蓮はこのバサラの怨念、苦しさ、悲しさを感じとり、涙を流していた。こんなに悲しき、苦しさを内包した存在を白蓮は知らなかった。

「白蓮さん。彼らの事を思つて泣くのは後です。今は彼らを解放してあげるために、お経を唱えてください」

「……はい。私の力が及ぶ限り、彼らを成仏させましょう。」

そして、白蓮はお経を唱え始めた。その言葉、一句一句に彼らへの思いをのせて。そ

のお経に苦しみ出すバサラ。蔦で白蓮を攻撃しようとするが、草薙の剣を装備した霖之助に阻まれる。そして、霊夢も準備が完了した。

博麗霊夢の持つ最強の技、「夢想天生」。それが発動し、通常よりも数段威力が増した弾幕がバサラに浴びせられ、バサラの体を構成する蔦がどんどん破壊される。

さらに、白蓮が紡ぐお経によつてほんのわずかだがバサラの怨念が弱まる。そこに、畳み掛けるように霊夢が語りかける。

「あなた達を捨てた親や世の中を憎むなどは言わないわ。だけどね、怨念にとらわれても楽しい事なんか一つもないわ。ただ苦しいだけ。それに、あなた達を捨てた奴なんかにとらわれているのも馬鹿らしいと思わない？ だからね、楽になりなさい。大丈夫よ。私は閻魔にも顔が利くから、きつとあなた達を天国に行かせてあげるわ。」

霊夢の言葉に、バサラの動きが止まる。そして、バサラの体が徐々に小さくなっていく。霊夢はさらに語りかける。

「まだあの世に行きたくなければ、愛を知りたければ花として生きなさい。花を愛するなら幻想郷一の存在を知っているから。」

その言葉に、バサラの体はどんどん小さくなり、最後には一輪の花になった。

「……終わったわ。」

「ああ。」

「これで、彼らの魂は救われたのでしょうか。」

「そんなのわからないわ。でもね、誰かを恨みながら存在するってとてもつらいの。それよりはましになったとは思うわ。」

霊夢と霖之助は、そつとバサラだった花を鉢に植え替えた。

この時、人里を襲っていた花の蔦も消えさり、花の騒動は終焉を迎えた。

その後、子供の供養塚は霖之助と白蓮の手によって修繕され、大規模な供養会が開かれた。

そして霊夢は三途の川に来ていた。子供達との約束を果たすためだ。小野塚小町に頼んで四季映姫を呼び出す。

「全く、閻魔を呼び出すなど前代未聞ですよ。」

「わっているわ。その上でお願いがあるの。」

すると、霊夢は、頭を下げた。あの霊夢が頭を下げたのだ。小町も映姫も目を丸くした。

「お願い、賽の河原で石積みなどさせないで、あの子供達を天国に行かしてあげて。」

「あの子たち……数日前集団で彼岸にきたあの子たちですね。大丈夫です。あの子たちは白。天国へと旅立って行きましたよ。」

「ほんとう？」

「ええ。賽の河原の石積みはそれを監視する鬼達が大きかったのでしばらく休業していただきます。なのであの子たちは石積みのお仕事を天國へ行きました。」

霊夢はホッと息を吐いた。よかつたと心の底から思った。そして霊夢が帰ろうとすると、映姫が声をかけた。

「あなたも、一つ善業を積みましたね」

「……別に、そんなつもりでやったんじゃないわ。ただ、あの子たちがあまりにも哀れだと思っただけよ。」

「そうですか。」

映姫はにこりとして霊夢を見送った。

そして霖之助は風見幽香のいる場所に来ていた。

「あら、たしか香霖堂の店主だったかしら。」

「ええ。」

「何の用？今、花見で忙しいのだけれど。」

「実は、この花をあなたに世話してほしくて。」

霖之助は幽香にバサラだった花を渡した。

「……この花は？」

「だれにも愛されず、捨てられた子供の魂がこもった花さ。」

「……」

幽香は、まるで自分の子供に向けるかの如く優しい目で花を見やり、撫でた。幽香は、この花が愛を求めている事、そして人間や親に対し強い憎しみを持っている事を感じとったのだ。

「なるほど。分かったわ。この子は私が愛情を込めて育てるから安心して。」

「頼んだよ。」

こうして、バサラだった花は幽香の手で愛情を込めて育てられる事になった。

これでバサラとなった子供の怨念が本当に救われたかどうかは分からない。

だが、霊夢と霖之助は、きっとこれで彼らの心が少しは救われたのだと思いたかった。

子供は大切にしましょう。でないと、子供の怨念は怪獣を生み出すかもしれませんよ。



## 夢は楽しく見ましよう

人と妖怪。違う所は多々あるが、勿論共通点もある。その一つが睡眠するという事、そしてもう一つが、夢を見ると言う事だ。人妖関係なく、眠れば夢を見る。夢の内容は人によって違うが、幸せな夢、悪夢、自分の欲望が叶う物から理解不能な物まで様々だ。では、その夢が現実になったら？しかもそれが怪獣の夢だったら？これは夢のお話。人が見る夢による異変を彼らはどう解決するのだろうか。

謎の吸血植物による異変から数日たった。人里にはいつもの活気が戻り、このまま何も起こらず普通に春が過ぎていくのだと思う者さえいた。だが、異変はいつ起こるか分からない。その事を、人里の人間が知るのとはある夜の事であった。

生田は何をしてもぱっとしない大人しい人間であると周囲の人間に思われている。事実その通りなのだが、恨みや妬みといった感情を溜めこむタイプでもある。そんな生田は最近失恋した。その女には何万という金をつぎ込み、幻想郷では手に入りにくい宝石までプレゼントしたというのである。その理由は彼女いわく、

「あなたと居るよりも、外来人の彼と一緒にいた方が楽しい。」

らしい。ふざけんなどと思う。だが、実際にその外来人に勝っている点が見つからな

いのも事実。この無念、無情はどう晴らせばいいか。そう考えながら生田は最近買ったカセットテープなる物で音楽を聞きながら眠りについた。

生田は失恋の後、ある夢をよく見る。その夢とは、自分が怪獣となつて暴れる夢。その夢の中では自分は無敵の存在だ。そしてこの力を使つて憎き彼女と外来人を……と言ふ所で目が覚める。

これだけだったら失恋男が空しくも夢の中だけで復讐すると言ふお話で済んだらう。だが、運命は行田にとんでもない力を授けてしまった。

滝の裏の秘密基地、その開発室で木更津は悩んでいた。彼は自分の夢である空を飛ぶ事のために自作のマッキー3号を作成しているのだが、とある問題にぶつかっていた。破壊されたMAC基地内部の材料をかき集めて何とか外観や内部を組み立てる事は出来たのだが、エンジンが作れないのだ。マッキーシリーズは小光子力エンジンで動いているのだが、それが幻想郷では作成できない。普通のエンジンでは空を飛べる出力が出ない。どうしようか……そう考えていると、基地の警報が鳴る。木更津は急いでモータールームへと向かう。

そこで機器に向かっている河童に話しかける。

「どうした!」

「木更津さん。謎の宇宙線が幻想郷に降り注いでいます。」

「何だと、急いで解析しろ。」

「木更津さん、大変です！」

「今度は何だ。」

「人里に、怪獣が……！」

夜の人里、宇宙人による事件が多発したので出歩く人の数は少ないが、それでも一期の完全にシンとした人里よりはましになったと言えよう。その人たちが視線を上に向けて、美しい月や星、灰色の半透明な怪獣が見えた。

「……え？」

灰色の……怪獣？人里に怪獣の雄たけびが響く。人里に警鐘が鳴り、人々は逃げ惑う。そして、子供の宿題を見ていた慧音は急いで外に出て、迎撃態勢をとる。するとその半透明の怪獣は口から炎を吐き、慧音を焼こうとする。慧音は空を飛び回避する。そして怪獣に対し弾幕を張るが、全てすり抜けていく。

「何だと？」

怪獣は再び炎を吐き、慧音をしつこく狙う。慧音も一応弾幕を張るものの全てすり抜け、攻撃の意味を為していない。その時、極太のレーザーと赤い結界が怪獣に襲いかかる。

「この攻撃は……霊夢と魔理沙か。」

そう、霊夢たちが駆け付けたのだ。だが、さっきの攻撃も効果が無いようだ。

「何なんだぜ、この怪獣は。」

「おかしいわね。ちゃんと夢想封印は直撃したのに。」

「二人とも気をつける。こいつ、私達の攻撃が効かない。」

怪獣の放つ炎が向かってきたので散開する三人。

「この……もう一発、〔恋符「マスタースパーク」〕」

八卦炉からマスタースパークが放たれるが、やはり怪獣に命中してもすり抜ける。

「くそ、こっちの攻撃が全然効いて無いぜ。」

「とにかく敵の攻撃が人里に当たらないよう、相手の攻撃をひきつけるんだ。」

「全く、じり貧ね。」

三人が攻めあぐねている時だった。怪獣がスウッと消えたのだ。

「消えた？」

「逃げたのか？」

「いや、分からないが……とにかく、人里の被害を確認しなければな。」

三人は、人里へと降りる。

生田は頭をひねっていた。夢の中でいつものように元彼女と彼女を寝盗った外来人の男を襲おうとしたのだが、今回は少し違った。なぜか夢に慧音先生と博麗の巫女、そ

して多分魔女っ子が出てきたのだ。三人は必死で自分を攻撃してきたが、無論夢なので効かない。お返しに炎で応戦した。そしていぎ人里に侵入しようと言う時に、家の扉が激しくたたかれ、飛び起きたのだ。

「な、なんだあ？」

扉を開けると生田のよく知った自警団の男がいた。

「おい、生田！化け物が現れた。急いで逃げるんだ！」

「化け物？……どこに。」

「どこにつてあそこに……あれ？」

「はあ、冗談はやめてくれよ。」

「いや、ほんとに怪獣がいたんだ。」

その言葉に疑いの目で自警団の男を見る生田。だが、この男は嘘をつけるような器用な人間では無い。ならば本当に化け物がいたのだろうか。仕方なしに避難場所に指定された命運時へと向かう。そこでは、初めて巨大で醜悪な化け物を見たからか、パニックを起こしている人もおり、自警団の男が言った事の信ぴょう性が増した。怪獣は確かにいたのだ。だが、ならなぜ自分は見られなかったのだろうか。首をひねる。

次の日、生田は仕事の合間に昼ご飯を食べようと食事処へと向かった。その途中の事のことである。カフェとかいう店で元彼女と外来人が食事しているのを生田は見てし

まった。最近夢の中で晴らしていた恨みつらみが生田の中で再燃する。その夜、生田は穏やかな音楽をかけながら眠る。その胸の内に憎しみを持つて。

時間を少しさかのぼる。霊夢、魔理沙、慧音は滝の裏の秘密基地に来ていた。慧音は初めて見るハイテクの基地に目を丸くしている。用件は、昨日の攻撃が全てすり抜ける怪獣への対処方法を木更津に相談するためだ。

「やあ、霊夢さんに魔理沙さん。それに……う？」

「初めまして。私は上白沢慧音と言います。」

「初めまして。木更津です。霊夢さん。ちようどあなたに話しておきたい事があつたんです。」

「あらそれじゃ都合がいいわね。」

そして霊夢は昨日の怪獣について話した。

「……なるほど。昨日の怪獣騒動はそういう事だったのか。」

「ええ。木更津さん、どう思う？」

「ちようど俺が君たちに話したかった内容と一致するな。ちよつと待つててくれ。」

そう言うのと、木更津は奥へと向かい、何か紙を持つてきた。

「何？それ。」

「昨日幻想郷に降り注いだ宇宙線の観測データだよ。これに興味深い観測データが出て

いてね。」

「宇宙線？」

「あー……まあ、空の彼方から降ってくる見えない光みたいなものさ。このデータによると、昨日、幻想郷に異常なレベルのモルフェウスDが降り注いでいる。」

「モル……フェ？」

「モルフェウスD。俺は宇宙線の専門家じゃないから詳しい事は解らないんだが、特定の人間の脳に干渉し、……簡単にいえば夢を現実にするらしい。」

「夢を現実に……なるほどね。」

「何がなるほどなんだ。霊夢。」

「昨日、あの怪獣に私達の攻撃が一切聞かなかつたのは、あれが夢の中の存在だからよ。」

「そうか、あの怪獣は誰かの夢が見せた幻。夢幻を攻撃しても意味が無いという事か。」

「ああ。そう言う事だな。」

「全く、誰だよ！怪獣の夢なんて見る迷惑な奴は！」

「そうだな、人里の誰かだとは思うんだが、候補が多すぎる。」

「あの怪獣を出現させない方法は二つ。一つはその夢を見る人間を見つけ夢を見ないような薬を飲んでもらうこと。もう一つは人里の人間全員に眠らないようにしてもらう……後者は現実的でない、前者はどうその人間を選別するかだな。」

「あら、方法ならもう一つあるわ。あの怪獣をコテンパンにのして二度と怪獣の夢を見る気を無くしてしまえばいいのよ。」

「だけど攻撃がすりぬけちゃうんだぜ？」

「じゃああいつを現実に引きずり出せばいいのよ。」

「どうやって。」

「そういう出鱈目な事が出来る奴が一人いるじゃない。」

「え？……ああ、あいつか。」

「ええ、あいつよ。」

「……？」

「紫ー！あんたどつかから見ているんでしょ！ちよつと来てくれない？」

その夜の事、再び怪獣が現れる。その姿は前回よりもはつきりしており、生田の恨みを鳴き声にのせて、炎で憎き外来人と彼女を焼いてやろうと外来人長屋を狙う。失恋の恨みは恐ろしい。そして怪獣が人里に踏みこもうとした時、目の前にこの間の三人が現れる。邪魔だとばかりに炎を吐くが回避され、逆に攻撃が怪獣に降り注ぐ、だが、怪獣は前回の事を踏まえてその攻撃を無視する。どうせ効かないのだ。だが、信じられない事にその攻撃は命中した。

「よー！」



「紫もたまには役に立つわね。しっかりと夢と現実の境界をいじくってくれたようね。」  
「二人とも、畳み掛けるぞ。」

〔夢符「二重結界」〕

〔恋心「ダブルスパーク」〕

〔終符「幻想天皇」〕

三人のスペルカードが発動し、激しい弾幕が怪獣を襲う。怪獣の体中で火花が散り、怪獣の姿が消える。

「また消えた!」

「くそ、逃がしたか。」

霊夢と魔理沙は悔しそうにする。

「だが相手にこちらの攻撃が命中するようになったのは前進だ。だが……」  
「……?」

「いや、攻撃するたびに消えてしまっただけはイタチごっこだと思っただけ。」

「あーそーいやそーうだな。」

「たしかに……また作戦会議ね。」

生田は飛び起きた。なぜか夢の中で受けた攻撃のあまりの痛さにびくりしたのだ。なぜ夢の中で痛い目に逢わなければならないのだ。理不尽だと思いつつも、もう一度寝

ることも怖くてできず、その晩は起きたまま音楽を聞いて過ごした。

次の日、生田が街を歩いていると、これ見よがしに……と生田にとつては感じた……手をつないでいる元彼女と外来人がいた。そしてふと元彼女の手を見てみると、小さなダイヤモンドの指輪がはめられていた。自分がプレゼントした物では無く、その外来人がプレゼントしたと思われる指輪。その時こみあげてきた怒りは言葉では表せられないほどであった。無論この時の生田の怒りはただの身勝手な嫉妬心である。だが、今だ失恋から立ち直っていないこの男にそんなことが分かる筈もなく、その夜にはさらなる恨みつらみを込めて、今度こそ夢の中で思い知らせてやろうと眠る。音楽をかけながら……

滝の裏の秘密基地では四人がまた頭を悩ませていた。紫の力でこちらの土俵にある怪獣を乗せることはできた。だが、すぐに逃げられてしまう。それをどうするか考えていた。そこに、来訪者がやってきた。

「あらあら、みんな難しい顔をしていますわね。」

「あら、紫じゃない。」

そう、妖怪の大賢者、八雲紫がやってきたのだ。

「どうやらあの怪獣の対処方法に頭を悩ましているようね。」

「見たらわかるでしょ。あの怪獣、攻撃したらすぐに逃げちゃうんだもの。」

その言葉に、紫は妖しく笑みを浮かべる。

「全く、まだまだ修行が足りないわね、霊夢。」

「何ですって?」

霊夢はその言葉にカチンときて立ち上がる。だが、そんなことを全く気にしない紫はそのまま話し続ける。

「こちらの土俵に乗せられないなら、こちらが相手の土俵に乗ればいいじゃない。」

「……! そうか、こちらが夢の存在になれば相手と同じ世界で戦える、と言う事か。」

「ただどうするんだ? まさか眠って戦えって言うのか。」

「あ、それいいわね。」

「え?」

「私達が眠って、その夢とあの怪物がいる世界を紫の力でリンクさせればいいのよ。紫、できるわよね。」

「ええ、お安いご用よ。」

「よし、じゃあ今夜はぐっすり眠りましょう。」

そして三人は家へと帰っていく。だが、紫は木更津に呼び止められた。

「紫さん。少し待ってください。」

「……何か?」

「お願いがあるのですが……」

木更津は、この世界では作成できないエンジンについての話をした。

「なるほど、この世界ではエンジンを作れないから、外から輸入できないかと言う事ですね。」

「はい、図々しいお願いですが、聞いていただけませんか？」

「……すいませんが、今の私は力を著しく失っています。今の私は外の世界にまで手を伸ばす力が無いのです。」

「そうですか……」

木更津は少ししよんぼりするが、次の言葉に顔が明るくなる。

「ですが、今までにスキマに落としたり二隻の宇宙船があります。その中枢エンジンを使えば何とかなるのでは？」

「え、いいのですか？」

「ええ、詳しい話は……そうですね……三日後、この部屋に私の家に通じるスキマを作っておくので、その時に。」

「ありがとうございます、紫さん。」

「いえいえ……では、ごきげんよう。」

そして、紫はスキマの中に消えていった。

その夜、今度は完全にはつきりとした姿で怪獣が現れた。この怪獣こそ、何の因果か生田と同じ名前の、とある世界のイクタ青年の夢が生み出した、ウルトラマンティガを翻弄した怪獣、夢幻怪獣バクゴンである。

その怪獣が現れた頃、霊夢、魔理沙、慧音の三人も慧音の家に集まり、眠ることにした。だが、眠ろうと思うとなかなか眠れない物で、しかも外ではバクゴンが近づいており、とてもではないが眠れる状況では無かった。

「くっそー！全然眠くないぜ。」

「まずいわね。まさかここまで眠れないなんて。」

「……そうだ。そういうえばここに睡眠薬があつたはず……」

慧音は八意印の睡眠薬を取り出した。

「あるならとつとと出しなさいよ！もう怪獣が人里に入ってくるじゃない。」

「すまない。ほら、永琳の力作だからすぐに眠れるぞ。」

三人は薬を飲んだ。さすがは永琳で、すぐに眠気が襲ってきて、三人はぐっすりと眠った。そしてそれを見限り、紫が三人の夢とバクゴンのいる世界をつなげる。

そして三人は夢の世界に来ていた。そこは、嫉妬の炎が燃え上がり、それに似合わない穏やかな音楽が流れる世界だった。

「なに？この音楽。」

「恐らく、この夢を見ている者が聞いている音楽だろう……そうだ！」

「どうした、慧音。」

「この音楽を聞いている者を人里で見つければこの夢を見ている物を見つける事が出来る！」

「そりやそうだが、どうやって？ 私達いま寝ているんだぜ。」

「魔理沙、頼む。」

「え？」

そして慧音は魔理沙の頭をガシリと掴むと、力一杯頭突きをした。その衝撃は、夢の世界を震撼させる。

「痛ってー!! 慧音、何しやが……あれ？」

その衝撃で魔理沙は起きた。

「つたく、頭突きするならするって言えよな。絶対拒否したのに……」

ぶつくさ言いながらもあの音楽を聞く人間を探すために人里へと出た。

そして夢の中、霊夢と慧音はバクゴンと戦っていた。だが、やはりと言うべきか、怪獣相手に決め手を欠く二人。だが、二人の表情に焦りは無い。別に、自分達はこの怪獣を倒さなくてもいいのだ。倒す、つまり消すのは魔理沙に頼んで、自分達は足止めに徹すればいい。と言うよりも、倒してしまえばこの夢を見る者も起きてしまい、魔理沙が

見つけられない可能性もある。なので、これでちょうどいいのだ。

「それにしても、こんな怪獣を生み出すほどの夢を見るなんて、この人間に何があったの  
だろうな。」

「さあね、正直興味ないわ。」

夢の外、魔理沙は耳を澄ませながら人里の居住区を飛んでいた。普通の人間はとつくに避難しており、静かな物である。だが、魔理沙の耳に穏やかな音楽が聞こえた。夢で流れていたのはこの音楽だ。魔理沙はその音楽がする方へと飛んでいく。

そしてその音楽の発信源の家に到着した。扉を蹴り壊し、家に突入する。すると、音楽をかけながらぐっすりと眠っているさえない顔をした男がいた。

「お前か、あんな迷惑な夢を見ているのは、おい！起きろ！」

魔理沙は頬をたたき起そうとするが、全く起きる気配が無い。深く眠っている。ならばと魔理沙は八卦炉を取り出す。

「この……起きろ！〔恋符「マスタースパーク」！〕」

魔理沙はマスタースパークをぶつ放した。無論、怪獣に使うような威力では無くいつもの非殺傷設定でだが。それに吹き飛ばされる生田の家。その衝撃でやっと生田は目覚める。と、同時に怪獣も消えた。

「な、なんだ？」

「おー起きたか。さあ、来てもらうぜ。」

「え…………え？」

何事か理解できていない生田を連れて、魔理沙は慧音の家へと行く。そして慧音の家で尋問が行われた。

「…………で、振られた腹いせに夢の中で復讐してたってわけ？」

「はい、そうです…………」

「く、下らないぜ。そんな下らない理由で人里は壊滅の危機だったのか？」

「全く、色恋沙汰はまともな事にならないと言うが…………」

魔理沙、霊夢はもちろんの事、慧音でさえ呆れてものが言えなかった。

「べ、別にいいじゃないか。夢ぐらい自由に見させてくれよ。」

「あんたの場合は自由に見てもらっては困るのよ。明日、竹林の永遠亭へ行つて夢を見ない薬を一生分もらつてきなさい。」

「な、何でそんな薬を…………」

「何か言つた？」

その時の霊夢の表情はまさに鬼だった。まさか他人の下らない色恋沙汰に巻き込まれるとは思つてもいなかった。そんな下らない事に時間を割いたのかと思うと涙が出てきそうで悔しいのだ。



「わ、分かりましたよ。」

その後、慧音付き添いの下で生田は永遠亭へと行って、文字通り一生分の薬をもらってきた。だが、生田にとって永遠亭へ行ったのはよかったのかも知れない。なぜなら、鈴仙・優曇華院・イナバと言う優しく美人な女性に再び恋ができたのだから。だが、その恋は実る事は無いだろう。そして再びバクゴンが現れ、生田は霊夢に半殺しの目にあうのだが、それはまた別のお話。皆さんも、恨みを込めて夢を見るのはやめましょう。

## 影の侵略・幻想の翼

地底に住まうはさとりへのペット、火焰猫燐は機嫌が良かった。元々沈まない性格だが、それを踏まえたうえでも今日は機嫌の良い日だろう。今日は仕事兼趣味である死体集めで質の良い、愉快的死体を3体も手に入れる事が出来たのだ。この死体ならしばらく地霊殿に飾ってもいい感じだろう。と思いつつ死体をコレクションルームに入れようとす。だが、その瞬間お燐の心は天国から地獄に叩き落とされ、絶望した。今まで集めていた死体コレクションが一体も無いのだ。

「な、何でー!」

お燐は主人であるさとりの部屋に飛び込み、自分の死体が無くなった事を伝える。だが、さとりもガラスが割れるような音がした気がする以外は特に何も起こっていないように感じていたので、そのまま伝える。かなりしょんぼりした様子のお燐を見て、今日の餌は高級ツナ缶にしてあげようかと考えるさとりであった。

この紛失した死体、この死体が後にとんでもない異変を巻き起こすのだが、この時は誰もその事を知る由もない。

滝の裏の秘密基地、そこの大きめの鏡がある部屋で、木更津はいつもの作業着ではな

く礼服で、ネクタイを締めつつ身だしなみを整えていた。それを見て、にとりや大田は不思議そうにしていた。

「木更津さん、今日は気合が入っているね、どうしたの?」

「ああ、今日は八雲紫とかいう大妖怪と会うらしい。」

「へえ、あの紫が人間に会うだなんてね。明日は御柱でも降るんじゃない?」

「おい、にとり。大田」

「ひゅい! な、なに?」

「これでどうだ。失礼にならないかな。」

「大丈夫です。かなり魅力的に見えますよ。」

「そうか? ならいいんだが。」

そう言つて木更津は部屋を出て、八雲紫と約束した部屋に向かった。そこには空間に開いたスキマから多数の目がこちらを見ていた。かなり不気味である。だが、勇気を出してスキマに入っていく。しばらく浮遊感が木更津を襲い、出口へと出る。そこは純和室だった。そしてそこには木更津が人生の中で見た事がないほどの豪勢な御馳走が用意されていた。

「ようこそいらつしやいました。木更津さん。どうぞお座りください。」

木更津は、示された場所に座る。

「ご招待ありがとうございます。紫さん。」

「いえ、幻想郷を影で救ってくれているあなたにお礼をするのは当然のことですわ。」

「いえいえ、実際に幻想郷を救っているのは霊夢さん達と部下達です。」

「まあ、お話は食事をしながらしましょうか。」

「ええ、そうですね。」

そして木更津は料理に箸を伸ばそうとする。だが、木更津はこういった高級料理になれておらず、作法など知りもしない。知らず知らずの内に失礼なことをしないかと戦々恐々だった。その様子を見た紫は木更津の緊張を間違えて捉えた。

「御心配しなくても、人肉など使っておりませんよ。」

「じんに……!」

その言葉に木更津は固まるが、今の緊張をほぐすための紫のジョークと無理やり思い気にしない事にする。そして料理に再び箸を伸ばし、食べる。

「味はどうですか?」

「美味しい。実においしいです。」

「それはよかった。私の式も喜びますわ。」

木更津は料理に次々と手を伸ばす。滝の裏の基地ではキュウリ料理ばかりだったので、久々に別の味が楽しめた。だが、やけに油揚げが使われているなどという疑問が浮か

ぶ。

その後、他愛もない会話を二三交わし、料理をふさふさの狐の尻尾をした女性と猫の様な少女が片付け、話しは本題に入る。

「では木更津さん。本題に入りましょうか。」

「はい。私はあなたが今まで隙間に入れた宇宙船の動力部位が欲しいのですが。」

「わかりました。」

紫は庭にスキマを開き、メトロン星人とレイビーク星人の宇宙船を出現させた。両方ともかなりボロボロだが、原形は保っている

「おお、これが他の星の技術の結晶……」

「この動力部でよかったですか？」

「はい、十分すぎます。これを本当にもらっても？」

「ええ。」

木更津は思わずガッツポーズをしました。それくらい嬉しい事であった。木更津は、この宇宙船二隻を滝の裏の秘密基地に運んでくれるように紫に頼んだ。

「しかし、ここままでして頂いたのに、こちらは何も……」

「いえ、いつも怪獣の異変解決に協力してくれるお礼と思ってくれればいいのですよ。

それに……」

「……………」

「あなたにはこれからやってもらう事が山ほどありますから。」

紫が最後に言った言葉の真意がつかめず、首をひねりつつ滝の裏の秘密基地に戻る木更津。まあいい、今考えるべき事は違う星のエンジンをどうマッキー3号に搭載するかだ。木更津は、明日には来るであろう宇宙船の事を思い、まるでクリスマスに玩具を待つ少年の様な心境だった。

次の日、宇宙船二隻が格納庫にスキマ経由で入ってきた。そして、それを好奇心の塊である河童たちが解体していく。無造作にはなく、木更津の指示の下ではあるが。そして動力の中枢部は未知であり、危険が伴うので木更津とその部下で慎重に解体していく。解体開始から何時間経っただろうか。やっとの思いで動力の中枢を取り出す。

次の問題はこの動力中枢をどうマッキー3号に積めるようにするかだ。木更津と大田達は部屋にこもり、不眠不休で動力の解析を行う。だが、木更津達全員が倒れ、にとりが永遠亭へ運ぶ事態になるまで頑張っても動力の解析は終わらなかつた。結局木更津達は無理をするなど永琳に怒られ、適度に休みつつ解析を行い、三週間かけてやっとの思いで解析した。

さて、木更津達が人間の集中力の限界に挑戦していたころ、人里では不気味な事件が起こっていた。人里に身元不明の死体がばらまかれたのだ。ついこの間人を襲う花が

咲いたと思ったら、今度は死体が人里中に転がっているのだ。人里の人間が受けたシヨツクは大きいだろう。気味が悪いので人里の外に捨てて妖怪達に処理してもらおうかという人間もいたが、白蓮が、

「幾ら身元が分からない死体とはいえ、元は生きていた人間です。手厚く葬ってあげましょう。」

と言うので死体は命蓮寺に集められ、腐らないうちにお経をあげ、墓地に葬る手はずになった。

その夜の事であった。夜は妖怪が最も活動する時間だが、命蓮寺の妖怪達は白蓮に合わせ昼型なので皆眠っている。そんな命蓮寺の夜、蠢く影があった。月明かりに照らされ、障子に映る影。それに最初に気がついたのはニツ岩マミゾウだった。マミゾウはそつと障子に近づくと、勢いよく障子を開ける。だが、そこには何もいなかった。

「……? なんじゃ、今のは。」

「ん? どうしたの? マミゾウ。」

ぬえも目を覚まし、眠気目を擦る。

「ふうむ、何事も起こらなければいいのじゃがお。」

「……?」

「ぬえ、目を覚ましておけ。何事か起るかも知れんぞ。」

マミゾウが警戒する中、影は死体に合わさった。すると、死体だった物が動き出したではないか。その死体はふらふらと動き、白蓮の眠る部屋へと歩いてゆく。そして白蓮の部屋に到達し、その中にぞろぞろと入っていく。そして白蓮の首に手を……その時だった。その手は掴まれ、大きく投げ飛ばされる。そして、白蓮は素早く起きると、肉体強化呪文を唱える。白蓮の特異な魔法は肉体強化だ。肉体を強化した白蓮に勝てるのは鬼などの一部に限られる。白蓮は、目の前の集団を睨む。

「何者ですか。」

だが、その集団はその言葉に反応せず、白蓮に襲いかかる。白蓮はその相手を吹き飛ばせ、かつ致命傷にならない程度の力を込めて突っ込んでくる集団を吹き飛ばす。その騒ぎを聞きつけ、マミゾウ、ぬえ、一輪、水蜜、星が集まってきて、白蓮に加勢する。時間にしてほんの一分もせずに入入者は全滅した。

「こいつら何なの？」

ぬえはその倒れている侵入者を触る。すると、その冷たさに驚く。

「わー！」

「どうした、ぬえ。」

「こ、こいつら、死んでる。」

「何ですって？」



一輪と水蜜も侵入者を確認したが、全員死体だった。しかも、よく見てみると今日運び込まれた死体ではないか。

「どういう事でしょう?」

「さあ……私の命を狙う何者かが死体を操る術を使ったとしか。」

「きつとあの道教の奴らの仕業だよ。奴ら、姐さんを殺そうとするなんて卑劣にもほどがある!」

「一輪、それは違うと思いますよ。豊郷耳神子は私と考え方は違えど、こんな卑劣なまねをするような人間ではなかったように思います。」

「聖、甘いよ。あいつらの仲間にはあの邪仙が居るんだよ。あいつならやりかねない。」

「とにかく、これは我々だけで解決するには事が大きくなりそうですね。ムラサ。」

「はい。」

「明日の朝一番に博麗神社に飛んでください。これはもしかしたら侵略者の罠かもしれない。」「はい。」

「わかりました」

「姐さん、この死体はどうするの?」

「とりあえず、鍵を掛けてしまっておきましょう。」

そして次の日、霊夢とついでに魔理沙がやってきた。

「おはようございます。お待ちしていましたよ。」

「おはよう、白蓮。で、朝っぱらから私を呼び出して、何があったの?」

白蓮は昨晚の事を話した。

「……なるほどね。で、あなたは死体に殺されかけた。」

「ええ。あれがただの死体なら、ですが。」

「ま、調べてみるわ。」

霊夢達は鍵のかかる倉庫に並べられた死体を見に行った。

「ずいぶんきれいな死体だな。」

「はい。目立った外傷もありませんし、調べてみましたが魔法の類は使われていません

でした。」

「ふうん。」

霊夢はしばらく死体をいじくり、札を貼ったりした。

「特に呪詛的な物も感じないわ。ほんとに動いたの?」

「聖を疑う気? 昨日たしかに動いていたんだ。」

「あなたの命を狙う奴らはほんの一握りよ。そいつらを締め上げれば白状すると思うけ

ど……」

「どうしたんだ? 霊夢。」

「いえ、私の勘が言ってるのよ。これは侵略者が起こした異変だつてね。」

「侵略者……こないだのレイなんたら星人みたいな奴らの一味が起こしたつてことか？」

「そう考えた方が自然だと思わない？術や魔法ではないとしたら科学、それも私達よりずつと進んだ科学を使わないと無理な事よ、これは。」

「ふうむ、たしかにな。」

「とにかく、札を貼っておいて今夜まで待ちましょう。それでこれがどういう異変か見極められるわ。」

「そうだな。」

こうして霊夢達は夜まで待つことにした。

その夜、顔に札の貼られた死体の影が動き、倉庫の外に出る。そこに待ち構えていた少女達の弾幕が降り注ぐ。だが、後ろの倉庫が壊れただけで影は意に介した様子は無い。すると影は、白色の霧を発生させる。その霧を浴びた者はなぜかコップに入る程度の大きさに縮小されてしまった。そう、この霧こそマイクロ化フォッグであり、この影の正体は、かつウルトラセブンをコップに閉じ込めると言う奇策を行った蘇生怪人シャドウマンなのだ。シャドウマンは命運時に運び込まれた死体を操り白蓮を殺そうとしたが、それは本命ではなかった。本命は、その異変を起こすことで出てくるであろう博麗

の巫女を捕らえることだ。そしてシャドウマンは見事それを成し遂げてしまった。シャドウマン達の手の中には、博麗霊夢、霧雨魔理沙、聖白蓮があった。他の妖怪もミクロ化してしまったが、そんな有象無象に用は無い。例え攻撃してきても自分達に攻撃は全く効かないのだから。シャドウマン達は暴れる三人を抑えつけつつ、そのまま人里を通り抜け、ぼろい小屋に着く。そして、その地下にある自分達の宇宙船へと乗り込み、宇宙船を動かす。空に開いたひび割れに向かって。

その宇宙船の下部は円筒状のカプセルになっていて、その中に三人は閉じ込められていた。

「く、くそ！まさか宇宙人に連れ去られるなんて！」

「このまま幻想郷から連れ去られるのはごめんよ。魔理沙、マスターパークでどうにかならない？」

「ああ、八卦炉は取り上げられちゃったぜ。」

「なら、私が！」

白蓮は肉体強化の呪文を唱えると、力一杯カプセルを殴る。だが、びくともしない。このカプセルはかつてウルトラセブンも捕らえられたのだ。白蓮の力で割れないのも無理は無い。

これまでか、そう諦めかけた時、一陣の光が船を揺らす。

「きゃー！」

「な、なに？」

「見てください。赤い鳥が……」

そう、空を飛ぶ赤い翼が光線を発射したのだ。そう、この機体こそ、木更津が精魂込めて作り上げたマツキー三号である。

話しはシャドウマンに霊夢達が捕まった所までさかのぼる。滝の裏の秘密基地で木更津達はちよつとしたパーティーをしていた。ついに、マツキー三号に搭載できるエンジンが完成したのだ。

「やりましたね、主任！」

「ああ、ああ。」

木更津は思わず男泣きしていた。自分の長年の夢がここに実現するのだ。後は、テスト飛行をすればいいだけだ。無論、テストパイロットは木更津。このフライトで、この幻想郷に新たな希望を見せられるかもしれない。人は、魔法や能力がなくとも空を飛べるのだと。

だが、河童たちはこれが飛ぶというのに半信半疑だった。まあ、あの木更津があそこまで喜んで言う事は飛ぶという事なのだろうが。

そこに、スキマが開き、八雲紫が現れる。

「木更津さん。」

「ああ、紫さん。見てください。私の、いや、私達の翼マツキー三号です。」

「それはおめでとうございます。ですが、緊急事態です。」

その真剣な表情に木更津も真剣な表情になる。

「どうされました。」

「いま、霊夢達が異星人に連れ去られようとしています。」

「何ですって!」

その言葉に木更津達は驚く。

「いま、私の力が何者かの力でジャミングされてあの宇宙船には使えません。お願いです、彼女達を、救ってください。」

「……わかりました。おい、お前ら!カタパルトから物をどけろ!」

「主任、まさかマツキーで出撃する気ですか?」

「もちろんだ。」

「そんな無茶だ!ミサイルだって積んでいないし、テスト飛行だって……」

「大丈夫だ!俺達はこれを作るためにどれだけ計算した。計算に計算を重ねて、今のこいつがある。もつと自分が作った物に自信を持て。」

「……わかりました」

そして、荷物などがどかさされ、発進口が口を開く。

「いよいよよか、頼むぞ。マツキー三号。」

「木更津さん。進路、オールグリーン。……ご武運を。」

「ああ。木更津、マツキー三号、出るぞ。」

滝の裏の秘密基地から、赤い特殊な合金の鳥が飛び立つ。それに、大田達、河童たちは歓声をあげて見送った。

「宇宙船め、この星から何一つ奪わせんぞ。」

マツキー三号は宇宙船の上をとると降下しつつレーザー光線でダメージを負わせる。宇宙船もミサイルやレーザーで応戦するが、それをギリギリで回避していく。そして宇宙船の下を見ると、カプセルの中に三つの影が確認できた。彼らか。どう助けようかと一瞬考え、カプセルと宇宙船の継ぎ目をレーザーで攻撃し、溶かしていく。そして、宇宙船が空の割れ目に入る寸前でカプセルを切り離すことに成功する。

シャドウマンの宇宙船には逃げられてしまったが、奴らの作戦をくじく事が出来た。基地に帰った時は河童たちからの歓声で耳が痛くなった。しかも、数人の記者天狗もあり、このマツキー三号についてじっくりと話をした。そして、マイクロ化してしまった者はレイビーク星人の機械を応用して巨大化させた。

その次の日、木更津は墓参りに来ていた。最初にMACステーションが落ちてきた場

所に作った墓である。

「ダン隊長。俺、空を飛べました。これからは、幻想のための翼として戦って行きたいと思っっています」

「幻想郷を頼んだぞ、木更津。」

「……え？」

慌てて周りを見るが誰もいない。空耳だろうか。だが空耳でもいい。ダン隊長、遠くから見守ってください。

こうして死者の起こした異変は一応の終息を見せた。だが、皆さん、死体の扱いにはくれぐれもご注意を。もしかしたら、その死体はシャドウマンかもしれないよ。



## かつての過ちは子にめぐる

人は、美しい花を作る手を持ちながら、一旦その手に刃を握るとどんな残酷極まりない行為をする事か……とはM A Tの伊吹隊長の言葉である。人は自分と違う者を受け入れ、慈しみ、優しさを持つ事が出来る。だが、自分と違う者を恐れ、迫害し、排除しようとするのも人間だ。その人間の傾向は外の世界だろうが幻想郷だろうが変わらない。いや、むしろスペルカードルール導入以前の人里の人間に、自分達の違う存在であり、はるかに強く自分達に恐怖と死を与える妖怪を……慧音のような自分達を守ってくれる側の例外を除いて……愛し、優しくできる存在がいただろうか。白蓮のような存在は極稀なのだ。これは、幻想郷の人間の罪のお話。そして……

博麗霊夢、いや、博麗の巫女は中立である。霊夢はよく人外と宴会などするので妖怪側に傾いているのではという考えを持つ者がいるが、異変が起きれば顔見知りだろうが知らない存在だろうが、人間妖怪幽霊妖精とその存在の種族が何だろうか、そもそもその異変に関係していい無かろうが問答無用で攻撃し、退治するので過激派な中立と言うのが正しいだろう。

そんな霊夢も人間に変わりは無い。なので差別的な感情が全く無いと言ったら嘘に

なる。だが、霊夢は決して差別しない。人間だろうが妖怪だろうが、散々な目にあわされてる宇宙人にさえ差別はしない事に決めている。博麗の巫女が中立だからとは関係なく、差別が、人間をどこまでも醜くできるという事がある事件で知ったからである。

霊夢は月に一度会いに行く人間がいる。霊夢は村人が持つてくるコメや肉、幽香に頼んで摘ませてもらった花を持って人里から少し離れたボロ小屋に飛んだ。その小屋の周囲には無数の穴が掘ってあり、小屋の中には、ボロ布団に寝転がる、一人のボロボロな服を着た男がいた。霊夢はその男に話しかける。

「金山さん、一月ぶりね。」

その金山と呼ばれた男は目を開けると、かすれた笑みを浮かべ答える。

「やあ、霊夢ちゃん。」

「ちゃんと食べてる？一か月前よりやつれてんじゃないの。」

「いやあ、最近は食べても吐いちまってね。碌に食えんのさ。」

「そんなんじや駄目よ。さあ、今日は肉を持ってきたから、ちゃんと食べなさい。」

「ふふ、霊夢ちゃん。俺はもうだめらしい。」

「……………」

「この間、調子がいいときに霊夢ちゃんに言われた医者に診てもらったんだ。」

「……………」

「ガンがもう致命的なまでに広がっていて、あと一週間生きられるかどうからしい。」  
「そんな……」

「最後に霊夢ちゃんの顔を見れてよかった。コメや肉は要らないよ。どうせ吐いちまうんだ。」

「そんな事言わないで。あなたには死んでほしくないの!」

霊夢は珍しく声を荒げる。それほどまでにこの男には思い入れがあるのだ。

「お願い。あなたが死んだら、良君の宇宙船は誰が見つけるの?」

「宇宙船、か。俺には無念な事が2つある。霊夢ちゃん、聞いてくれるか。」

「ええ。」

「良の宇宙船を見つけれなかった事、そしてあの子の両親に子供の死を伝えられなかった事だ。」

「金山さん……」

「頼む。死ぬのは怖くない。どうせ十数年前に捨てようとした命だ。だが、あのこの宇宙船を見つけてくれないか。そして、あの子の両親に、あの子の遺骨を……ぐ、グググぐぐ……」

「金山さん!」

「く、薬を……」

霊夢は急いで薬を金山に飲ませる。

「ふう……」

「金山さん。」

「霊夢ちゃん。そう言えば、お母さんに似てきたな。」

「え、そ、そうかしら?」

「ああ。顔とかじゃなく、雰囲気だ。だんだんとお母さんに近づいているよ。君のお母さんには世話になりっぱなしだった。君達の優しさは、死んでも忘れないよ。」

「そんな、優しさ何かじゃないわよ。ただの勝手。私も、母さんも自分の勝手にやっているだけよ。」

「ふふふ、一つ、無念な事が増えた。」

「え?」

「君の花嫁姿を見られなかった事だよ。」

「もう! そんなこと言える元気があるならまだ生きられるわよ。さあ、お粥でも作るから待ってなさい。」

「ありがとうな、霊夢ちゃん。」

霊夢は金山に粥を作ってやり、家を出る。そして、家の外にある何の名前も書かれていない墓に花を供、帰路につこうとする。すると、何者かの気配がして札を構えた。そ

して木の影から魔理沙が出てきた。

「よう、霊夢。」

「……なんだ、魔理沙か。」

「何だとは失礼だな。」

「はいはい、で、何の用。」

「霊夢、お前このポロ小屋に住んでいる人間を知っているのか？」

「ええ。母さんの代からの付き合いよ。あなたこそ知っているの？」

「いや、たしか一度会っただけだ。後は人の噂でだな。」

「へえ、どうせ碌でもない噂でしょうね。」

「いや、碌でも無いを通り越してるのか今は誰も何も言わないだよ。子供の頃は耳を塞ぎたくなるほどの悪評だったのにだぜ？まるで腫れものを触ってるかみたいだ。親父はここに住んでいるのは人間の醜さを嫌というほど味わった人間だって言っていたな。」

「そう。魔理沙のお父さんが言ってる事は的を得ているわね。金山さんは……」

その時だった、空が割れる音がした。急いで二人が空へと飛ぶと、宇宙船が人里上空に居座っている。

「霊夢、宇宙船だぜ！」

「ええ、人里の上空に現れるとはいい度胸じゃない。」

すると宇宙船の下部から光が照射され、人里が照らされた。

「何かしているぜ。」

「どうせ碌でもない事よ。急いで落とすわよ。」

「おう！」

霊夢と魔理沙は宇宙船に向かい飛ぶ。そして、魔理沙と霊夢がダブルでペルカードが発動しようとしたその時、下から声がする。慧音の声だ。

「待てお前達！」

「何だぜ慧音、邪魔すんなよ。」

「あの宇宙船に、子供たちが連れ攫われた。恐らく、子供達はその内部にいるんだ。」

「何ですって！」

すると、宇宙船から声が聞こえる。

「幻想郷の人間諸君。私はメイツ星人オービ。子供達は我らメイツ星人とメフィラス星人が預かった。円盤への攻撃はお前達の子供の死につながり、さらに……」

円盤の下部が開き、地上に魚の様な怪獣が現れる。巨大魚怪獣ゾアムルチである。

「この怪獣を暴れさせお前達人間を皆殺しにする。」

「そんな、子供をさらうなんて卑怯だぜ！」

その言葉に、別の声が反応する。

「卑怯もラツキヨウもありませんよ。人間。これから我々は交渉するのですから。」

「なに？八雲紫とか？」

「いいえ、私達は妖怪に興味はありません。興味があるのは人間だけです。交渉相手は、子供たちです。」

「なんだと！」

人里に、家から出てきた人間があふれる。その人たちは口々に子供を返せという。

「煩いですねえ。別に我らは武力であなた方を侵略しようとは思っていません。ただ、それを子供たちにゆだねようと言っているのですよ？」

「武力を使わないだと。じゃあその怪物は何だ！」

「これはあくまで保険。あなた方には怖い妖怪や神々がついていきますからね、むしろ、一体だけだと言うのに感謝していただきたい。このオービは十匹のゾアムルチで侵攻しようと言うほどの過激派で、それを抑えるのに苦労したのです。」

「メフィラス、最後に俺に言わせてくれ。」

「ええ、どうぞ。」

「人間ども、十年前の蛮行を我らメイツ屋人は決して許しはしない。覚えておけ。」

そして通信が切れる。魔理沙は、十年前の蛮行と聞いてもいまいちピンとこなかつ

た。

「十年前？何かあったっけな。霊夢……霊夢？」

魔理沙は霊夢の方を見る。すると青い顔をした霊夢がいた。霊夢の顔色が変わるとは何事だろうか。

「十年前……メイツ星人……ああ、そんな。」

「霊夢、どうしたんだぜ！」

「魔理沙……私、あのメイツ星人に会わないといけないわ。」

「なんだと。そんなの無茶だぜ。」

「無茶でもやらないといけないの。」

「霊夢、十年前、何があったんだ。お前が取り乱すなんて只事じゃないぜ。」

「……わったわ。話すからあなたにも協力してほしいの。」

「わかった。」

「そう、あれは十年前の事だったわ……」

霊夢が魔理沙に十年前の話をしようとしている頃、円盤内では子供たちが目を覚ました。

「どい、いいっ？」



子供達は事態が把握できていないようで、茫然としている。そこに、一体の化け物が現れる。

「やあ、おはよう。」

そう、メイラス星人とメイツ星人オービである。その姿を見た子供達は叫び、部屋の後ろに逃げていく。

「逃げなくてもいい。私は君達に危害を加えようと言うのではない。」

子供達はおびえた表情で二体の化け物を見る。そしてその内の勝ち気そうな少年が口を開く。そう、日向だ。

「おまえら、何だ！こないだのなんたら星人の仲間か！」

「なんたら……ああ、レイビーク星人の事かな？我らは君達を奴隷になどしない。私はメイラス星人。こつちのがメイツ星人のオービだ。私はただ、交渉したいんだ。」

「こ、交渉？そんなの大人にやらせろよ！」

「大人は心が複雑で中立的立場をとりにくい。純粋な心を持つ君達子供こそ真に交渉に向いているんだよ。」

「そんな……」

「さあ、交渉開始だ。ジュースでも飲むかい？」

「要るかよ、そんなもん！」

「おやおや、残念だ。さて、君達への要求はシンプルかつただ一つ。」

——人里を、私に出来ないかい？

「……は？」

メフィラス星人のいきなりの人里を出来ないかという要求に再び啞然とする子供達。そして口々に、

「ふざけんな！」

「誰がお前達なんかに！」

「お家に返して！」

「怖いよー！」

と叫ぶ。そして、彼らを代表し日向が言う。

「ほら、みんな嫌だつてさ。交渉終了だ。」

「そんな事言わずに、私は別に君達に人里から出ていけと言っているのではないよ。ただ、私に人里を管理させてほしいと言っているんだ。」

「そんな事言っても答えは変わらないぞ！」

「君達はわかっていない。幻想郷の人里の人間の醜さを。そして知らない。かつて犯した暴挙を。」

「な、何だよ、それ。」

「これから、このオービ君が語ろう。人里の人間が犯した罪を。」

そして、オービは語り始めた。かつて幻想郷で起こった悲劇を。

「十年前、この幻想郷には一人に宇宙人が居たんだ。名前はリョー。彼はまだ地球の年に換算して10年も生きていなかった。だが、宇宙船の事故でこの星に不時着し、この幻想郷に来たんだ。そして、幻想郷の人間に殺された。」

「な……」

日向は言葉が一瞬出なかった。そんな話は聞いた事がなかった。

「メイツ星と地球の間に交流はほとんどない。なのでその子は誰にも助けられず、孤独と、絶望の中で死んだのだ。」

「そんなの……出鱈目だ！俺、聞いたこともないぞ！なあ。」

「あ、ああ。」

「そうだよ、聞いたことないよ。」

「それに、宇宙人なんて退治されて当然じゃないか。」

後ろの子供も同調する。最後の言葉にメイツ星人は反応する。

「きつと惨い話だから君達に伝えなかったのだろう。だが、証人が居る。」

「証人？」

「この私だ。」

「……………え？」

「人里の人間に、君達の親に殺されたメイツ星人は、私の息子だ。」

「そ、そんな……………」

「後ろの少年、君は宇宙人は退治されて当然だと言ったね。」

「え、あ、あ……………」

「だが、まだあの子は十歳にもなっていないなかったんだ。何もしていないただの子供を、野蛮で暴力的な君達の親は殺したんだ！」

「……………そ、そんな」

部屋の中がシンとなる。さすがの日向も何も言えない。

「オービ、それくらいにしておきなさい。子供たちが怖がっている。」

「……………ああ。」

「さて、君達の親がこのオービ君の子供を殺したという話はわかったかな？」

「う、うう……………」

「酷い話だと思わないか？ 惨い話だとは思わないか？ 誰かに管理されていない無知な人間は子供さえ殺すんだよ。」

「……………」

「だが、私が管理したらそんな悲劇は繰り返させない。誰もが手を取り合って生きてい

ける人里を作つてあげるよ。」

「……ほんかよ。」

「ほんとだとも。私の友人はザラブ星人、バルタン星人、ケムール人と多彩だ。その誰もが手を取り合っている。さてもう一度……」

その時、部屋に通信が入る。

「何だ。」

「メフィラス様。博麗の巫女が、メイツ星人と話し合いたいと。」

「こちらにはメリットの無い話ですねぇ。」

「十年前殺されたメイツ星人について話したいとのことですが。」

「……！メフィラス。」

「わかりました。行つてきなさい。」

そして、メイツ星人オービは部屋から姿を消す。

「さて、少し話がそれた。もう一度聞こう。君達、人里を私に譲る気は無いかい？」

「……俺は……」

宇宙船の外にメイツ星人オービはでる。そこには博麗の巫女が居た。

「言っておくが、私を攻撃してもゾアムルチは動くぞ。さあ、話せ。十年前の話だろう。」

「ええ。十年前、人里の人間の一部は取り返しのつかない事をしたわ。その話をしようと思つてね。」

「……」

十年前の人里。そこは今よりも殺気だつていた。何時妖怪に家族が殺されるかわからなかったのだ。そして人里の人間にある噂が流れる。人里から少し離れた場所に妖怪を飼う人間が居ると。しかもその人間は外来人で、妖怪は弱つてゐるらしい。その時点で人里の人間の攻撃対象となつてしまった。彼ら二人は石や糞が投げつけられるならまだいい方で、刃物で切りつけられたり、殴られ、蹴られ、人が使えるのかというほどの罵詈雑言で攻め立てられた。

彼らを差別しなかったのは、そう言つた事に寛容な博麗の親父さん、慧音や霖之助、そして先代の巫女だった。特に先代の巫女はよく霊夢を連れてその人間の家に行つて、食糧などを分けたり、簡単な治療を施したりした。何故そんな事をするのかと聞くと、「私のわがままよ。私はね、彼らに希望を持つてゐるの。人と妖怪が手を取り合つて生きてゐる。それつて素敵な事だと私は思うのよね。」

霊夢はと言うと、一生懸命穴を掘る妖怪を眺め、偶に気が向いたら手伝つたりしてゐた。何でも、地下深くに宇宙船が埋まつてゐるらしい。その頃の霊夢は特に宇宙船がなんだかわからなかったが、とりあえず手伝つた。そして偶にその妖怪をいじめる少年達

を追い払っていた。

だが、人間は恐ろしい。人里の自警団が動き、彼らを殺そうとしたのだ。

「待ちなさい！」

「どいてください博麗の巫女！奴らは妖怪と外来人ですよ。どうせそのよそ者は妖怪に操られている。そいつを退治して何が悪いんです。」

「あなた達は誤解している。彼らは決して人間に害を与えるような……」

「煩い！俺は妖怪に母ちゃんを殺されたんだ。その妖怪を殺すだけだ！」

そして、自警団に加え人里の人間も集まってくる。

「博麗の巫女が妖怪の味方をしていいのか！」

「そいつらは人里の異物なんだ。それを排除するだけだ！」

「博麗の巫女に任せてたら何時まで経っても退治できねえ、みんな、やっちなえ！」

そして、暴徒と化した人々が小屋に殺到する。先代巫女も霊夢も抑えようとするが、人の数が多い。そして、妖怪とされている少年と外来人が引きずり出される。

「やめなさい！」

「やめてくれ、良！良！！殺すなら俺を殺せ！」

「煩い！」

一発の銃声が鳴る。妖怪とされた少年は胸から緑色の血を流し倒れる。そして、それ

を悲しむかのように雨が降ってきた。

「良、りよおおおおおおお!!」

「次はお前だ。一緒にあの世に送って……」

その時だった。地面が揺れ、割れる。内部から魚の様な大きな化け物が出てくる。巨大魚怪獣ムルチである。

そう、妖怪と言われていた少年は、小さな力で必死でムルチを封印し、幻想郷を守っていたのだ。

人々は混乱した。いきなりどんな妖怪よりも大きく、強そうな化け物が出てきたのだ。人々は逃げ惑い、助けを先代巫女に求める。だが、先代巫女は膝をつき、顔を下に向けたまま動かない。この時、博麗の巫女の胸の内には憎悪と嫌悪であった。こんな奴ら、守る価値があるのか。一瞬その考えが去来すると、動けない。

その博麗の巫女を動かしたのは、妖怪の死体に抱きつき、泣いていた男が口を開く。

「博麗の巫女さん。頼む、あいつをやっつけてくれ。」

「金山さん……」

「あの化け物は良が必死で封印していた奴だ。あいつが暴れても、良は悲しむだけだ。だから……」

そして、博麗の巫女は……



「ま、まて。」

「……なに？」

霊夢は、話を途中で区切る。

「私は聞いていないぞ、私の息子と一緒に人間が住んでいたのか？」

「ええ。その事なら……ほら、来た。」

そこには、魔理沙に支えられよろよろと歩く金山が居た。

「お、お前は？」

「あんたか、良の親父さんは。」

「そうだ。じゃあ、お前がさっきの話で出てきた……」

「そうよ。」

しばらく、オービと金山は見つめ合う。そして、金山が口を開く。

「なるほど、似ているな。」

「な、なに？」

「良に似ている。悲しいくらいにな。」

そして、金山はついてこいと言って魔理沙に支えられながら名の彫っていない墓へオービ連れていく。

「この下に、お前の子供の遺骨がある。」

「遺骨?」

「この星の風習でな。死体は焼いて骨にして祭るんだよ。」

「そうか……野蛮な地球人らしいやり方だ。」

オービは周囲を見る。

「この穴は何だ。」

「その穴は良が掘っていた穴だ。宇宙船を見つけて、母星に帰るんだと頑張っていたよ。」

「そうか……金山とか言ったな。」

「ああ。」

「リヨは幸せだったか。」

「……幸せだったとは言えない。だが、あいつは気丈に生きた。どんないじめや攻撃を受けても、こんなさびしい星にたった一人でも彼は泣かなかった。彼は本当に強い子供だった。」

「……」

オービは、金山の方を向いた。

「俺はヤプールから自分の子供の死を聞かされた時、頭が真っ白になった。しかも孤独

に、野蛮な人間に無残に殺されたと聞いて酷く人間を憎んだ。だが、お前の様な人間もいるのだな。」

「今の幻想郷に人間と妖怪の差別はあんまりないぜ。」

「あの化け物魚を倒した後、母さんは人間達に言ったわ。あの怪物は私達の罪が生み出した物だと。差別が生んだ悲劇だと。だから、もう二度と繰り返してはいけないと。私達幻想郷の人間は二度と同じ過ちを繰り返さない。これは、博麗の名にかけて誓うわ。」

「……金山とやら、お前、体が死にかかっているな。」

「ああ。一週間ともたないらしいな。」

「メイツ星に来てみればどうだ。我らの医療技術はかなり進んでいる。」

「……！ほんと？金山さん、よかったじゃない。」

「あ、ああ。いいのか？」

「お前は我が息子を救ってくれたいわば恩人だ。悪いようにはしない。」

「……ありがとう。」

「礼を言うのはこつちだ。俺の息子の支えになってくれて、ありがとう。」

そして、金山とオービは固く握手をした。

宇宙船の中、そこでは日向が言いきった。

「人里は、やらん！」

その言葉に一瞬驚くメフィラス。

「ほう、なぜかね？ あんな残酷な事をする人間達なんだよ。」

「たしかに人って言うのは間違いを犯すさ。だけど、人は過ちを正す事も出来るって先生が言ってたぜ。」

「……」

「俺は難しい事はよくわかんないけれど、メイツ星人に俺達の親はずいぶん酷い事をしたんだってことはわかった。なら、俺達はそんなことしない。」

「ほう、君達子供なら種族間の緊張を解決できると？」

「ああ、俺達は昔に学んでいく。そして未来をよりよいものにできるって先生も言ってるし俺もそう思う。メイツ星人の事件から俺達は、差別の恐ろしさを学んだ。いつかきつと、妖怪だろうがあんたら宇宙人……だっけ？とも差別が無くなって友達になれる日が来ると思うぜ。」

「なるほど……さすがです。」

メフィラス星人は拍手する。

「100点満点とはいきませんが、まあ、想像以上の回答ですね。いいでしょう。此処は君達の過去に学ぶ力とやらを信じてみましょう。ですが、これで侵略を諦めたわけでは

ありません。今度はもつと難しい問題を作って君達に挑戦しましょう。今度は、大人も交えてね。では……」

宇宙船の下部から光が降り注ぎ、外に子供たちが出る。

「さて、オービ。そろそろ逃げますよ。」

「ああ、一人人間を連れていくがいいか?」

「……ま、問題ないでしょ。君が責任を持つならね。」

そして、ゾアムルチは回収され、宇宙船は魔理沙たちが反応する前に空の割れ目へと入って行った。

その後の事を話そう。まず、金山の話は聞かないが、霊夢はきつと元気になって戻ってくると思っている。良の墓だが、そこに字が掘られ、子供たちが手を合わせるようになった。あの悲劇を二度と繰り返さないために。そして、良の円盤だが、木更津に頼み、周辺を調査すると手彫りでは決して届かないほどの深さに円盤の反応があった。いつかドリルが完成したら掘ってもらおうつもりだ。

差別をなくせるのは、新しい考えを持つ子供だけだ。そしてそういう子どもを育てるには親の技量もある。差別はいけない。差別する側は醜くなり、される側は悲劇を生む。だが、差別は無くならないだろう。我々人間が心を進化させない限り。

## 信じる事の難しさ・悪魔の裏切り

人間の美德、その一つが信じることだ。自分を信じるからこそ何か行動ができる。他人を信じるからこそ絆が生まれる。人に信じられてこそ、ヒーローは戦える。だが、当然信用を悪用する奴もいるわけで、信じた奴がばかを見ると言う事が度々あるし、様々な情報に踊らされるピエロになってしまう事もあるし、人間を信じない方が楽に生きられると思う人間もいる。何でもかんでも信じると言うのは考えものだ。だが、何も信じてない人間よりも、何かを信じる人間になりたいというのが人間の心理だろう。これは、何かを信じた者のお話。彼らは何かを信じた果てに何を見る。

人里にある寺子屋。そこで教鞭を振るうのは上白沢慧音なのだが、彼女の専門は歴史であり、他の事に関してはどうしても表面的になってしまふ。まあ、幻想郷に生きて微分積分や化学反応式など覚えてもまず役には立たないだろう。だが、慧音は教師として知る楽しさ、興味を持つことの大切さを教えた。だが、幻想郷で頭のいい奴と言えは八雲紫などの大妖怪、または最近話題のM A C隊員くらいだ。前者は論外、後者は忙しそうだ。どこかに頭がそれなりに良くて子供受けする奴はいない物か……そう考えに考え、至った結論は外来人に頼むと言う事だった。何でも外の人間は20歳になっても

まだ勉強するほど勉強している奴が多くいると聞く。とりあえず、募ってみると結構応募が来たので個人面談の上、一人の男を新任教師に任命した。名前は柏木。知識は言わずもがな、人を信じることの大切さをわかっていると感じたので採用した。最近子供が大人を信用しないで困っているという話をよく聞くからだ。あの宇宙船で何かされたのではと訝しがる人間が多いが、恐らくは人里の人間がかつて犯し、隠してきた過ちを知ってしまったからというのが真実だろうと慧音は考えていた。偶に生徒に、

「宇宙人はぜんぶ本当に敵なの？」

と聞かれると普通は言葉に詰まってしまう。違うと言いたいが、今まで幻想郷に襲ってきたのは全て敵意のある宇宙人だった。だが、柏木は、

「違うよ。宇宙人の中にも良い奴はいるし、悪い奴もいる。人間と同じだ。だから、人間と同じように一度信じてみるのが大切なんだよ。」

ときっぱり言える人間だ。そこに感心したのだ。少し変わっている所と言えば、なぜか両手に指輪をしているという点だ。彼には少々複雑な算数と理科を担当してもらう事にした。

今日も全ての授業が終わり、柏木と慧音は後片付けをしていた。そんな時だった。空を、宇宙船が飛行していったのは。

「……………いまのは。」

「行つてみましょう。慧音先生。」

二人は外に出る。すると、空では赤と銀の鉄の鳥……マツキー三号と言うらしい……が宇宙船を撃墜し、宇宙船が人里の外に墜落する所だった。軽い地響きと共に宇宙船が地面に落ち、そこに人が集まっていく。

すると、墜落した宇宙船の下部が開き、中から一人の頭から血を流した少年がふらふらと出てきて、倒れる。集まった人里の人間は顔を見合わせ、どうするか話し合う。とりあえず、宇宙人の様だから捕らえておこうとその少年を自警団の人間が引きずつて行こうとする。だが、慧音はそれを止めた。

「待つてくれ。」

「慧音先生。どうしました？」

「その少年は怪我をしているじゃないか。治療しないと……」

「何を言っているんです。こいつは宇宙人ですよ！」

「だがその少年が我らに敵意を持っているかどうかわからないじゃないか。」

「もし敵意を持っていたらどうするんですか。」

「お前達はまたあの過ちを繰り返す気か！」

「う、そ、それは……」

結局人里の人間が折れ、少年は慧音と柏木が引き取った。家に戻った慧音は、その少



年の頭に包帯を巻いてやる。

「痛かったろう。だが、もう大丈夫だ。」

「……」

「お前、名前は？」

「……シロウ。」

「シロウか、いい名だな。どうしてここに来たんだけ？」

「追われていたんだ。ヤプールに。」

「ヤプールだと！」

柏木は驚く。外の世界でヤプールの名を知らないのは赤ん坊くらいの物で、恐怖と絶望の象徴。柏木の子供の頃に地球に進行してきて、柏木自身、ヤプールには苦い経験があった。

「僕の母星はヤプールに滅ぼされたんだ。それで逃げてきた。」

「そんな、故郷を……」

「そうか、大変だったな。」

柏木は優しく頭を撫でてやろうとした。だが、その手がなぜか弾かれた。

「……！」

「……？どうした、柏木。」

「いいいや、何でもない。」

柏木は、撫でようとした右手を見る。一体どうしたというのだろう。

「とにかく、頼る者が居ないというのは寂しいだろうな……そうだ、君を受け入れてくれる人が現れるまで私と暮らすか？」

「え、いいの？」

「ああ。」

慧音はニコリとしていった。シロウは喜んでその提案を受け入れた。

それと同時に、木更津達と自警団が墜落した宇宙船を調べていた。宇宙船の内部は綺麗と言うより、何も無い。

「……なるほど、この宇宙船に乗っていたのは子供が一人、か。」

「はい。その子供は怪我をしていました。」

「そうか、悪い事をしたな……」

木更津の表情は晴れない。自警団や大田達はそれが子供の乗る宇宙船を撃ち落としましたからだと思っていた。だが、実際は違う事を木更津は考えていた。

「なあ、おかしいと思わないか？」

「え、何がですか？」

「この宇宙船だ。内部に何もなさすぎる。コールドスリープ装置らしきものすらない。」

それに、子供一人が乗っていたにしては広すぎるしな。」

「え、じゃあ木更津さんは、この宇宙船に乗っていた宇宙人を怪しく思ってるんですか？」

「ああ。まあ、防衛チームとして疑ってかかるのが癖になってるだけかもしれないが、その子供、少し注意しておいた方がいい。」

「わかりました。」

そして次の日、寺子屋ではシロウの紹介が行われていた。慧音の口から、ヤプールと言う悪魔によって故郷を滅ぼされ幻想郷に逃げてきた事が伝えられた。

「みな、仲良くするんだぞ。」

その言葉に反応する子供は少ない。まあ当然かと柏木と慧音は思った。やはり、宇宙人と言うのは今までの経験上怖いのだ。だが、一番に動いた奴が居た。日向である。日向は立ち上がると、シロウの前に来て、手を出した。

「俺、日向って言うんだ。シロウ、友達になろうぜ！」

「……う？この手は？」

「え？ああ。これは握手って言ってよろしくって意味さ。」

そして、日向はシロウの手を握った。そこから、日向の友達、さらにその友達とシロウと握手する子供たちが増えていった。

「僕と友達になってくれるの?」

「そうさ。一人ぼつちは寂しいもんな。一緒に色んな事やろうぜ。」

「……うん。」

こうして、日向の行動でシロウは寺子屋の仲間溶け込んでいった。

日向は正直頭が悪い。なので柏木の授業が苦手だ。だが、シロウはその問題をすらすらと答えていった。そして、日向にも快く答えなどを見せてくれた。

シロウは運動音痴だった。だが、日向の協力もあつて体育の時間も何とかなつた。

日向とシロウ、お互いの長所で短所を補う友人、いや、親友と言つた方がいいかもしれない。親友になつて行つた。

とある日、日向はレイビーク星人との戦いのあとで宿題をやってくるようになつたが、間違いが多い。それをシロウが直してやつている。それを微笑ましそうに見る柏木と慧音。その時だった。空が割れる音が響いたのは。

「き、来たー!」

「な、何だ。」

柏木達は外に出る。すると、割れた空から怪獣……いや、超獣が下りてくる。蟬のような頭部をした不気味な化け物、そう、大蟬超獣ゼミストラである。そして、空から声が聞こえる。

「シロウを我々に渡すのだ。さもなければこのゼミストラーによつて人里を炎で包んでやる。」

人里の人間は逃げ惑う。慧音と柏木は急いで子供達を避難場所へと連れていく。そして上空では、霊夢、魔理沙、早苗にマツキー3号がゼミストラーへと向かつていつていた。だが、さすがは怪獣より強い超獣と言うべきか、その攻撃にびくともせず、炎を吐いて迎撃する。すると、魔法の森の方角に赤い光が上がる。そして、そこには柏木がよく知るヒーローが現れた。

「ウルトラセブン！」

そう、アリスの家にいたセブンも参戦したのだ。さすがに偽物とはいえセブンの参戦は分が悪いと思つたのか、ヤプールはゼミストラーを空のひび割れに撤退させる。

「いいか、シロウを我らに渡さなければ超獣軍団で幻想郷を蹂躪してくれる！」

そう捨て台詞を吐いて、ひび割れは消えた。

避難所である命蓮時ではシロウをヤプールに渡そうとする大人達と、シロウを守る子供たちが対立していた。

「なぜわからないんだ。その宇宙人をあの侵略者に渡せば済む話なんだ。」

「うっせえ！シロウをあんな侵略者に渡すもんか！」

「日向、お前はまだ子供だ。大人の言う事を聞け！」

「あんたら大人なんて信じれるもんか。メイツ星人の時みたいにな、結局は宇宙人が怖いだけじゃないか。」

「話しをすり変えるな。あれとこれは違う。」

話しあい、と言うより怒鳴り合いは平行線をたどる。大人もメイツ星人の悲劇を引き合いに出されると弱い。が、日向達の理論は所詮子供の駄々だ。そんな中、霊夢達が来る。

「どうしたのよ。いい年した大人と子供が怒鳴り合って。」

「博麗の巫女様……」

「あんな侵略者の言う事なんて聞く必要はないわ。それとも何、私達が信じられないの？」

「い、いえ、そう言うわけでは……」

「はい、これでお終い。今は大人と子供が争っている場合じゃないの。ところで……」  
霊夢は、シロウに近づくと、

「あんた、どこかで会った事あったっけ？」

「え、いいえ。初対面です。」

「そうかしら？」

「何だよ巫女様、あんたまでシロウを差し出せって言うんじゃないだろうな。」

「威勢がいいわね。別にそんな事言わないわよ。」

そして、避難した者たちが家路につこうとする頃、慧音に霊夢が話しかける。

「あのシロウって子供、信用しない方がいいわ。」

「な……お前がそんな事言うなんて、どうしたんだ。」

「勘よ、一度も間違えた事がない私の勘がこう言ってるの。あの子供は信用しちゃだめだって。」

「……頭の片隅にでも置いておくよ。」

その夜の事であった。柏木は星空を見ていた。そして、自分の両手にはめてある指輪、ウルトラリングに目を移す。

「北斗さん……どうか俺に、子供達を守る力を。」

そうつぶやくと、寺子屋から家に戻ろうとした。その時、寺子屋に向かい動く影を見つけた。超獣が出たので夜間は外出禁止のはずだが……

「おい、待て！」

柏木はその影を捕まえる。それは、日向だった。

「日向！夜は出歩くなと言われているだろ。」

「先生、見逃してくれ！俺は、シロウを連れてここから逃げるんだ。」

「何を言ってるんだ！」

「大人達はシロウをあのかっぱールだがヤプールだかとかいう侵略者に渡そうとしてるんだ。だから……」

「日向……」

ああ、日向はなんて友達思いなのだろう。そう柏木は思った。できる事なら日向かいに協力してやりたい。だが、緊急時こそ一時の感情に流されてはだめなのだ。子供二人で逃げてどうなる。すぐに捕まるのが落ちだ。

「日向、そんなことは俺がさせない。だから、信じてくれ。」

「先生……」

その時だった、寺子屋の奥、慧音の家から激しい物音が聞こえた。驚いた二人は急いで奥へと向かう。そこでは、信じられない光景が広がっていた。

血を流す慧音と、不気味な顔をしたシロウ。この状況を説明するには、少し時間をさかのぼる必要がある。

少し前、慧音はあのヤプールと言う侵略者にどう対応するか頭を悩ませていた。そんな時、後ろに気配を感じる。シロウだ。

「慧音先生。」

「なんだ、シロウ。もう眠らなくては駄目だろう。」

「あなたにお別れを言いに来ました。」



「…………え？」

突然の言葉に、慧音は固まる。

「僕はあなたのおかげで子供達の環にすんなりと入る事が出来ました。そして、子供たちとの信頼関係を構築する事も出来た。」

「なんだ、いきなり。」

「そして僕と言う存在がああ愚かなメイツ星人とメフィラス星人の残した子供と大人の火種を燃やせるほどになるまでになりうる信頼関係築けた。」

「…………？何を、言つて…………」

その時、慧音は気がついた。シロウは、いつもの顔ではなかった髪は逆立ち。赤く口は裂けていた。

「全てはあなたが子供は純真だと思いきんでくれていた事のたまものです。本当にありがとうございます。お礼に楽に殺してあげます。」

「…………！」

慧音はとつさに回避した、だが、シロウの口から発射された針は左肩を貫いた。

「ぐ、ぐぐう…………」

「避けないでください。痛いだけですよ。」

そこに柏木と日向がやってきたのだ。

「シロウ、お前……何やってんだよ。」

「見てわからない？日向君。慧音先生を殺そうとしてるんだよ。」

その言葉に、日向は気が遠くなる思いがした。信じたくない。だが、目の前で起こっているのは現実だ。

柏木はシロウを睨みつけ、言う。

「おまえ、何者だ？」

「ぼく？僕はシロウ……と言うのは仮の名前。本当の名前はヤプール人バキシムって言うんだ。」

「ヤプール人……！バキシム！」

なんて事だ。ただの可哀そうな宇宙人だと思っていたのが、実はヤプール人だった。同じだ。あの時と全く同じだ。

「日向くん。君には助けられたよ。ほどよく子供と大人の間には確執を生んでくれた。」

「ふ、ふざけんな。じゃあ、今までののは……」

「全部演技だよ。いや、子供の振りをするのは大変だった。馬鹿なクラスメイトに合わせるのもね。」

「く、くそお！」

日向はシロウ……いや、バキシムに殴りかかる。だが、逆に吹き飛ばされる。

「日向！」

「日向君、最後に言っておくよ。僕はねえ……」

——友情つてのが大っきらいなんだ。

「う、うわああああああああああ！」

「日向、気をしつかり持て！」

「さて、本来なら事故に見せかけて慧音先生を殺す所なんだけれど、目撃者が多いしね、纏めて片付けてやるよ。」

すると、バキシムの体に変質していく。巨大に、醜悪に。そう、こいつこそ超獣の中でも老人の心に潰け込んだ特に悪質な作戦を行った一角超獣バキシムなのだ。バキシムは、慧音の家を破壊しつつ巨大化した。そして空が割れ、ゼミストラーも現れる。

部屋の中には、絶望感が漂っていた。日向も、慧音も下を向き、涙を流している。そして、柏木は怒りに燃えていた。ヤプールのあまりにも悪質な作戦に。

「……許さん。ヤプール人バキシム！貴様は絶対に許さん！」

柏木は両手を構える。そして心の中でつぶやく。

「北斗さん。僕に、力を貸してください。」

「ああ、共にヤプールの野望を砕くぞ。」

そして、両手のウルトラリングを合わせる。そして、柏木は光になる。

デアアアアアアアア

バキシムは驚いていた。なぜ、貴様がここにいる。ウルトラマンA!

柏木は、幻想入りする前にウルトラマンAこと北斗星司と会っていた。そこで、とある世界に危機が迫っている事を聞き、一回だけウルトラマンAに変身する力をもらっていたのだ。

ウルトラマンAはバキシムを掴むと、力一杯人里の外へと投げ飛ばした。そして、ゼミストラーとバキシムの二大超獣と二対一の戦いを挑む。バキシムとゼミストラーは炎でエースを焼こうとする。だが、エースはウルトラネオバリアを張り防ぐ。そして、アロー光線、パンチレーザーを連続で使用しけん制する。そうこうしていると、赤い光が立ち上り、セブンが参戦する。そして、いざという時のために命蓮寺で待機していた霊夢達が飛んでくる。

「キヤー! 霊夢さん、エースですよ、エース! 切断技のスペシャリストですよ。」

「あーはいはい。」

形勢は逆転した。ゼミストラーはセブンのアイスラッガーで炎を吐く嘴を切断されると、ワイドショット、マスタースパーク、八坂の神風を連続で受け大爆発を起こす。

バキシムは頭部の針を飛ばして霊夢を撃ち落とそうとするが、エースのメタリウム光線で撃ち落とされる。そしてエースはウルトラスラッシュでバキシムの首を切り落と

し、その首に霊夢が夢想封印をかけ、大爆発を引き起こす。

エース達の勝利である。だが、勝利を喜ぶのは後だ。エースは変身を解き、柏木となると日向と慧音のいる場所に急いだ。

「日向。」

「先生、俺が馬鹿だったのかな。宇宙人の事を信じた俺が……」

「そんなことは無い！悪いのはあのヤプールだ。」

「それでも、俺、もう何も、信じられないかもしれないよ。」

そこに、いつもの元気な少年日向はいなかった。柏木は、意を決していう。

「日向、その気持ちはよくわかる。」

「嘘だ。」

「嘘じゃない。俺も子供の頃、ヤプールにだまされた事がある。その時はヤプールはサイモン星人と言う宇宙人に化けていてな、俺やその友達はそのいつを守ろうとして、裏切られた。」

「……」

「その時は絶望したよ。もう何も信じられなくなった。だが、その時に俺達のヒーローに言われたんだ。」

——優しさを失わないでくれ。弱いものをいたわり、互いに助け合い、どここの

国の人たちとも友達になろうとする気持ちを失わないでくれ。たとえその気持ちが無百回裏切られよう。それが私の最後の願いだ

「そんな、何百回裏切られても信じろっていいのかよ。」

「ああ。俺も大人になってこの言葉の難しさを知ったよ。だがな、何か信じた物を百回裏切るよりも、何かを信じて百回裏切られた人間の方が俺は尊敬できると思う。」

「……」

「頼む、日向。お前の何者とも友達になろうとする優しさを失わないでくれ。それはお前だけじゃなく人間みんなが本来持つ美德だ。だが、それを実行できる人間は少ない。何回裏切られたって、お前は誇れる人間だ。」

「おれが、誇れる人間……」

「ああ。お前はいるだけで周りが明るくなる、何かを助けられる人間だ。それを誇れ。」

「……わかった。先生。信じる事、辞めないよ。まあ、さすがに何百回も裏切られるのはごめんだけどね。」

「ああ。」

日向は立ち直った。次は、慧音だ。

「慧音。」

「柏木、結局私がした事は何だったのだろうか。宇宙人を信じて、裏切られただけじゃな

く、守るべき人里を危険に陥れた。」

「……」

「私は、教師としてやっていけるのだろうか。」

「慧音、気をしっかり持て！君は先生だろう？先生は子供の事を一番わかかってやらないといけない大人じゃないか。信じなければいけない大人じゃないか。そんな情けない顔を見せないでくれ、君は強い女性だろう。」

「……」

「君は子供に接する時、一回の失敗をねちねち攻めるのか？違うだろう。次を信じるだろ。だから、次を信じるんだ。もしかしたら、次はほんとに助けを求めてくるかもしれない。それを見捨てられる君じゃない。見捨てたら君は一生後悔する。だから、優しい心を失わないでくれ。誰にでも優しくできる君の美德を失わないでくれ。たとえ何回裏切られてもいいじゃないか。その時は、俺が、子供たちがお前を支える。な、日向。」

「ああ。先生、そんな悲しい顔しないでくれよ。俺まで悲しくなっちゃう。先生が裏切られたら、俺が全力で支えるからよ。だから、いつもの慧音先生に戻ってくれよ。」

「日向……ああ、そうだな。こんなの私らしくない。私はお前達の先生だからな。」

「ふう……」

よかった。二人とも立ち直ってくれた。ふと両手を見ると、ウルトラリングは石に

なっていた。だが、外そうとは思わなかった。

その次の日、シロウは新しい故郷を見つけたという事で子供達には納得してもらった。子供たちと大人の確執は難しい問題だ。だが、慧音や柏木はきつとわかりあえると思われている。なんて言ったって同じ種族なのだから、別の種族を信じるよりは簡単に信じられるようになるだろう。慧音も日向もいつもの笑顔に戻った。きつと、次に助けを求めてくる宇宙人を、この二人は決して見捨てない。たとえそれがヤプールの罠であろうと、彼らは信じる強さを持った。信じる強さは不可能を可能にする。きつと、別の星の星人とも友達になれる日が来るかもしれない。そう思う柏木であった。

人を信じると言う事は本当に難しい。誰だつて裏切られるのが怖いからだ。だが、その恐怖を克服してこそ、人はもう一歩進化できる。そう、信じたい。



## 記憶の中の絵

幻想郷縁記である求聞史記に求聞口授。どちらも稗田阿求が著した幻想郷の資料である。この著書は幻想郷の一家に一冊はある本であり、妖怪達の読み物であり、幻想郷初心者である幻想郷に住むことを決めた外来人達の必需品である。この本の魅力は、阿求が自分の能力で蓄積した豊富な知識と鋭い観察眼、そして若干の噂や思い込みと想像力に裏打ちされた危険人物、妖怪等の紹介であるが、魅力はもう一つある。それは、絵だ。求聞史記や求聞口授に添えられた絵、これが二つの資料集に載っている妖怪達の紹介に命を与えていると言つてもいい。これから紹介するのは、絵の物語。かつて絵に夢をのせた少年は、幻想の世界で何を見る。

稗田阿求は長い紙に向かい、書をしたためていた。内容は、幻想郷を襲う侵略者について。幻想郷に起こった事件は何であれ彼女は記録しなければならぬ。それが彼女のライフワークであり、定められた運命なのだから。別に辛くは無い。そんな感情は何百年も前に捨てた。

そんな彼女には数人の協力者がいる。その内の一人が上白沢慧音。彼女の能力は幻想郷縁記をしたためるにあたり非常に相性がいい。それに、人間好きな性格から、もう

阿求は精神年齢的には子供では無いのだが、見た目が子供だからか色々世話を焼いてくれる。それが鬱陶しくもあり、少し嬉しくもある。

もう一人が、今自分のそばで紙に向かい、阿求の横顔を幻想郷では中々手に入らない色鉛筆で描く青年。彼は外来人の中でも古株であり、8年前に幻想入りしてきた青年だ。聞いた話だと、妖怪の山から流れる川を流れてきた所を人里の人間に救われたらしい。その時には妖怪の山で何かあったのか、記憶を全て失っていた。その時彼が持っていたのは、日常最低限の事が出来る程度の知識と、12色の色鉛筆入りの箱のみであった。当時の人里はあまり外来人の事を快く思っておらず、青年もすぐに妖怪の餌になると誰もが思っていたが、そうはならなかった。彼には、絵の才能があったのだ。彼の描く絵には何というか、命があった。そのためか、人里で彼の絵は人気になり、それでもらえる賃金で日々過ごしていた。

そんな彼に、阿求は目をつけた。ちようどそのころ幻想郷縁記に新しい風を取り入れようと思い、どうしようか悩んでいた阿求にとって、外来人の描くその絵は、まさに新しい風であった。阿求は彼に絵を描いてほしいと依頼し、それを青年は快諾した。それからの付き合いで、彼には色々な絵を描いてもらっている。彼は絵の事とかなり行動的で、頼めば魔法の森や迷いの竹林、果てには地底にまで足を運び、その対象の絵を描いてくる。

そんな彼には今、侵略者の絵を描くように頼んでいる……のだが、なぜか阿求の横顔ばかりを描いている。それを見て、阿求は短くため息を吐くと、口を開く。

「権兵衛さん。私ではなく、侵略者の絵を描いてください。」

この青年の事は権兵衛と皆呼んでいる。名前が分からないから権兵衛。単純すぎる命名だが、青年は別段気にする様子は無い。

「ん、ちよつと動かないで。もう少しで書き上がるから。」

シヤシヤシヤと気味良い音を鳴らし色鉛筆が動き、絵が完成する。

「できた。見て、阿求。」

その絵はまさに阿求が書をしたためる様子が、まるで写真のように、生きているかのように描かれていた。だが、そんなことはいい。問題は、なぜ侵略者ではなく、阿求を描いているかだ。権兵衛は毎回頼まれなくても阿求の顔を描く。阿求は呆れた顔をした。

「権兵衛さん。毎回毎回私の絵を描かなくてもいいですから、依頼した絵を描いてください。」

「いいだろ？どんな絵を描いても俺の勝ちさ。」

「ええ。別に何をかいてもいいですよ。ただ、今は私の依頼した絵を描いてください。」

「わかったよ。」

そう言うと、権兵衛は別の絵をかき出した。今度は、化け物の絵。奇怪宇宙人ツルク星人、三面怪人ダダ、夢幻怪獣バクゴン……権兵衛にとつてみた事がある侵略者、見た事がない侵略者があるが、見たことのない侵略者については、人や妖怪から聞いた情報を総合し、頭の中に浮かんだ姿を絵にする。全ての侵略者を見事なまでの筆で描く権兵衛。あつという間に絵が仕上がった。

「さすがですね、権兵衛さん。」

「うん。まずまずの出来栄えだね……」

見事なまでの怪獣、宇宙人の絵。だが、権兵衛の顔は不満そうだ。

「どうしました？何かさえない表情ですが。」

「ん？ああ。なんか、違うんだよな。」

「違う？」

「なんだかな……俺が書きたいのはこういう絵じゃない気がするんだ。」

「こういう絵じゃない……人物画とかですか？」

「人物画か。人物画も書くのは楽しいんだが、何か違うんだよな。」

「じゃあ、風景画ですか？」

「いや、違う。何か、頭に引つ掛かっているんだよな……もしかしたら、消えた記憶に関わりがあるのかも。」

「そうですか……戻るといいですね。記憶。」

「ああ。」

その日はそれでお開きとなった。阿求は、権兵衛の描いた絵の描かれた紙を大切に仕舞った。

次の日、権兵衛は寺子屋に来ていた。慧音に頼まれ、絵の授業を行うことになったのだ。絵の授業と言っても、権兵衛は自分の絵は自然に手が動く物で、教えるようなものではないと断ったのだが、どうしても頼まれ、引き受けたのだ。とりあえず、二人一組に分かれ、お互いの顔を描かせている。皆、年相応と言うべきか、下手ながらも相手の特徴を抑えた絵が仕上がった。そして授業が終わり、権兵衛が帰ろうと支度をしていると、外で子供たちが地面に絵を描いて遊んでいた。その絵は、人里を救った巨人の絵だった。

「何を描いているんだい?」

権兵衛は子供たちに話しかけた。

「ウルトラマンの絵さ。」

「ウルトラマン……」

「そう、この前幻想郷を怪獣から守ってくれた巨人だよ。柏木先生があればウルトラマンって名前だって教えてくれたんだ。」

ウルトラマン。何か、記憶に引っ掛かる名前だ。あまり良い思い出では無い気がするが。ふと、気がつくくと権兵衛も木の枝を握っていた。

「ヒーローには怪獣も必要だな。描いてやろう。」

そう言うのと、権兵衛は木の枝を地面に滑らせた。すると、ハンペンを半分に切ったような怪獣の絵が出来上がった。

「なに、それ？」

「何って、怪獣さ。」

「なんだか弱っちそうなの〜！」

子供に笑われてしまった。だが、この絵には何か感じる物がある。権兵衛は家に戻ると、紙に向かい筆を滑らせた。出来上がったのは子供たちに描いたあの怪獣の絵。

——俺は、この絵を描いた事がある気がする……そう、こいつは、こいつは……  
思わず権兵衛は外に出て、星空を見た。そこに、何かある気がして。そして、星座を一つ一つ確認する。だが、何か感じとれる星座は見つからなかった。

そして、気落ちして自分の家に戻る。そして描いた絵を見るが、この絵も何か足りない気がした。

——そうだ、こいつは何か、怪獣にしては凶暴そうではないな。

その考えに至ると、再び紙に向かい、絵を描く。今度は、もっと凶暴な風に。

出来上がった絵を見て、権兵衛はあつと声をあげた。

この怪獣……こいつの名は……！

権兵衛は頭を抱えた。頭に、いや、脳に激痛が走る。権兵衛は頭を抱え、ふらりとする。すると、絵が手を離れ、外へと飛んで行った。

「あ、ああ……」

それを追いかけてしようとするが、頭に走る激痛で意識を失う。そして、紙は外へと飛んで行った。

この時、運命の悪戯か、幻想郷に特殊な宇宙線が降り注ぐのが木更津達のチームによつて観測された。その宇宙線は怪獣の絵が描かれた紙に降り注がれる。

次の日、朝日が昇るのと同時に起きる男が居た。その人間が外に出て、背筋を伸ばすと、目の前に怪獣が居た。

「……え？」

その瞬間はあつげにとられたものの、急いで大声を出す。

「みんな起きろー!!化け物だー!!」

その大声に、眠い目を擦った者達の家から出てくる。すると、彼らは人里のど真ん中に居座る巨大な生物を見てしまった。眠気など一瞬で吹き飛び、人々は慌てて避難所になつている命蓮寺へと走っていく。

人々が逃げ出している人里。しばらくして、権兵衛は眼を覚ます。そして、人里に鎮座する巨大な怪獣を見つけると、思わず口が動いた。

「ガ……ヴァ……ドン。」

権兵衛は怪獣に駆け寄っていく。

「ガヴァドン!!」

そして、怪獣の巨体に抱きついた。そう、この怪獣こそ、かつてこいつを倒そうとしたウルトラマンが子供たちに大ブーイングを受けた怪獣、二次元怪獣ガヴァドンBである。

「ガヴァドン……ガヴァドン！おまえ、蘇ったのか！」

ガヴァドンは答えず、目を瞑ったままで、でかいいびきをかいている。だが、嬉しかった。何故かわからないが、猛烈にうれしい。これも自分の記憶と何か関係があるのか？そう思いつつ、体をなでてやる。

だが、ほのぼのとした時間は長くは続かなかった。何か、飛行機の飛ぶ音が耳に聞こえ、空を見ると、赤い鳥、マッキーがやって来ていた。さらに、神社の方からは巫女と魔法使いがやってくる。こいつら、ガヴァドンを攻撃する気だ……！

権兵衛は声の限り叫ぶ。

「やめてくれー!!こいつは寝ること以外何もできない無害な奴なんだ!!お願いだから攻



撃しないでくれー!!」

その言葉は木更津達には届いた。

「ここからの攻撃では人里を傷つける恐れがある。あの青年の言うことも気になるな。よし、大田と木村は地上へ展開。俺も降りる。」

「了解!」

「なあ霊夢。あいつ何か言ってるぜ。」

「ふうん。怪獣を守る人間ねえ……珍しい。」

「どうする?」

「問答無用……と行きたいけれど、そうもいかないわね。仕方がないわ。降りて話を聞きましょう。」

こうして、木更津、霊夢、魔理沙が権兵衛の所に集まる。

「うへー! 近くから見ると山みてえだな。しかもいびきがうるさい。」

「怪獣なんてそんなもんでしょ。で、権兵衛さん。この怪獣は、何?」

「こいつは、俺が描いた怪獣なんだ。」

「あんたが描いた?」

「自分でも驚いている。まさか、絵の世界から怪獣が現れるなんて。でも、以前にもこんな事があったような気がするんだ。」

木更津は首をひねり、データバンクに残っていた怪獣リストを思い出す。その中に、この怪獣が居た気がする。

「怪獣の実体化……謎の宇宙線……そうか、こいつはガヴァドンだな。」

「ええ。そうです。」

「ガバドン？」

「ヴァアです。ガヴァドン。」

「そんなことはどうでもいいのよ。問題は、こいつをどう絵に戻すかじゃない？」

「ああ、その解決方法ならあるぞ。」

「え？」

木更津は、夜を待てと言った。

「この怪獣が実体化していられるのは、日光が存在する間のみだ。夜を待てば自然に絵に戻る」

「へー。そうだ、その絵の描かれた紙はどこにあるの？」

そう言われると、権兵衛はもじもじして恥ずかしそうに言う。

「わかりません。」

「わからない!?!」

「あの紙は風に飛ばされてどこかに飛んでいってしまつて……」

「はあ。そんな大事な物が無いなんて！」

そして霊夢が手分けしての紙の搜索を提案したが、権兵衛が別の案を出した。ナズーリンに頼むのだ。彼女の能力は探し物を探し当てる程度の能力。その力を利用すればあつという間に見つけられるだろうと権兵衛は考えたのだ。そして、権兵衛の案が採択された

ナズーリンをはじめは難色を示した。探すのが何も書かれていない紙きれではあまりやる気は起こらない。だが、それがなければ幻想郷を揺らすほどの怪獣の大きいびきに悩まされる事となると言われ、しぶしぶダウンジングしてもらった。すると、すぐに発見できた。どこかの家の屋根に引つ掛かっていたのだ。それを外すと、権兵衛達は白紙を手に入れる事ができた。後は、夜を待つだけ。だが、待つ時間はかなり長く感じられた。とにかくガヴァドンのいびきはうるさいのだ。さすがは外の世界でもいびきで経済を破たんさせかけたほどの威力。

ようやく夕方になり、怪獣はスウッと消えて行く。そして、絵に戻った。

「はあ、やっと夜になったぜ。」

「全く、この絵は燃やしてしまうか二度と日光の当たらない場所にしまっておきなさい。ただ寝ているだけでも怪獣ってだけで私達には迷惑なんだから。」

「わかりました。」

三人が帰った後。権兵衛は絵をじっと見つめた。こいつの事を知っているのはわかる。なら、俺は誰なんだ？

そして、絵は大切に取っ手の付いた箱にしまっておいた。

これで絵に關した異変は終わった……かに見えた。だが、この異変の本命はまだ起こっていない。

権兵衛がガヴァドン絵をしまう頃、誰にも気づかれぬように空が割れ、青い玉が幻想郷へとやってくる。そして、寺子屋の近くの地面に染み込む。この玉が何を起こすのか、それはまだ誰も知らない。

次の日、権兵衛は阿求の屋敷に来て、日課の挿絵を描いていた。手には、日光が入らないようしっかりと閉めているガヴァドンの絵の入った箱を持って。自分の記憶が戻るときつけになるかもしれない絵だ。肌身離したくない。

その日、寺子屋に子供が集まると、その内の一人が地面に化け物のようなシミがついていることに気づく。そして、授業が終わった後、その子供はそのシミの輪郭に沿って線を描いた。そしてその輪郭線が完成した瞬間、化け物のシミの目に当たる部分が光る。

そしてすさまじい地響きと共に地面から紫の化け物が現れた。そう、このシミこそかつてウルトラマンタロウと戦ったらくがき怪獣ゴンゴロスだったのだ。その巨体を茫

然と見上げる子供。怪獣が右足を上げる。踏みつぶされるといふ瞬間、寺子屋から慌てて出てきた慧音がその子供を抱えて飛び退く。間一髪であった。だが、怪獣の暴れは止まらない。次々と家屋をなぎ倒していき、人々は逃げ惑う。

その怪獣の出現を権兵衛も見ていた。怪獣を見て、阿求が啞然とつぶやく。

「あれが、怪獣……」

屋敷の人間も逃げ惑っている。権兵衛は、阿求に向かって言う。

「阿求、逃げよう。」

「は、はい。」

阿求は立ちあがろうとするが、なぜか立ち上がれない。人里で暴れまわる怪獣を初めて直に見て、腰が抜けてしまったのだ。

「阿求……」

「すいません。腰が……」

怪獣は地響きを立てながらこちらに向かってくる。権兵衛は迷わず阿求の体を抱きかかえ、走りだした。怪獣の歩幅は大きく、全力で走っても逃げきれないのは目に見えていた。そして、権兵衛の後ろで阿求邸を踏みつぶした怪獣の足が迫る。

「ぐ……！」

ここまでは、権兵衛と阿求がそう考えた時だった。ゴンゴロスを突き飛ばし、人里の

外へと押し出す巨体があった。

「あれは……昨日の。」

「ガヴァドン！」

そう、踏みつぶされ、破壊された箱の中の絵が日光を受け、ガヴァドンとして実体化したのだ。だが、昨日のガヴァドンとは様子が違う。目の前のゴンゴロスを睨みつけ、勇ましい鳴き声を上げる。

「ガヴァドン……おまえ、戦ってくれるのか？」

ガヴァドンは権兵衛のつぶやきに答えるかのように一鳴きし、ゴンゴロスへと向かっていく。

怪獣同士がぶつかり合うと爆音と地響きが起こる。だが、最初の不意打ちを受けたゴンゴロスは体当たりをしてくるガヴァドンに対し、距離をとって炎を吐いて応戦する。遠距離攻撃能力を持たないガヴァドンはその炎に苦戦する。元々、ガヴァドン自体そんなに強い怪獣では無いのだ。

「くそーがんばれ、がんばってくれ！ガヴァドン！」

権兵衛は応援することしかできない自分が歯痒かった。すると、昨日と同じく神社の方向から霊夢と魔理沙、そして妖怪の山の方角からマツキーがやってくる。霊夢と魔理沙は鮮やかな弾幕を張り、マツキーもレーザーでゴンゴロスを攻撃する。だが、体の表

面に火花は散るが、効いた様子は無い。

「くそ！二日連続で怪獣騒ぎかよ。しかも硬いし！」

「文句言わない。木更津さん。あの怪獣についての情報は無いの？」

霊夢の質問に、木更津は外部スピーカーで答える。

「今俺の部下がデータベースを漁って調べている。もうしばらく足止めしてくれ。」

「わかったわ。魔理沙、大技行くわよ。」

「おう！」

そして、霊夢の「霊符「夢想封印 集」と魔理沙の「恋符「マスタースパーク」が  
ゴンゴロスの顔面に命中。そして炎が弱まった所にガヴァドンの体当たりが当たり、ゴ  
ンゴロスは倒れる。そこに、木更津からの連絡が入る。

「奴の弱点が分かった。奴は水にぬれると元の絵に戻る。そうすればあいつのコアが現  
れる。」

「また絵かよ。しかも暴れるだけあのいびきのうるさやつよりたちが悪いし！」

「ここら辺であいつを水に浸けられるのは霧の湖だけど、あんなでかぶつ、どう運ぶの  
？」

そう話していると、ガヴァドンが一鳴きした。まるで、俺に任せるとでもいう風だ。

「あら、あの怪獣何かやる気みたいよ。」

すると、ガヴァドンは倒れたゴンゴロスを転がして、霧の湖の方角へと転がしていく。

「なるほど、怪獣には怪獣ってわけか。」

「よし、俺達はあの怪獣が置き上がらないように適度に攻撃するぞ。」

「おう！」

「わかったわ。」

木更津、霊夢、魔理沙の三人は雨のように弾幕を放ち、ゴンゴロスを地面が起き上がれないように押さえつける。そしてガヴァドンはゴロゴロとゴンゴロスを転がし、霧の湖へと突き落とした。

爆音のような水音と共にゴンゴロスの体表面が濃紺色に変わる。そして湖の中でもがくとどんだん表面が崩れていく。最後には青い玉になる。その青い玉は上空へと逃げようとするが、勿論そんなのを異変解決を生業とする二人が逃すはずも無く、必殺の〔恋符「マスターズパーク」〕と〔境界「二重弾幕結界」〕が青い球体に決まる。

霊夢達の勝利である。そして、少し経って霧の湖に権兵衛と彼に抱えられた阿求が来る。

「ありがとう。助かったよ。ガヴァドン。」

権兵衛はガヴァドンをなでてやる。ガヴァドンはくすぐったそうな声を上げる。そして、権兵衛をじっと見た。



「……………？どうした、ガヴァドン。」

すると、ガヴァドンの体ははらはらと光の粒になり、権兵衛に降り注ぐ。

「……………！」

この時、権兵衛の脳に封印されていた記憶がよみがえっていく。かつてムシバと呼ばれ、下手くそな絵しか描けなかった自分。そして友人らと共にガヴァドンを作り上げた事。ガヴァドンを倒そうとしたウルトラマンや科学特捜隊に大ブーイングした事……様々な記憶がまるで花が開花していくかの如く復活していく。

「権兵衛……………さん？」

「阿求。思いだしたよ。全部。」

「そうですか……………よかったですね。」

この時阿求の胸中に不思議な感情が生まれた。何とも言い表せないが、権兵衛の記憶が復活したことについて素直に喜べない自分がいるのに驚いていた。その様子を見て、権兵衛は柔らかに笑う。

「そんな顔しないでくれ阿求。心配しなくても、俺はまだこの幻想郷を離れる気はないよ。」

「……………え？」

「だって、幻想郷の雄大な自然、それに個性豊かな妖怪達。全て描かないとイラストレ―

ターの名がすたるつてもんさ。」

「……権兵衛さん。」

「だから、俺はどこにも行かないから。安心して。」

「……はい。」

こうして外の世界でかつてムシバと呼ばれた青年は、幻想郷で記録していくことになる。幻想郷を襲う強大な怪獣達を、そして次々と現れる個性豊かな妖怪達を。ムシバ青年が外の世界に帰るのは、一体いつのことになるのか。それは、阿求も、権兵衛も知らない。